

研究所報

2017年3月 No.154

子どもたちの幸福感に関する調査と報告



静岡県教職員組合立教育研究所
調査部

目次

所報のあらましと活用の仕方等	1
巻頭言 「多幸現象」への懷疑から 共同研究者 荻野達史（静岡大学人文社会科学部教授）	2
I 調査の概要	4
1 調査の経緯	
2 調査の構成等	
3 調査用紙	
II 結果の概要（単純集計の結果）	13
1 子どもたちの多くが「今の生活は幸せ」「毎日楽しい」	
2 困難にぶつかっても、子どもたちは前向き	
III 幸福感とその条件	19
1 子どもの「幸福感」に影響を与える「友だち関係」	
2 家庭では、親子の日常的なかかわりが大切	
3 親として、「子どもに対する理解」と「言うべきことは言う姿」が大切	
4 まとめ	
IV 自己効力感とその条件	32
1 良好な友だち関係が自信につながる	
2 教員と子どもとの信頼関係も大切	
3 何よりも大切なことは、良好な親子関係	
4 まとめ	
V 困難対応とその条件	42
1 自ら努力できる子どもに共通することは、「聞く力」	
2 相談できる子どもは、自ら努力することができる	
3 まとめ	
VI 対人関係のなかにある相関的構造	49
1 多くの影響を与える対人関係のあり方	
2 友だち関係は向き合える子どもほど満足	
3 話を聞いてくれる親の子どもは、親の話をしっかり聞く	
4 親に尊重されていると思えれば、友だちも尊重する傾向	
VII 全体の構成と未検討部分についての補論	54
1 調査票の構成から	
2 本調査における「幸福感」	
3 未検討の部分について①家族における安心感	
4 未検討の部分について②学級における安心感	
VIII まとめ	58

【所報のあらましと活用の仕方等】

- 1) 第Ⅰ章の3(7ページ)から本調査に使った調査用紙があります。まずは、どんな設問で、どんなことを調査したのかを把握してみてください。
設問のそれぞれをある程度把握していることにより内容を理解することが容易になります。
- 2) 第Ⅱ章(13ページ)は、それぞれの設問について単純集計があります。すべての設問の単純集計があるわけではなく、トピック性の強い結果について分析考察を加え掲載しました。
- 3) 第Ⅲ章(19ページ)から始まる分析・考察には、多くのグラフがあります。そのグラフは、ある設問とある設問の相関関係を調べるためクロス集計という手法をとったグラフです。
第Ⅲ章から第Ⅶ章(53ページ)まではクロス集計を行った結果の分析・考察です。各章の「まとめ」には、指導に生かしたいこと、保護者に伝えたいこと等があります。
- 4) 第Ⅷ章は、ここまでの分析・考察を踏まえ、「まとめ」という形で日常の指導、学級経営、生徒指導、保護者への啓発等に活用していただけるようまとめたものです。

活用例：保護者会での活用の仕方

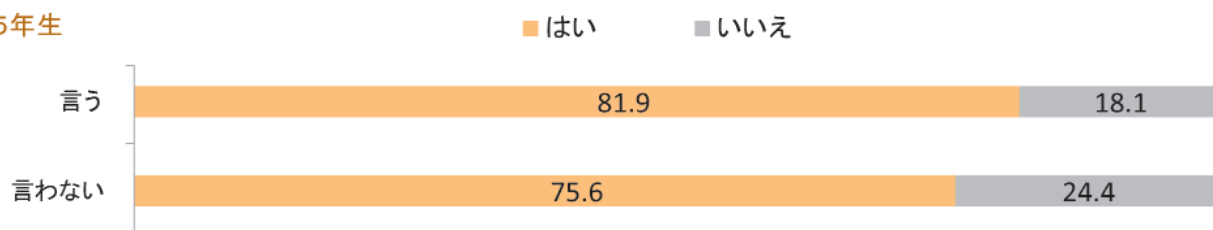
- 1 「お子さんは、難しいことが起こっても、解決できる自信があると思いますか。」
- 2 グラフ36(32ページ)を示し、「友だち関係の満足度と難しいことが起こっても解決する自信があるかどうかについての関係性を表したグラフです。」
- 3 グラフ36の見方と分析を説明し、33ページにある考察を保護者に話す。

【グラフの見方、読み取り方】

20ページにあるグラフ18を例に説明します。

グラフ18 Q17(1) 毎日が楽しい×Q10(3)先生から注意されたり叱られたりした時の行動／自分の意見を言う

小学5年生



これは、先生から注意されたり叱られたりしたとき、「自分の意見を言う」に「はい」と答えた子どもたちが、「毎日が楽しいかどうか」という質問に、「はい」と答えている割合と、「いいえ」と答えている割合を表したグラフです。具体的には、先生から注意されたり叱られたりしたとき、先生に「自分の意見を言う」に「はい」と答えた子どもたちのうち、「毎日が楽しい」に「はい」と答えている子どもが81.9%いるということです。

【執筆者一覧】

第Ⅰ・Ⅱ章	事務局
第Ⅲ章	鈴木利宏（田方支部）、井上幹夫（駿東支部）
第Ⅳ章	深山勝弘（静清支部）、浅岡敏希（榛原支部）
第Ⅴ章	相曽智司（磐周支部）、内山靖行（浜松支部）
第Ⅵ章	荻野達史（静岡大学人文社会科学部）
第Ⅶ章	荻野達史（静岡大学人文社会科学部）
第Ⅷ章	事務局

「多幸現象」への懷疑から

調査部共同研究者 荻野達史

(静岡大学人文社会科学部教授)



「最近、日本の子どもや青年たちの大半は、幸福であるとか、生活に満足しているとか答える傾向がある。この傾向は、意識調査によって確かめられたもので、20代の若者の70%以上が〈満足〉あるいは〈まあ満足〉と答え、中高生の90%以上は〈とても幸せ〉あるいは〈まあ幸せ〉と答えている。これは戦後のどの時期よりも高い水準を示している。」

こうした話を聞いて、皆さんはどのように感じられるでしょうか。この傾向については、5年ほど前、かなりの驚きをもって論じられました。それは、安定した雇用が少なくなり、多くの若者たちが決して望んだわけでもなく、非正規の仕事に就かざるを得ない状況が進行していることが、各種調査によって明るみに出された後でした。また2008年以降、子どもの貧困がクローズアップされました。日本社会がともすると忘却してきた貧困という問題が、社会的に弱い立場にある子どもたちに、それも決して少なくない部分に深刻な影を落とし、そのことが広く認識されてきた時期でもありました。日本社会の来し方行く末を憂える大人たちから見れば、こうした子どもや若者たちのいわば「多幸現象」は不可解に映るわけです。なぜこの時代に？と。

実際、若者たちも「社会」の現状や将来についてはかなり悲観的です。諸外国の若者たちと比べると、悲観的を通り越して絶望的にこの国の将来を見ていると言ってもよいかもしれません。そのため、この「多幸現象」に対して提出された主な仮説は、若者たちの現在享楽指向、とりわけ身近な仲間関係での充足指向を指摘したものでした。「社会」の今や将来とは切り離して、そしてブランド品を追い求めるようなこともせず、もっぱら友人たちとそれなりに楽しく過ごす生活に目を向け、そこに大きな充足感を見出しているというわけです。

この度の教育研究所・調査部もまた、こうした「多幸現象」への懷疑から出発しました。ただし、そこで注目されたものは、やはり教育現場での経験の長い先生方（所員）ならではのものであったと思います。これまでの議論で注目されてきた「社会観」といったものを、あえて小中学生に尋ねるということはせず、むしろもう少し丁寧に、多面的に「幸福」の姿を聞いてみることに。それから、「幸福」と答える生徒たちの日々の生き方の「質」を問うてみることに。この2点が考えられました。

そのため、まず「幸福感」については、心理学的研究も参考にしながら、ただ「今、幸福？」と聞くだけでなく、その程度（「毎日楽しく…」）に関わる質問を増やしたり、その多面性（日々の安心感や自己効力感など）を考慮した質問を加えたりしました。そして、生き方の質としては、困難にも向き合った上での「幸せ・楽しい」であるのかを、とくに問題にしました。つまり、面倒

なことをただ避けて得られた幸せということにはなっていないのか、その点を知りたいと思ったわけです。具体的には、友人・先生・保護者と「意見が異なったときの対応の仕方」や、一般的に難しい問題にぶつかったときの対処方法について聞いてみることにしました。

結果の詳細については、本所報をご覧ください。我々のいささか悲観的な疑いは、よい方向で外れました。しかし、幸福感と友人関係への満足度との関連ばかりでなく、その友人関係のあり方や「困難に向き合う姿勢や力」との関連性にまで言及した調査研究は少なく、その意味でもご関心を持って頂けるトピックの多い報告書になったものと思います。

集計結果や分析・考察をご覧くださいながら、この冊子が、児童・生徒の今の姿や大人としての接し方について、周囲の方と語り合うきっかけになれば望外の喜びです。



I 調査の概要

1 調査の経緯

教育研究所では、かねてから2年の研究期間内で行う調査研究の対象を「子ども」、「教員」、「保護者」としてきました。過年度の調査研究では、2011年度から2012年度は、「教職員のストレス要因調査」を、2013年度から2014年度は、教職員のストレスの要因の一つとして保護者との関係があるのではないかとという仮説のもと、「保護者と教員の意識調査」を研究しました。

2015年度から2016年度の研究では、子どもたちを調査対象にした研究をすすめたいと考え、共同研究者の荻野先生（静岡大学人文社会科学部教授）のご助言をいただきながら、子どもたちの現状はどうか、子どもたちの内面はどうか、子どもたちの何が問題なのか等について議論することから始めました。

第2回調査部会において、共同研究者の荻野先生から興味深い資料が提示されました。それは、2012年度、NHK放送文化研究所が実施した全国的な「中学生・高校生の生活と意識調査」でした。

これによると、現代の中・高校生は、自己の生活や学校生活に対し、非常に高い満足感や幸福感をもっていることがわかります。（資料1参照）。

同調査の学校が楽しいかどうかという設問に対し、中学生、高校生ともに、楽しいという数値が非常に高い（資料2参照）という結果が出ています。

また、2015年度「全国学力・学習状況調査」の質問紙調査にある「学校は楽しいですか」という問いに対して、小学6年生は87%が、中学3年生は84%が楽しいと答えています。

一方、OECDによる世界的な調査では、日本の子どもたちは、将来への夢や希望をあまりもてず、自尊心や自己肯定感が低いと言われています。

また学校では、今の子どもたちは、自尊心や自己肯定感が低く、それが集団生活への不適応、授業や学習への意欲の減退、友だちとの関係づくりの不得手、レジリエンス（精神的回復力、心の復元力）の低さ等につながっているのではないかと分析をしています。

NHK放送文化研究所の調査、全国学力学習状況調査から見える学校や生活に対する満足感や幸福感の高さと、OECDの調査と現場の肌感覚である自尊心や自己肯定感の低さはどうとらえたらよいのかということが研究委員会において大いに議論されました。

そこで、調査部では、このような調査結果と学校現場のとらえ方の違いに着目し、子どもたちの満足感や幸福感について、（本当にそうだろうか）という素朴な疑問から議論を始め、次のような仮説に基づき調査・分析を試みることにしました。

「資料1」あなたは、今幸せだと思っていますか

	中学生	高校生
とても幸せだ	54.7%	41.7%
まあ幸せだ	38.9%	54.8%

「資料2」学校は、楽しいですか

	中学生	高校生
とても楽しい	56.7%	53.7%
まあ楽しい	37.5%	42.2%

〔仮説1〕 学校生活、友だちとの関係、親との関係等において、子どもたちは、トラブルや問題、葛藤等を回避する傾向にあるのではないかと。そして、そのことが、結果として高い満足感や幸福感につながっているのではないかと。

[仮説2] 社会全体の価値観の多様化、親や大人の生き方の多様化により、大志をもって目標に向かうなかで成就感や達成感を味わい、それをもって充実感や幸せを感じるというより、波風を立てずにまあ楽しく生活するという現状享受型の生き方が子どもたちに広がっているのではないか。

調査部としては、この仮説をもとにした研究によって、現場における日常の指導のあり様を見直す契機とするとともに、現場に即した提言ができればと考えました。

2 調査の構成等

(1) 調査の設計

本調査は、子どもたちが生活する様々な場面での子どもたちの内面（どんなことを思っているのか、どんな考えをもっているか等）と子どもたちの現実の行動を調査し、必要に応じて各項目間のクロス集計を試み、現代の子どもたちの現実に迫るものです。

そこで、子どもたちが生活する場面として、①学校、②家庭の二つを考えました。また、場面を問わず、どんなことを思っているのか、どんな考えをもっているか等について③自分自身という、計3つのカテゴリーを考えました。この3つのカテゴリーに対し、④現状の幸福感・満足感かどうか、⑤期待値や理想像をどう描いているか、⑥現実の行動や対処の仕方はどうか、の視点から質問を設計することとしました（下図参照質問は主なもの）。

	④幸福感・満足感	⑤期待値・理想像	⑥現実の行動・対処
① 学 校	Q 1) あなたは授業は <u>楽しい</u> と思いますか。 Q 7) あなたは友だち関係に <u>満足</u> していますか。 1 とても満足している 2 まあ満足している 3 あまり満足していない 4 まったく満足していない	Q 4) あなたは学校での授業や家での勉強について <u>どう考えて</u> いますか。 1 もっとがんばりたい 2 もう少しがんばりたい 3 あまりがんばらなくてよい 4 がんばらなくてよい Q 9) あなたは <u>どんな</u> 友だちが <u>ほしい</u> ですか。	Q 8) あなたは友だちと <u>考えや意見が</u> 違うとき、 <u>どうして</u> いますか。 (1) 自分の考えや意見をはっきり言う Q 10) あなたは先生から注意されたり、叱られたりしたとき <u>どうして</u> いますか。 (3) 先生に自分の考えや意見を言う
② 家 庭	Q 12) あなたは親との関係は <u>うまく</u> いっていますか。 1 とてもうまくいっている 2 まあうまくいっている 3 あまりうまくいっていない 4 まったくうまくいっていない Q 14) あなたの親は <u>どんな</u> 親ですか。	Q 18) あなたは将来 <u>どういう</u> 生活が <u>幸せだ</u> と考えます。 (1) 楽しく、自由に過ごす (4) 家族と仲良く暮らす生活 (5) 夢や目標に向かって頑張る生活 (7) 自分のことより、社会や人のために役立つ生活	Q 13) あなたは <u>ふだんどのくらい</u> 話をしますか。 Q 15) あなたは親と <u>考えが</u> 違うとき、 <u>どうして</u> いますか。 (1) 自分はこう思うとはっきり言う (2) 親の考えや意見をしっかり聞く
③ 自 分 自 身	Q17) あなたは次のことについてどのように感じていますか。 (8) あなたは今の生活を <u>幸せだ</u> と感じますか。 (1) あなたは <u>毎日楽しく</u> 過ごしていますか。	Q 21) あなたは困ったことやいやだなと思うことがあったとき、 <u>どうする</u> ことが <u>いい</u> と思いますか。 (1) 親や友だち、先生に相談して解決できるように努力する。 (2) 自分で解決できるように考える。	Q 20) あなたは困ったことやいやだなと思うことがあったとき、 <u>どうして</u> いますか。 (2) まずは一人でなせかを考え、どうしたらいいかを考える (3) 逃げたりしないで解決のために努力する

(2) 調査の対象

- ・調査の対象は、県下小学校5年生約500人、中学校2年生約500人
- ・県内東部、中部、西部地区の2支部から小・中学校を抽出

東部…田方支部、駿東支部

中部…静清支部、志太支部

西部…磐周支部、浜松支部

(3) 調査スケジュール（研究実績）

	月	研究内容および調査時期等
2015年度	4月	① 子どもたちの今はどうなのか、子どもたちが自分たちの将来像をどう描いているのかなど、子どもの内面を探る調査研究にしていくことを確認した。
		② 学校生活、家庭生活において、子どもの幸福感や満足感、自己肯定感などとの関連性を探る調査研究をすすめることとした。
	9月	③ NHK調査に見られる今の子どもの高い幸福感や満足感について、「本当にそうだろうか」「子どもたちの中に、トラブルや葛藤を回避する傾向はないだろうか」という議論がされ、ここに焦点を当てる研究をすすめることとした。
	3月	④ ③を踏まえ、調査の目的、規模、仮説等を整理し、研究テーマを「子どもの幸福感と満足感に関する調査」とした。 ⑤ 調査の設計について議論し、調査項目、調査用紙を検討した。 ⑥ 10月中旬に調査を実施し、11月中旬に回収し、集計を行った。 ⑦ 単純集計とクロス集計をもとに、考察をすすめた。 ⑧ 次年度の研究の方向性と内容等について確認した。
2016年度	4月	⑨ 今年度の研究の方向性と内容等について確認し合うとともに、新たにクロス集計が必要な項目を拾い出すこととした。
		⑩ 課題や追究すべき内容を明確にし、研究をすすめた。 ・高い幸福感・満足感と子どもたちのトラブルや葛藤を回避する傾向と何らかの因果関係があるかどうか。 ・現状の幸福感・満足感と自分が描く期待値、理想像と現実の行動や対処の具体について、それぞれの関係性を洗い出した。
	9月	・幸福感・満足感を支えるものは何か、困難場面を解決する自信のある子は、どういう行動をとるのか、周囲（友だち、親）との関係性はどうか、などについてブロックごとのプロジェクトチームで考察をすすめた。
	3月	⑪ 所報の体裁、内容等について話し合った。 ⑫ プロジェクトチームの考察を交流し合い、検討を加えた。 ⑬ 考察をまとめ、研究成果として所報を作成した。 ⑭ 所報をもとに、各支部での還流学習会において成果を発表した。

調査用紙

この調査は、みなさんの思っていることや考えていることなどを聞くものです。よく考えて、正直に答えてください。

【回答する際に、気をつけてほしいこと】

- ・ 調査用紙に、名前は書きません。
- ・ 回答は、質問に対し四つの中から自分の考えに一番近いものを選んで一つ○をつけるものと、質問に対し「はい」か「いいえ」を選んで○をつけるものの2種類があります。
- ・ 質問や選択肢をよく読んで回答してください。

みなさんが回答した内容について、友達や先生方には知られることはありません。安心してください。

静岡県教職員組合立教育研究所

【学校生活に関して】

1 あなたは、授業は楽しいと思いますか。

- 1 とても楽しい
- 2 まあ楽しい
- 3 あまり楽しくない
- 4 ぜんぜん楽しくない

2 あなたは、自分の成績をどう思いますか。

- 1 とても良いほうだ
- 2 まあ良いほうだ
- 3 あまり良くないほうだ
- 4 まったく良くないほうだ

3 あなたは、授業や勉強がわからないとき、どうしていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|----------------------|------------------|
| (1) 先生に聞く(質問する) | (はい・いいえ) |
| (2) 友だちに聞く(質問する) | (はい・いいえ) |
| (3) 塾で聞く(質問する) | (はい・いいえ・塾にっていない) |
| (4) 親に聞く(質問する) | (はい・いいえ) |
| (5) 家でもう一度勉強する | (はい・いいえ) |
| (6) わからなくてもそのままにしておく | (はい・いいえ) |

4 あなたは、学校の授業や家での勉強についてどう考えていますか。

- 1 もっとがんばりたい
- 2 もう少しがんばりたい
- 3 あまりがんばらなくてよい
- 4 がんばらなくてよい

5 あなたは、進学についてどのように考えていますか。

- 1 中学校まで
- 2 高等学校まで
- 3 大学まで

6 あなたは友だちといっしょにいると楽しいですか。

- 1 とても楽しい
- 2 まあ楽しい
- 3 あまり楽しくない
- 4 まったく楽しくない

7 あなたは、友だち関係に満足していますか。

- 1 とても満足している
- 2 まあ満足している
- 3 あまり満足していない
- 4 まったく満足していない

8 あなたは、友だちと考えや意見が違うとき、どうしていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 自分の考えや意見をはっきり言う | (はい・いいえ) |
| (2) 友だちの考えや意見をしっかり聞く | (はい・いいえ) |
| (3) お互いによく話し合う | (はい・いいえ) |
| (4) 仲が悪くなるといやなので言わない | (はい・いいえ) |
| (5) 友だちとめんどろな話はしたくないので言わない | (はい・いいえ) |
| (6) 友だちに合わせるようにする | (はい・いいえ) |

9 あなたは、どんな友だちがほしいですか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|------------------------------|----------|
| (1) だめなことは、だめと言ってくれる人 | (はい・いいえ) |
| (2) 考えが違う場合、違う考えをはっきり言ってくれる人 | (はい・いいえ) |
| (3) けんかや言い争いになっても仲直りできる人 | (はい・いいえ) |
| (4) 何でも話ができる人 | (はい・いいえ) |
| (5) 自分のお手本になるような人 | (はい・いいえ) |
| (6) 話を適当に（うまく）合わせてくれる人 | (はい・いいえ) |
| (7) いっしょにいと、安心できる人 | (はい・いいえ) |

10 あなたは、先生から注意されたり、叱られたりしたとき、どうしていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|-----------------------------|----------|
| (1) 先生の言うことが正しいと思ったら従う | (はい・いいえ) |
| (2) 先生の言うことが間違っていると思ったら従わない | (はい・いいえ) |
| (3) 先生に自分の考えや意見を言う | (はい・いいえ) |
| (4) 先生が言うことだから従う | (はい・いいえ) |

- (5) 先生に言ってもしょうがないので（聞いてくれないので）従う (はい・いいえ)
(6) 真剣には考えないで、適当に従う (はい・いいえ)

11 あなたは、どんな先生がいいですか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- (1) わかりやすく楽しい授業をする先生 (はい・いいえ)
(2) よく話をしたり、遊んだりしてくれる先生 (はい・いいえ)
(3) 良いことは「良い」、悪いことは「だめ」と言う先生 (はい・いいえ)
(4) 子どもの考えや意見を大事にしてくれる先生 (はい・いいえ)
(5) 私のことをわかってくれる先生 (はい・いいえ)
(6) 自分の考えをはっきり言う先生 (はい・いいえ)
(7) 何でも一生懸命な先生 (はい・いいえ)

【家庭生活に関して】

12 あなたは、親との関係はうまくいっていますか。

- 1 とてもうまくいっている
2 まあうまくいっている
3 あまりうまくいっていない
4 まったくうまくいっていない

13 あなたは、ふだん、親とどのくらい話をしますか。

- 1 とてもよく話す
2 まあ話すほう
3 あまり話さない
4 まったく話さない

14 あなたの親は、どんな親ですか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- (1) 何でも話し合うことができる (はい・いいえ)
(2) 自分のことをわかってくれる (はい・いいえ)
(3) 自分の話をよく聞いてくれる（尊重してくれる） (はい・いいえ)
(4) 自分のことをほめてくれる (はい・いいえ)
(5) 自分のいけないところは何でも注意する (はい・いいえ)
(6) 自分のことを気にかけてくれない (はい・いいえ)
(7) 一緒に遊んだり、お出かけに連れていったりしてくれる (はい・いいえ)

15 あなたは、親と考えや意見が違うとき、どうしていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 自分は、こう思うとはっきり言う | (はい・いいえ) |
| (2) 親の考えや意見をしっかり聞く | (はい・いいえ) |
| (3) 親がわかってくれるまで話し合う | (はい・いいえ) |
| (4) 言っても仕方がないのでだまって親の考えに従う | (はい・いいえ) |
| (5) わかったふりをして、適当に返事をする | (はい・いいえ) |
| (6) 言っても聞いてくれないので話はしない | (はい・いいえ) |
| (7) 気まずくなるので従う | (はい・いいえ) |

16 あなたの家のことを答えてください。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|--|----------|
| (1) あなたの家は、家族でニュースを見ますか | (はい・いいえ) |
| (2) あなたは、自分だけの部屋がありますか | (はい・いいえ) |
| (3) あなたは、自分専用のパソコン、タブレットを持っていますか | (はい・いいえ) |
| (4) あなたは、自分の携帯電話やスマートフォンを持っていますか | (はい・いいえ) |
| (5) あなたの家では、家族旅行に行きますか | (はい・いいえ) |
| (6) あなたは、学習塾や習い事（ピアノ、習字など）、スポーツ少年団に通っていますか | (はい・いいえ) |
| (7) あなたの親は、新聞をよく読みますか | (はい・いいえ) |

【自分に関して】

17 あなたは、次のことについてどのように感じていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|-------------------------------|----------|
| (1) 毎日を楽しく過ごしていますか | (はい・いいえ) |
| (2) 進学や仕事のことなど、将来のことが心配ですか | (はい・いいえ) |
| (3) 学級の中で、安心して生活していますか | (はい・いいえ) |
| (4) 家族の中で、安心して生活していますか | (はい・いいえ) |
| (5) つらいことがあっても、立ち向かっていけますか | (はい・いいえ) |
| (6) 特に楽しみにしていることがありますか | (はい・いいえ) |
| (7) 難しいことがおこっても、解決できる自信がありますか | (はい・いいえ) |
| (8) 今の生活を幸せだと感じますか | (はい・いいえ) |

18 あなたは、将来どういう生活が幸せだと考えますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|-----------------------|----------|
| (1) 楽しく、自由に過ごす生活 | (はい・いいえ) |
| (2) 自分のやりたいことができる生活 | (はい・いいえ) |
| (3) 偉い人になって、お金に恵まれた生活 | (はい・いいえ) |

- | | |
|---------------------------------|----------|
| (4) 家族と仲良く暮らす生活 | (はい・いいえ) |
| (5) 夢や目標に向かって、がんばる生活 | (はい・いいえ) |
| (6) 難しいことや大変なことはしないで、ゆったりと過ごす生活 | (はい・いいえ) |
| (7) 自分のことより、社会や人のために役立つ生活 | (はい・いいえ) |

19 あなたにとって、困ったことやいやだなと思うことはどんなことですか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|--------------------|----------|
| (1) 健康や体のこと | (はい・いいえ) |
| (2) 勉強や成績のこと | (はい・いいえ) |
| (3) 学校、先生のこと | (はい・いいえ) |
| (4) 友だちのこと | (はい・いいえ) |
| (5) 部活動やスポーツ少年団のこと | (はい・いいえ) |
| (6) 異性とのつきあいのこと | (はい・いいえ) |
| (7) 家族や親のこと | (はい・いいえ) |
| (8) 将来のこと | (はい・いいえ) |
| (9) 世の中の出来事 | (はい・いいえ) |

20 あなたは、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうしていますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|-----------------------------------|----------|
| (1) 一人で考え込んで、不安や心配になる | (はい・いいえ) |
| (2) まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える | (はい・いいえ) |
| (3) 逃げたりしないで、解決のために努力する | (はい・いいえ) |
| (4) 友だちや親、先生に話し、相談する | (はい・いいえ) |
| (5) 真剣に考えないようにするようにする | (はい・いいえ) |
| (6) 何か楽しいことをしたり、別のことを考えたりして気分を変える | (はい・いいえ) |

21 あなたは、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうすることがいいと思いますか。次の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- | | |
|---|----------|
| (1) 親や友だち、先生に相談して解決できるよう努力する。 | (はい・いいえ) |
| (2) 自分で解決できるように考える。 | (はい・いいえ) |
| (3) 自分のことで、困ったことやいやだなと思うことがあっても、できるだけ考えないようにする。 | (はい・いいえ) |
| (4) 自分の身の回りで困ったことやいやだなと思うことがあっても、かかわらないようにする。 | (はい・いいえ) |
| (5) 同じことが起こらないように、自分を変えるようにする | (はい・いいえ) |

Ⅱ 結果の概要（単純集計の結果）

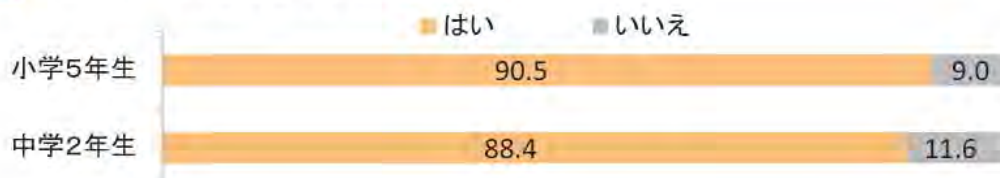
第Ⅱ章では、調査の各質問項目の単純集計に基づき、子どもたちの幸福感・満足感についての状況や、子どもたちが困難にぶつかったときの対応についての回答を報告します。

1 子どもたちの多くが「今の生活は幸せ」「毎日楽しい」

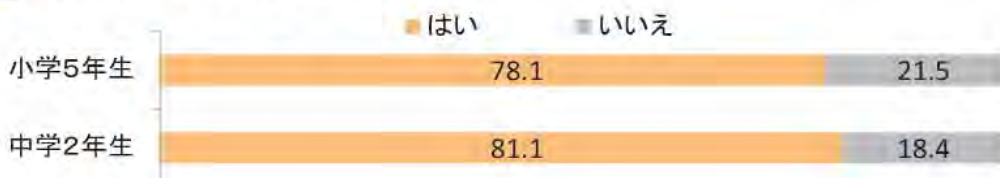
(1) 子どもたちが思う幸福感・満足感

子どもたちの幸福感・満足感を、「今の生活を幸せだと感じますか」「毎日楽しく過ごしていますか」という2つの質問より調査しました。

グラフ1 Q 17（8）今の生活を幸せだと感じますか



グラフ2 Q 17（1）毎日楽しく過ごしていますか



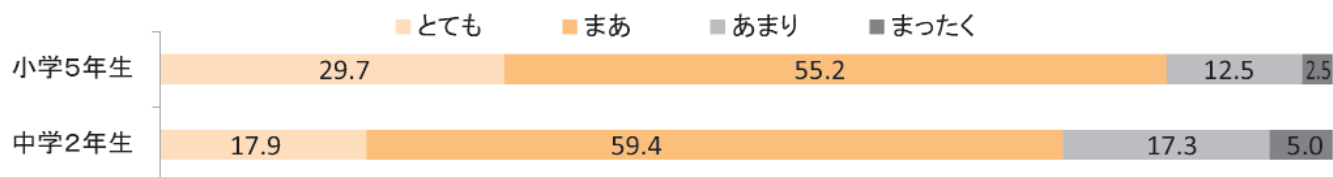
グラフ1からわかるように、小・中学生の約9割が今の生活を幸せだと感じています。また、グラフ2では、小・中学生の約8割が毎日楽しく過ごしていると回答しています。

4ページに記載した2012年度にNHK放送文化研究所が実施した全国的な「中学生・高校生の生活と意識調査」による結果、また、静岡県においては2015年度の「全国学力・学習状況調査」と同様の結果を示しています。つまり、静岡県の小・中学生の多くは毎日楽しく過ごし、今の生活を幸せだと感じているということです。

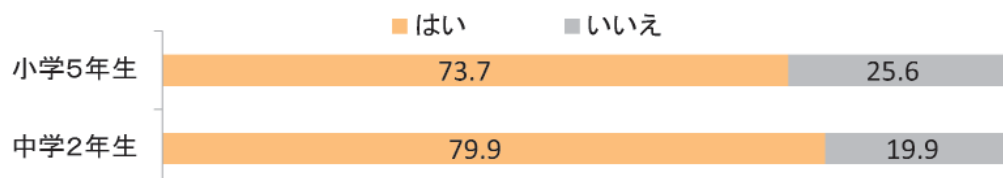
(2) 子どもたちの「楽しい」「幸せ」につながる学校、友だち、家族

子どもたちの幸福感・満足感を裏付けていることの詳細についてはⅢ・Ⅳ・Ⅴ章にて探っていきませんが、子どもたちをとりまく環境が当然大きく影響してくるだろうと思います。ここでは、学校、友だち、家族との関係について質問した項目の単純集計を上げておきます。

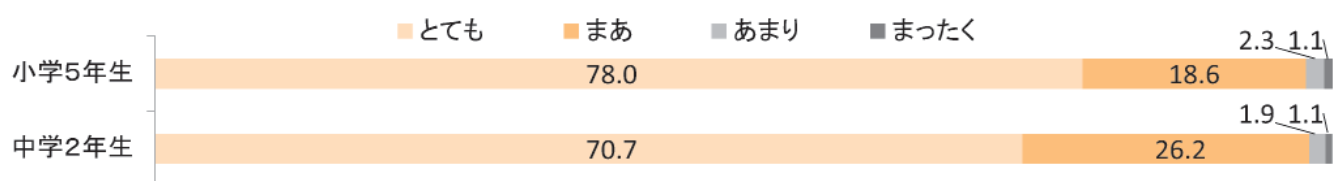
グラフ3 Q1 授業は楽しいと思いますか



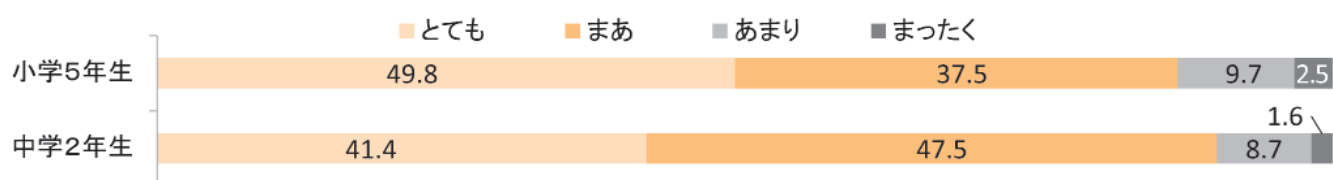
グラフ4 Q 17 (3) 学級の中で安心して生活していますか



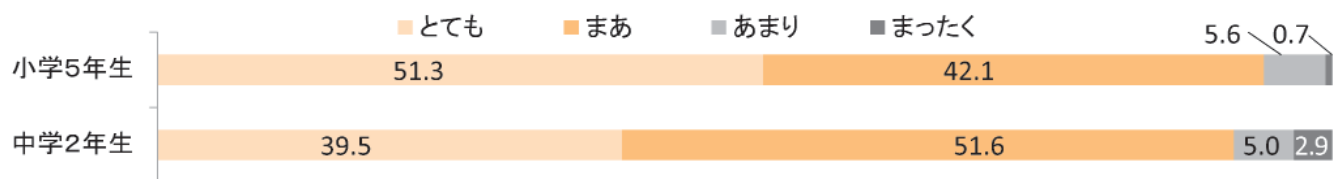
グラフ5 Q6 友だちといっしょにいと楽しいですか



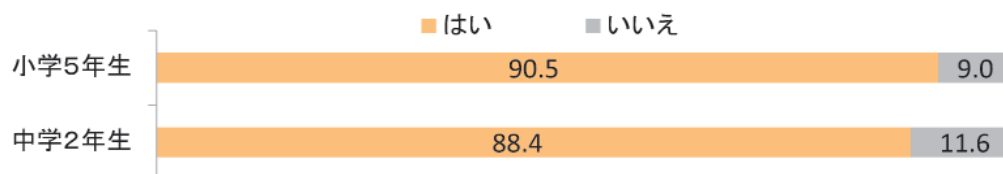
グラフ6 Q7 友だち関係に満足していますか



グラフ7 Q 12 親との関係はうまくいっていますか



グラフ8 Q 17 (4) 家族の中で安心して生活していますか



グラフ3～8からわかるように、学校生活や、友だち、家族の中で、子どもたちの多くは安心して生活できたり、関係性に満足したりしていることがわかりました。

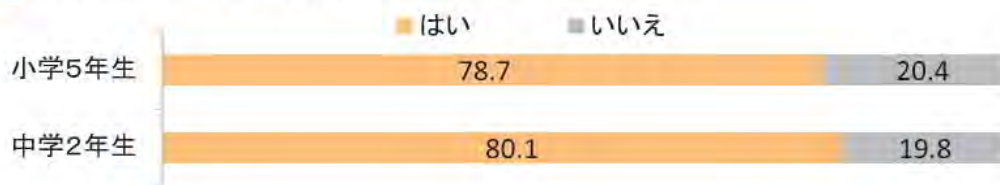
2 困難にぶつかっても、子どもたちは前向き

(1) 子どもたちがつらいことや難しいことにぶつかったとき

続いて、子どもたちがつらいことや難しいことといった困難にぶつかったとき、どのように対応しているのかを見ていきます。

調査をするにあたって、今の生活に対する幸福感・満足感が高いのは、困難やトラブルを回避しているからなのではないか（仮説1）という考えをもっていました。果たして子どもたちはどのような対応をしているのでしょうか。子どもたちが困難にぶつかったときの様子を調べるために、2つの質問をしました。

グラフ9 Q 17 (5) つらいことがあっても、立ち向かっていけますか



グラフ10 Q 17 (7) 難しいことが起こっても、解決できる自信がありますか



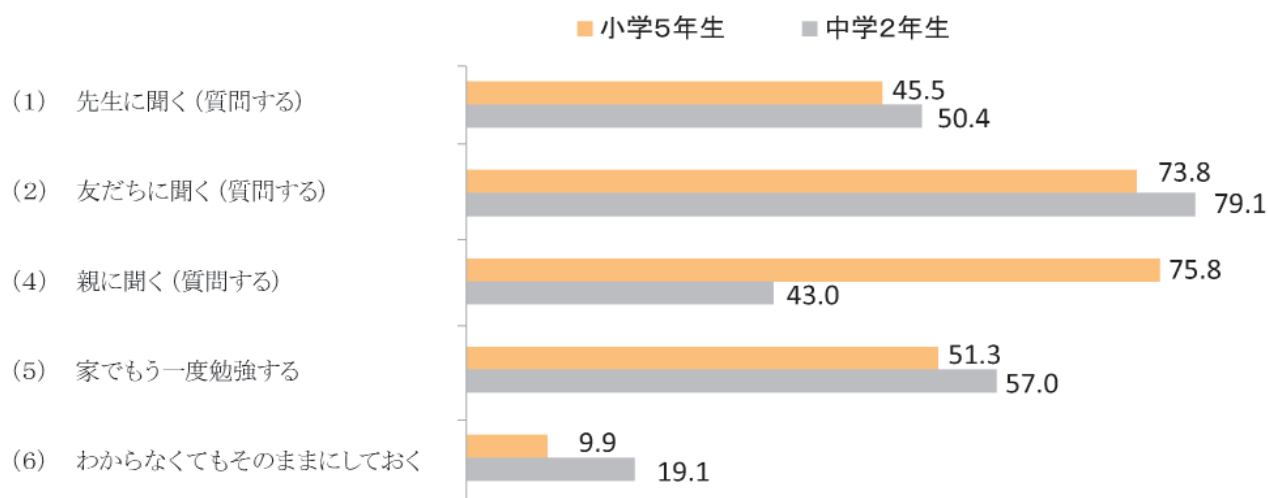
グラフ9「つらいことがあっても、立ち向かっていけますか」の質問では小・中学生ともに「はい」と答えた子どもは約8割となりました。グラフ10「難しいことが起こっても、解決できる自信がありますか」の質問では、小・中学生ともに半数は「はい」と答えています。2つの質問の結果からわかるように、子どもたちはつらいことや難しいことといった困難にぶつかったときは、困難を回避したり、逃げようとしていたりしているわけではないようです。ただ難しいことが起きたとき、解決できる自信があるかどうかはグラフ10からもわかるようにそれほど高いとは言えません。困難に立ち向かおうという意志はあっても、その困難を解決する自信があると言い切れるところまではいかないということでしょうか。



(2) 学習、友だち、教員、親との関係

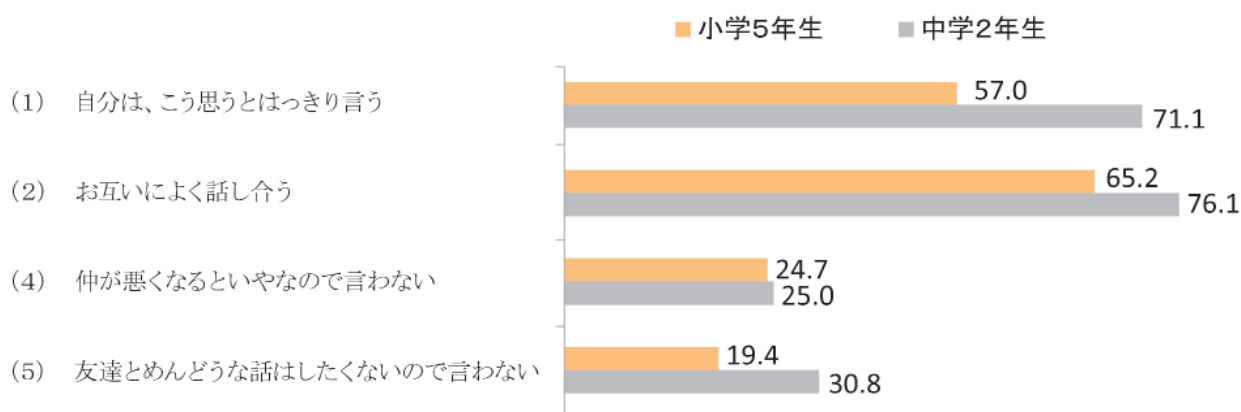
困難が起きたときをさらに、学習面、友だちとの関係、教員との関係、親との関係の観点に分け、どんな対応をしているのか聞いてみました。

グラフ 11 Q3 授業や勉強がわからないとき、どうしていますか



グラフ 11「授業や勉強がわからないとき、どうしていますか」という質問で学習における困難が起きたときの対応を調べました。「先生に聞く」、「友だちに聞く」、「親に聞く」という行動をとっている子どもが多いと言えます。また、「家でもう一度勉強する」に「はい」と答えた子どもは、半数以上となっています。「わからなくてもそのままにしておく」に「はい」と答えたのは、小学5年生は約10%、中学2年生は約20%です。子どもたちの多くは授業や勉強がわからないときそのままにしておくのではなく、先生や友だち等に聞いたり、家でもう一度勉強したりして、わかろうと努力する姿勢がうかがえます。

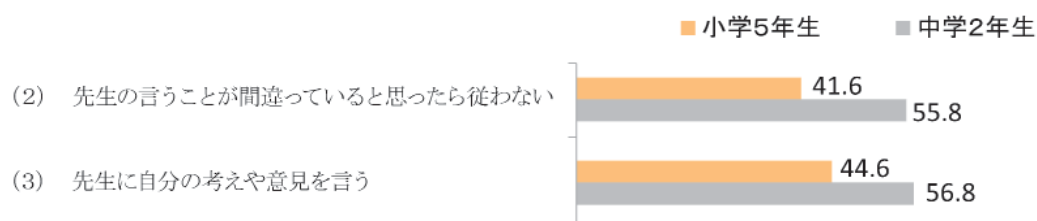
グラフ 12 Q8 友だちと考えや意見が違うとき、どうしていますか



グラフ 12「友だちと考えや意見が違うとき、どうしていますか」という質問で、友だちとの間で困難が起きたときの対応を調べました。多少のばらつきはあるものの小学5年生においても、中学2年生においても、意見が違ったときには「自分はこう思うとはっきり言う」、「お互いによく話し合う」と半数以上が回答しています。調査部では、友だち関係においても、自分の意見を主張しないことでトラブルを回避しているため、幸福感・満足感が高いのではないか、という予想もしていました。しかし、回答結果からはそうでは

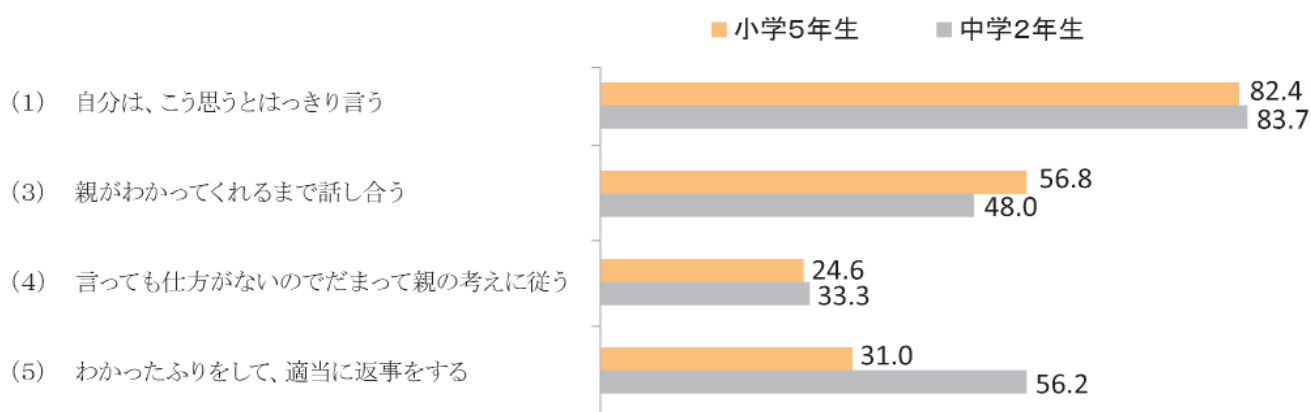
ないことが読み取れます。「仲が悪くなるのはいやなので言わない」「友だちとめんどろな話はしたくないので言わない」という質問に対し「はい」の回答率があまり高くないことからそれがわかります。

グラフ 13 Q 10 先生から注意されたり、叱られたりしたとき、どうしていますか



グラフ 13「先生から注意されたり、叱られたりしたとき、どうしていますか」という質問で、教員との間で困難が起きたときの対応を調べました。「先生から注意されたり、叱られたりしたとき」でも、小・中学生の半数近くが先生の言うことが間違っていると思ったら、従わない、自分の考えや意見を言うという子がいることがわかります。中学2年生の方がその傾向が強いという結果が見られました。

グラフ 14 Q 15 親と考えや意見がちがうとき、どうしていますか

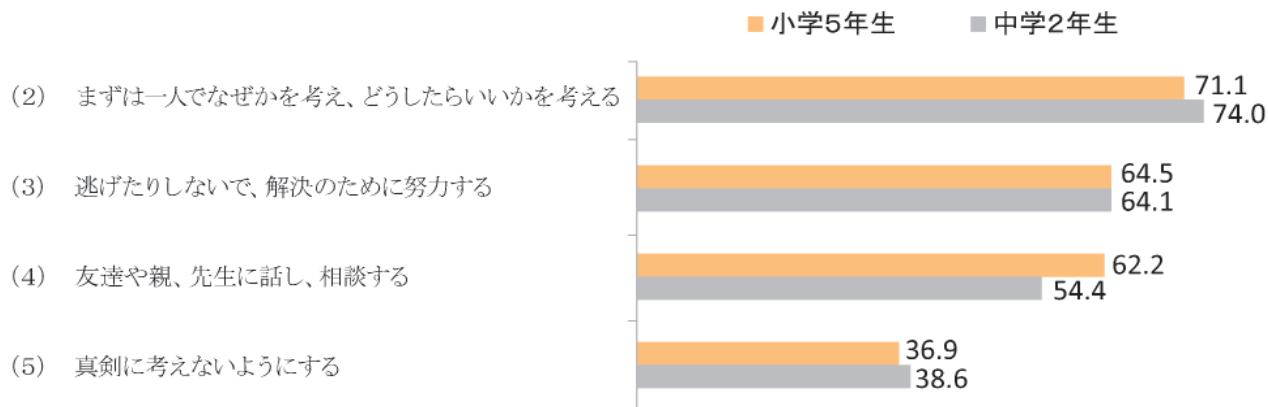


グラフ 14「親と考えや意見がちがうとき、どうしていますか」という質問で、親との間で困難が起きたときの対応を調べました。小学5年生、中学2年生ともに「自分の思うことをはっきり言う」の回答が多く得られました。「親がわかってくれるまで話し合う」の質問にも約半数の子どもたちが「はい」と答えています。子どもたちが親と考えや意見がちがっても自分の考えを伝えたいと思っていることがうかがえます。「言っても仕方がないのでだまって親の考えに従う」に「はい」と答えた子どもが約3割だったことから裏付けられます。「わかったふりをして、適当に返事をする」の問いに「はい」と答えたのは、小学5年生は31%でしたが、中学2年生は56.2%でした。

(3) 困ったことやいやだなと思ったとき、本当はどうしたい？

子どもたちは、いろいろなつらいことや難しいことなどの困難にぶつかったとき、なんとか解決したいと思っていることが本章からわかりました。最後に「困ったことやいやだなと思うことがあったとき」について「どうしているのか」という現状と、「どうすることがいいと思うか」という理想像を取り上げてみます。

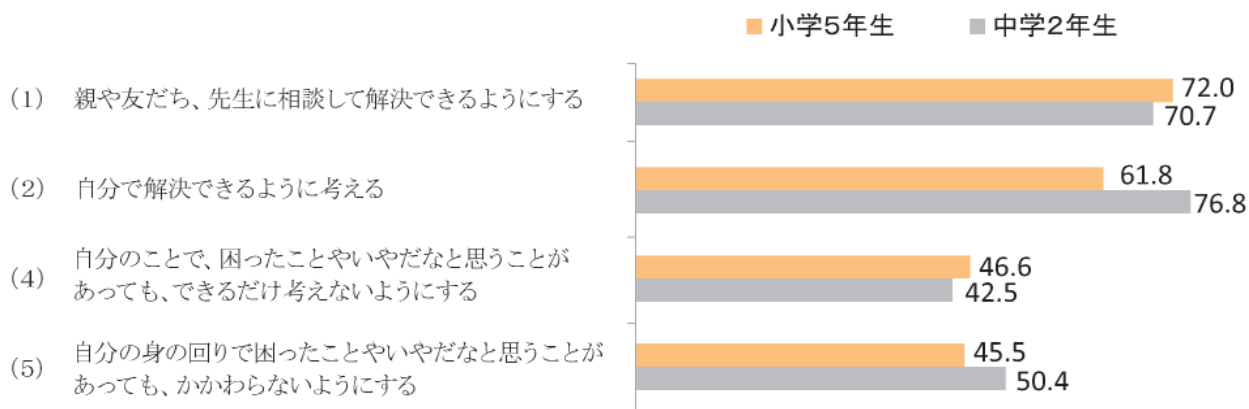
グラフ 15 Q 20 困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうしていますか



まず、グラフ 15「困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうしていますか」の質問を取り上げます。小学生も中学生も「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで、解決のために努力する」「友だちや親、先生に相談する」という質問に「はい」と回答している子どもたちが半数以上を占めることから、回避ではなく、何とかしたいと思っている態度がうかがえます。

子どもたちの理想はどうでしょうか。下のグラフ 16 は「困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうすることがいいと思いますか」の質問に対する回答結果です。

グラフ 16 Q 21 困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうすることがいいと思いますか



現実の行動としては前向きな態度がうかがえましたが、困難が起きたときの対応の理想についての質問には少し違った様子が見えてきました。「親や友だち、先生に相談して解決できるようにする」「自分で解決できるように考える」に多くの子どもたちが「はい」と回答しています。一方、「自分のことで、困ったことやいやだなと思うことがあっても、できるだけ考えないようにする」や「自分の身の回りで困ったことやいやだなと思うことがあっても、かかわらないようにする」という質問に「はい」と回答している子どもも約半数見られました。

Ⅲ 幸福感とその条件

第Ⅱ章 13 ページにあるとおり、「今の生活を幸せだと感じますか」という質問に対し、小学5年生の90.5%、中学2年生の88.4%が「はい」と答えています。また、「毎日楽しく過ごしていますか」という質問に対し、小学5年生の78.1%、中学2年生の81.1%が「はい」と答えています。

この数値から、子どもたちは、今の生活に対し高い幸福感・満足感を持っていることがうかがえます。そこで、子どもたちの高い幸福感・満足感はどこからきているのか、どういう要因によるものか。それを明らかにするために、子どもの生活に身近な成績や先生との関係における学校での様子、友だちとの関係、家庭の様子や親との関係などについて、意識調査を実施し分析・考察を行いました。

具体的には、子どもたちに、自分に関する質問の中から、「毎日楽しく過ごしていますか」という質問で、幸福感を問いました。

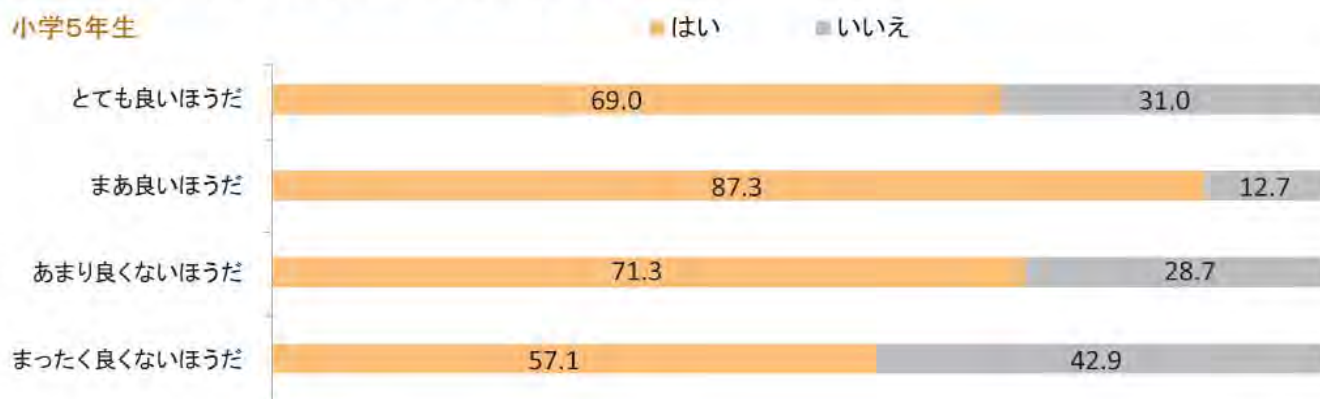
1 子どもの「幸福感」に影響を与える「友だち関係」

まず、子どもたちの生活に大きく関わる成績、先生との関係、友だちとの関係が幸福感にどのように影響しているのか調べました。

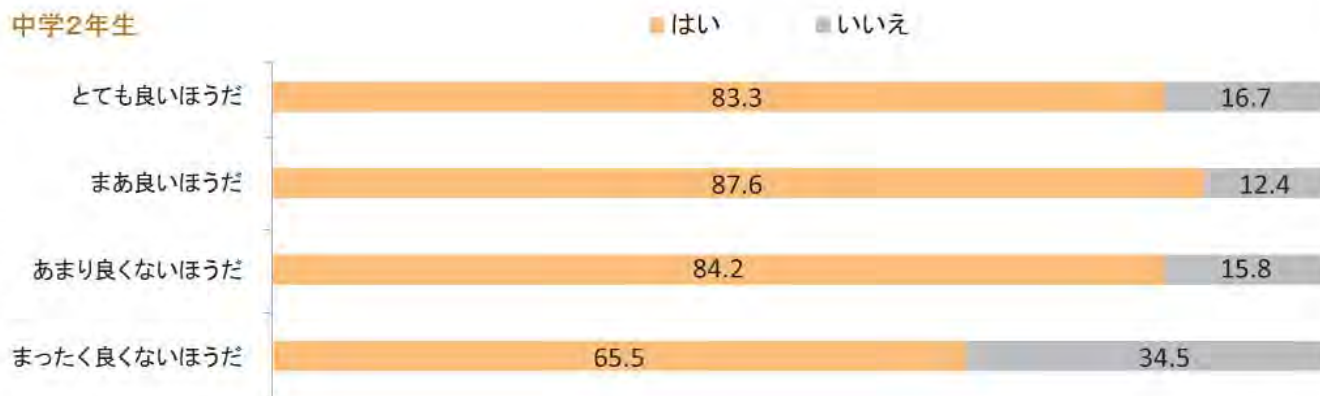
(1) 影響が小さい「成績や先生」との関係

グラフ 17 Q 17 (1) 毎日が楽しい×Q2成績自己評価

小学5年生



中学2年生

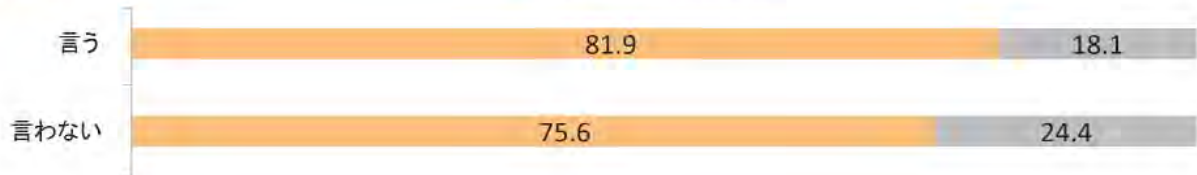


グラフ 17 は、子どもたちの幸福感と成績の自己評価との関係を調べたものです。具体的には、成績の自己評価で、「とても良いほうだ」「まあ良いほうだ」「あまり良くないほうだ」「まったく良くないほうだ」と回答している子どもそれぞれが、「毎日を楽しく過ごしていますか」の問いにどう答えているかを示したものです。成績の自己評価が高い子どもほど、幸福感も高い傾向にあります。しかし、成績の自己評価が「まったく良くないほうだ」と答えている小学5年生のうち57.1%、中学2年生のうち65.5%は、毎日が楽しいと答えています。成績の自己評価が幸福感に強く影響を与えることではないと言えます。

グラフ 18 Q 17(1) 毎日が楽しい×Q 10(3)先生から注意されたり叱られたりしたときの行動／先生に自分の考えや意見を言う

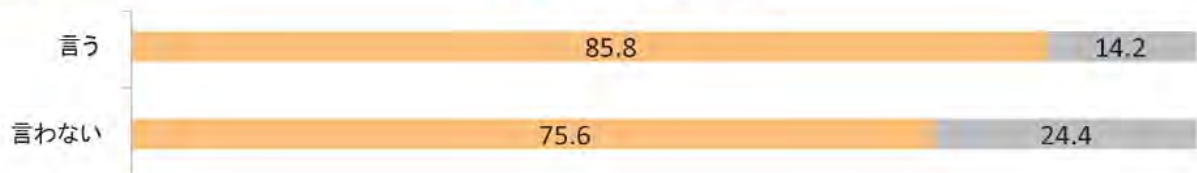
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 18 は、子どもたちの幸福感と先生に対する行動との関係を調べたものです。具体的には、先生から注意されたり、叱られたりしたとき、「先生に自分の考えや意見を言う」に「はい」「いいえ」と答えた子どもたちそれぞれが、「毎日を楽しく過ごしていますか」の問いにどう答えているかを示したものです。

小学生を見ると、「先生に自分の考えを言う」に「はい」と答えた子どもの81.9%の子どもは毎日が楽しいと答えています。また「先生に自分の考えを言う」に「いいえ」と答えた子どもの75.6%の子どもも毎日が楽しいと答えています。先生から注意されたり、叱られたりしたとき、自分の考えや意見を言うか、言わないかは、子どもの幸福感に大きな影響を及ぼすという関係性はないように思われます。

これらのことから、成績の自己評価の善し悪しや、先生に注意されたり叱られたりしたとき、自分の考えを言うか言わないかは、子どもたちの幸福感に大きな影響を及ぼすことではないことがわかります。

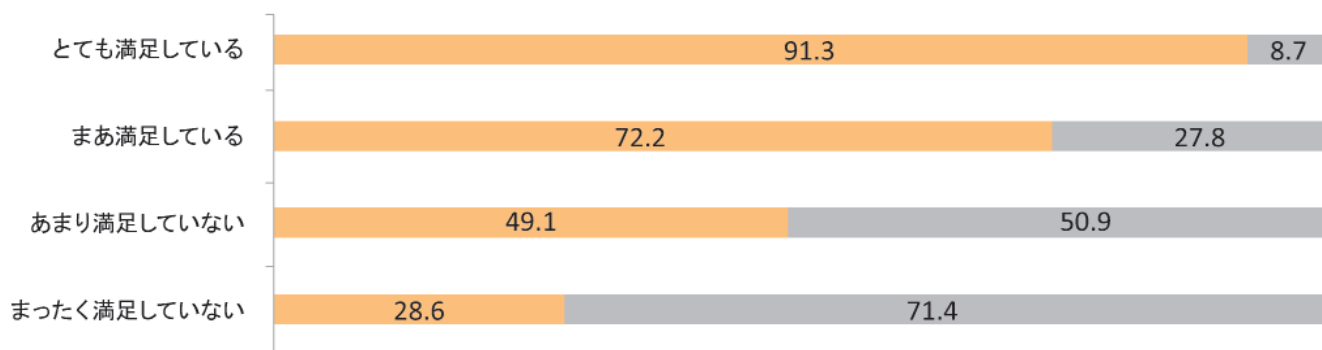


(2) 影響が大きい「友だち」との関係

グラフ 19 Q 17(1) 毎日が楽しい×Q7 友だち関係の満足度

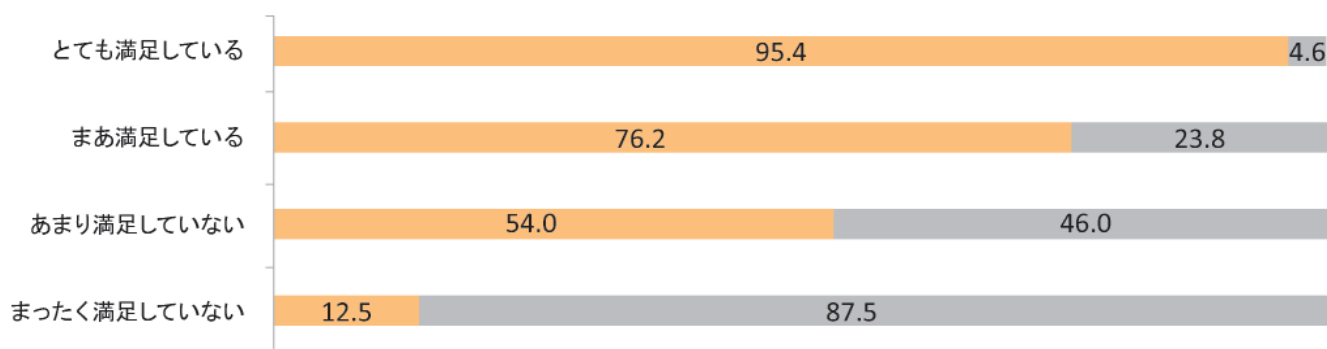
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 19 は、子どもたちの幸福感と友だち関係を調べたものです。「あなたは友だち関係に満足していますか」の質問に「とても満足している」「まあ満足している」「あまり満足していない」「まったく満足していない」と答えた子どもたちそれぞれが、「毎日を楽しく過ごしていますか」の質問にどう答えているかを示したものです。

小学校において友だちとの関係に「とても満足している」子どもの 91.3% が「毎日楽しい」と思っています。中学校では、その割合はさらに増え 95.4% の子どもが、友だち関係に満足しているほど「毎日が楽しい」と感じています。

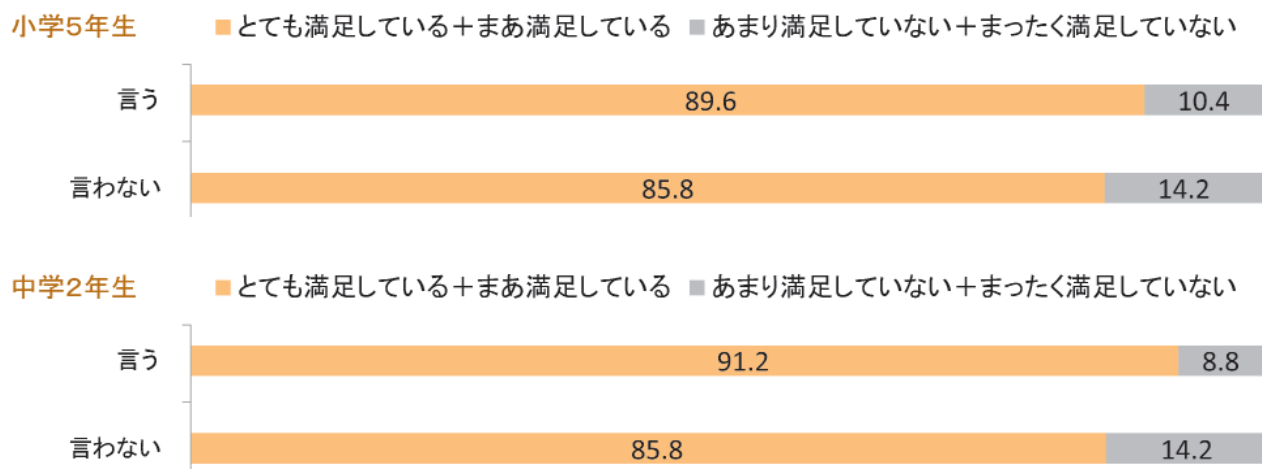
一方、小学校において、友だち関係に「全く満足していない」子どもの 71.4% は、「毎日を楽しく過ごしていますか」の問いに「いいえ」と回答しています。中学校では、「まったく満足していない」子どものなかで、「毎日を楽しく過ごしていますか」の問いに対し、「いいえ」と答えている割合はさらに増え 87.5% にのびります。

ここまでを概観すると、(1) より、幸福感と成績の自己評価の関係において、顕著な相関性はないことがわかります。(2) からは、幸福感と友だち関係の満足度に関しては、中学生になると友だち関係の満足度が幸福感により大きな影響を及ぼしていることがわかります。ここから、成績や先生との関係よりも、友だち関係の満足度のほうが幸福感に大きく影響し、成長とともにその割合が高まっていくことがわかります。

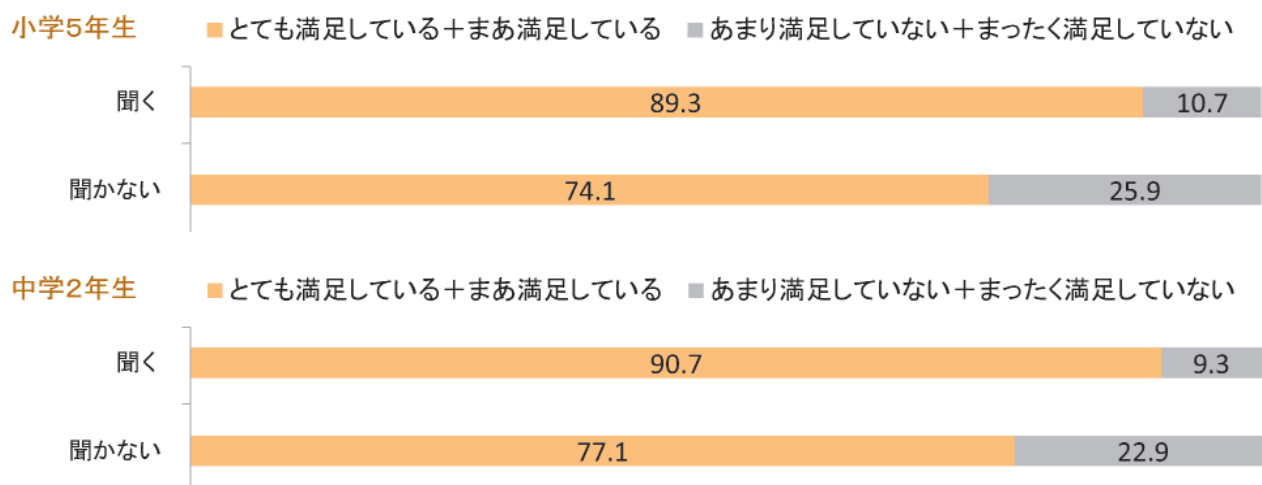
そこで、友だち関係に「満足している」「していない」とはどのようなことに影響されているのかを探るために、友だちと考えが違ったときの対応について調べました。

(3) 友だち関係のキーワードは、「聞く」と「話し合う」

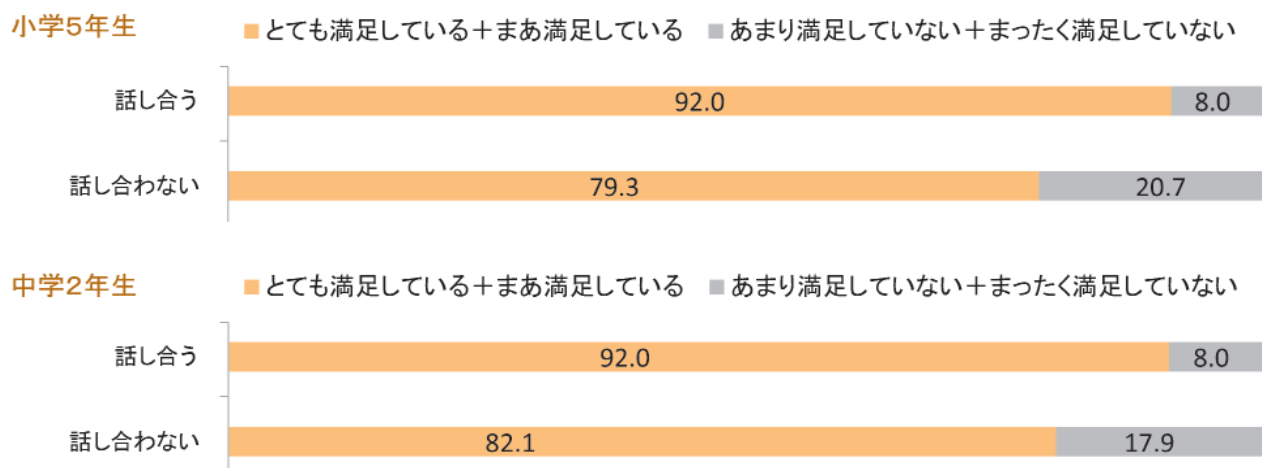
グラフ 20 Q7 友だち関係の満足度 × Q8(1) 友だちと意見が違ふときの行動／自分の考えをはっきり言う



グラフ 21 Q7 友だち関係の満足度 × Q8(2) 友だちと意見が違ふときの行動／友だちの考えをしっかりと聞く



グラフ 22 Q7 友だち関係の満足度 × Q8(3) 友だちと意見が違ふときの行動／お互いによく話し合う

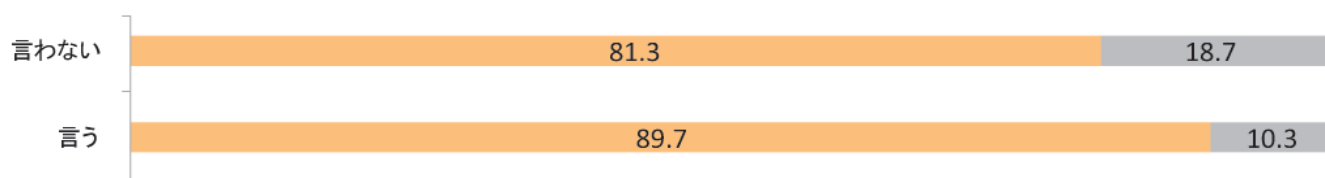


グラフ 20、グラフ 21、グラフ 22 は、友だちと考えや意見が違うときに「自分の考えや意見をくわしく言う」「友だちの考えや意見をしっかり聞く」「お互いによく話し合う」といった行動の違いが、友だち関係の満足度にどのような影響を与えるのか調べたものです。グラフの「はい」は、友だち関係について「とても満足している」と「まあ満足している」を合わせたもので、「いいえ」は友だち関係について「あまり満足していない」と「まったく満足していない」を合わせたものを表しています。

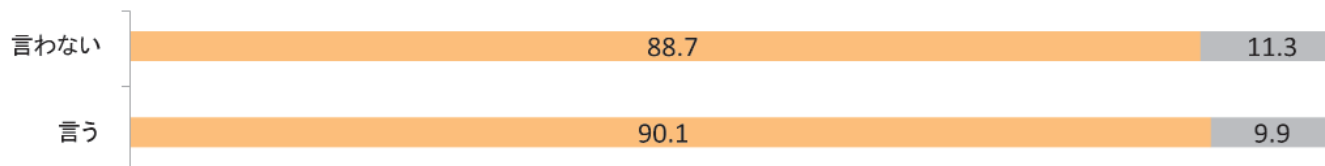
まず、グラフ 22 を見ると「お互いによく話し合う」ほうが、友だち関係の満足度への影響は、やはり大きくなっています。グラフ 20 では、「自分の考えや意見をはっきり言う」に「はい」と答えた子どものうち 89.6%、「いいえ」と答えた子どものうち 85.8%が友だち関係はほぼ満足しているとなっており、その差は大変小さいことがわかります。自分の考えや意見をはっきり言うか言わないかは、友だち関係の満足度に大きく影響していないことがうかがえます。一方、グラフ 21 からわかるように友だちの考えや意見を聞くか聞かないかは、友だち関係の満足度に大きく影響しています。「自分の考えや意見をはっきり言う」「友だちの意見や考えをしっかりと聞く」「お互いによく話し合う」のそれぞれを分析してみると、言う・言わないよりもお互いに話し合うのほうが満足度に影響が大きく、特に中学生では「友だちの意見や考えをしっかりと聞く」ことが、友だち関係の満足度に大きく影響を及ぼしています。

グラフ 23 Q7 友だち関係の満足度 × Q8(5) 友だちと意見が違うときの行動／めんどうな話はしたくないので言わない

小学5年生 ■ とても満足している＋まあ満足している ■ あまり満足していない＋まったく満足していない



中学2年生 ■ とても満足している＋まあ満足している ■ あまり満足していない＋まったく満足していない



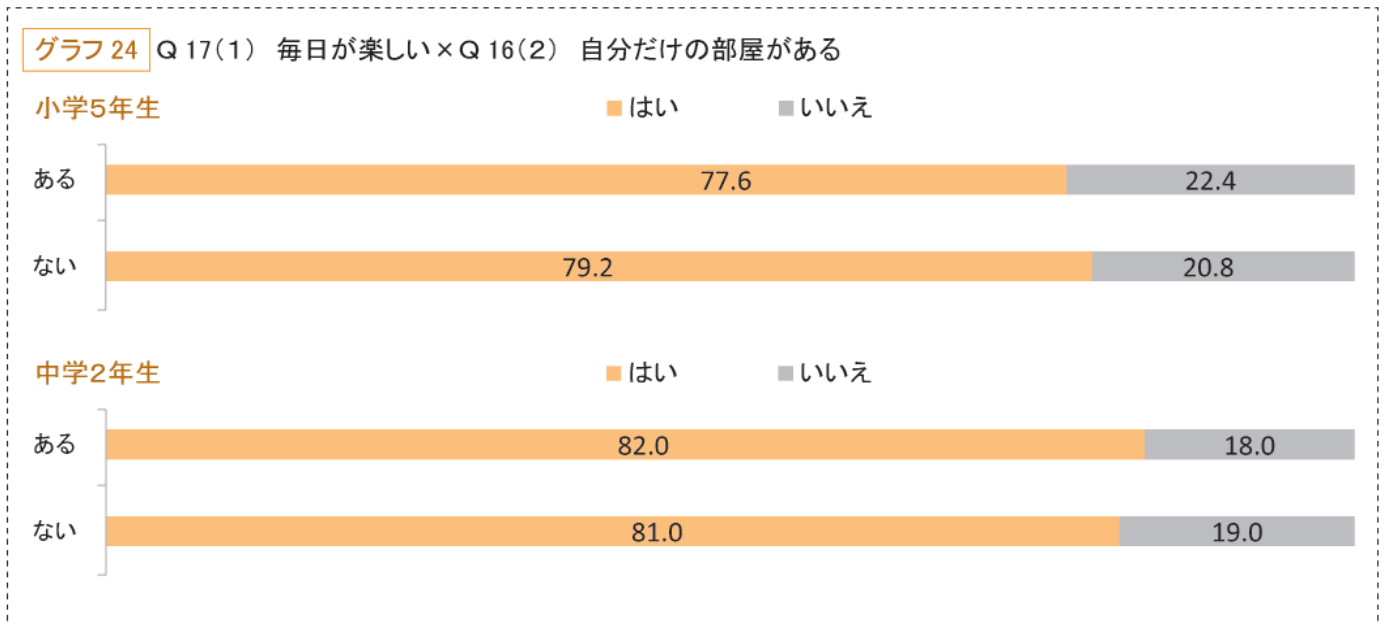
グラフ 23 は、友だちと考えや意見が違うとき、「友だちとめんどうな話はしたくないので言わない」について「はい」または「いいえ」と答えた子どもたちそれぞれが、友だち関係の満足度をどう感じているかを表したものです。

小学校では「友だちとめんどうな話はしたくないので言わない」という子どものうち 81.3%が友だち関係に満足していますが、「友達とめんどうな話はしたくないので言わない」に「いいえ」と答えた子どもの 89.7%が友だち関係に満足しているという数値が出ています。つまり、めんどうな話であっても言うという子どものほうが、友だち関係の満足度が高いということです。一方、中学校では「友だちとめんどうな話はしたくないので言わない」の質問に「はい」と答えた子どもは 88.7%、「いいえ」と答えた子どもは 90.1%となっており友だち関係の満足度にはほとんど差が見られません。これは、友だちと面倒になることを避ける傾向が強まるからではないでしょうか。このことを、友だちとの関係づくりが上手になった、面倒なことをうまく避け折り合いが付けられるようになったなど、このことを、大人になったと捉えるのか、人間関係の深まりを回避する傾向があると捉えるのかは見極める必要があります。

2 家庭では、親子の日常的なかかわりが大切

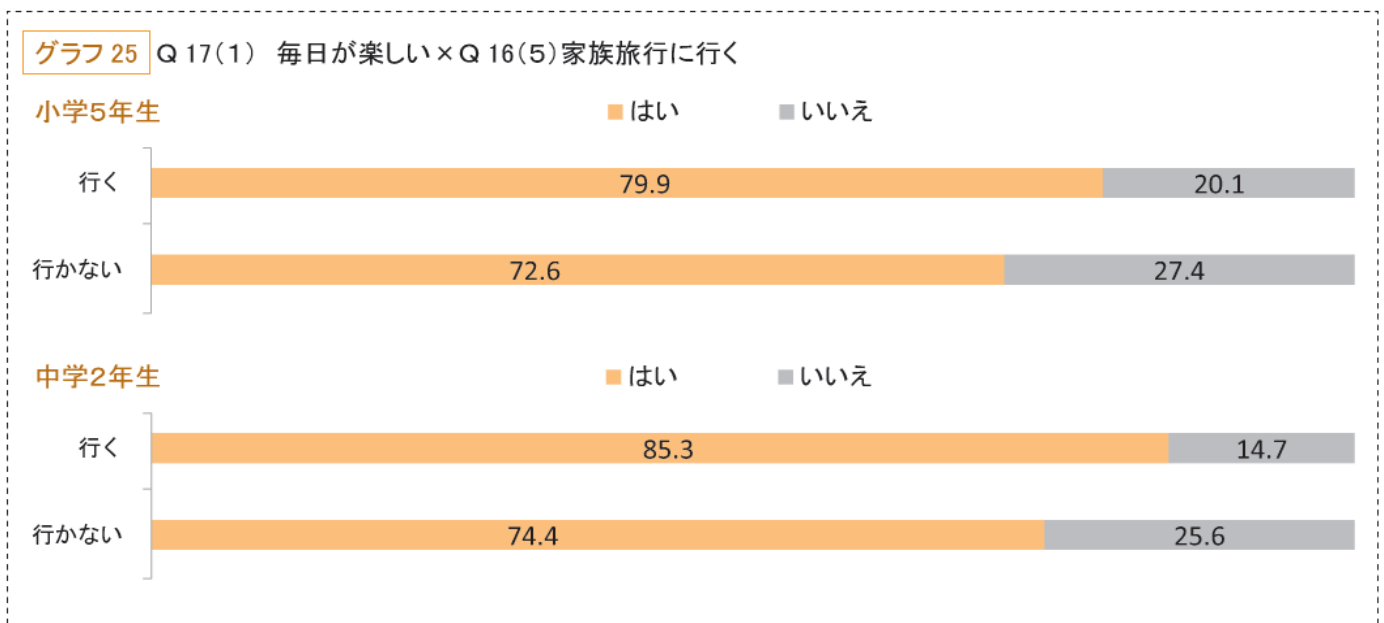
次に、家庭の経済状況や文化度が、子どもの幸福感に影響を与えているのかを、子どもたちの所持品や家族との関わり方から調べました。

(1) 「ものに恵まれること」と幸福感は、関係が小さい



グラフ 24 は、自分の部屋があるかどうか、毎日が楽しいかどうかに影響されるかを表したものです。自分の部屋があるかどうかは、毎日が楽しいかどうかにはほとんど影響がないことがわかります。また、調査では、自分専用の PC やタブレットがあるか、携帯電話やスマートフォンを持っているかを調べ、その結果と毎日が楽しいかどうかという相関関係を調べましたが同様の結果でした。自分だけの部屋がある、自分専用のパソコン、タブレットを持っている、自分の携帯電話やスマートフォンを持っている等、物質的に満たされていることが、毎日が楽しいという幸福感に直接結びついているとは言えないようです。

(2) 家族でかかわり合うことの大切さ



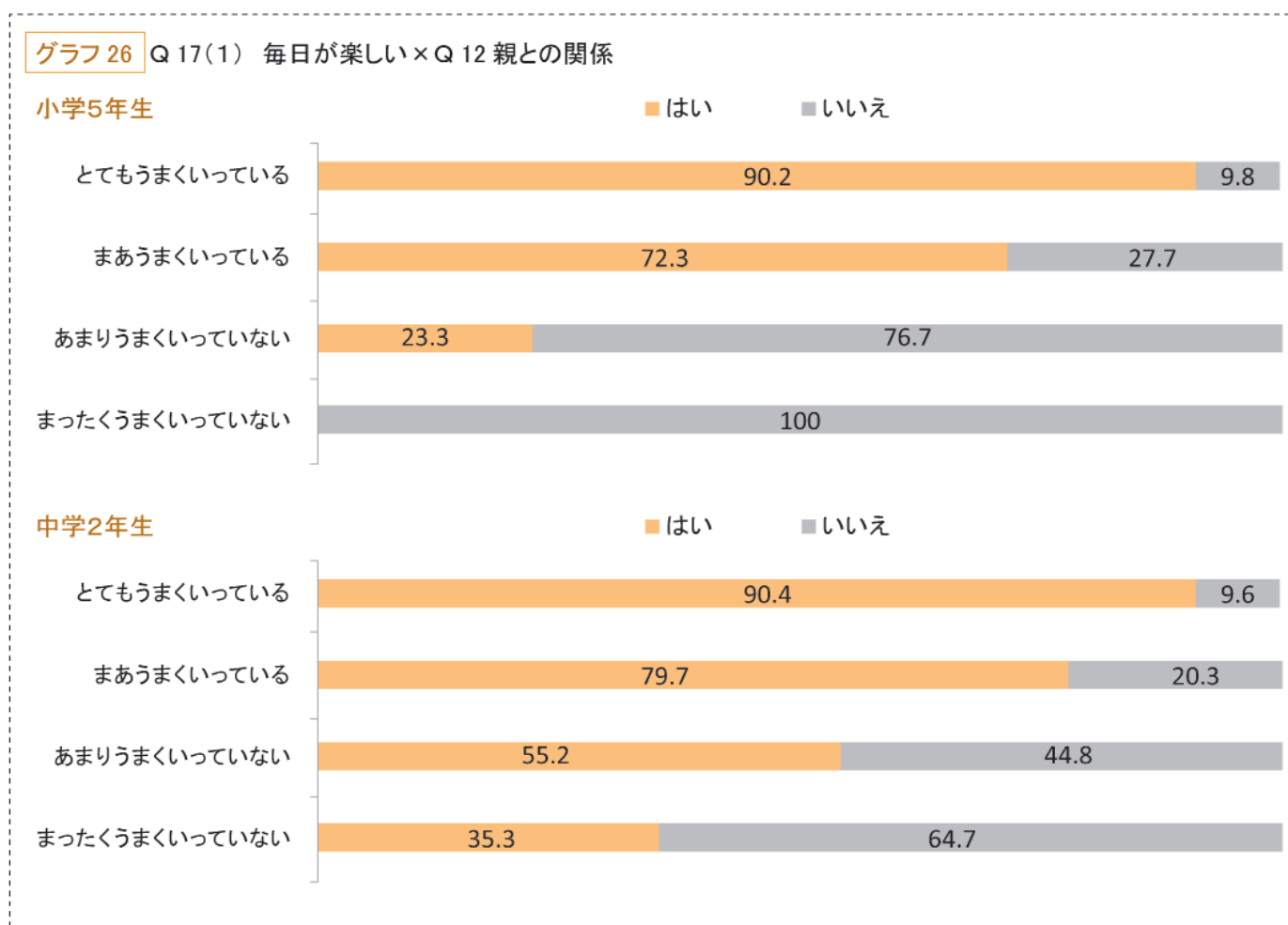
グラフ 25 は、毎日が楽しいかどうか、家族旅行に行くか・行かないかに影響されるかどうかを表したものです。小学生も中学生も、家族旅行に行くという子どものほうが、「毎日が楽しい」と答えた割合は高くなっています。しかし、小・中学生ともに家族旅行に行かないと答えた子どもの 70%以上も、「毎日が楽しい」と答えています。また、調査では、家族でニュースを見るかどうかを調べ、その結果と毎日が楽しいかどうかを相関関係を見ました。結果は、家族でニュースを見ると答えた子どもたちのほうが、「毎日が楽しい」の割合が高いというものでした。家族旅行に行ったりや家族でニュースを見たりするなど、家族とともに同じ時間を過ごしたり、新聞やニュースなど日常的な事柄を話題にしたりする子どものほうが、幸福感が高くなっています。

(1)(2)より、経済的・物質的に満たされていることと、子どもたちの幸福感は強い関係性があるとは必ずしも言えないということがわかります。それよりも、親子のふれ合いの時間や同じ体験等があることのほうが幸福感に影響を与えています。このことから、経済的、物質的に満たされていることよりも、親子で家族旅行に行ったり、いっしょにテレビのニュースを見たりするなど、ごく日常にある家族のふれ合いや団らんを大事にすることのほうが、子どもの幸福感にとって大切なことがわかります。

3 親として、「子どもに対する理解」と「言うべきことは言う姿」が大切

2において、家庭環境では経済的・物質的なことよりも、親子との関わりやふれ合いが子どもたちの幸福感に影響を与えていることがわかりました。

さらに、下のグラフ 26 が示すように、親子関係が良好だと子どもの幸福感が高まることがわかります。



そこで、様々な角度から調べた親子関係によって、幸福感にどのような違いが生じるのかを具体的に調べました。

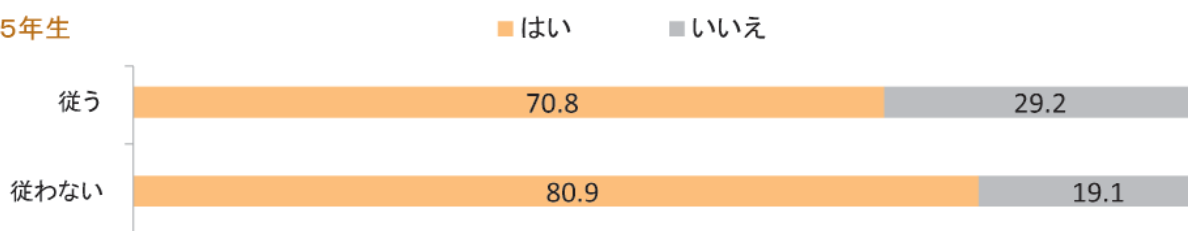
(1) 「親と意見が違ふときの行動」から見えるもの

親子関係が良好だと幸福感が高くなることがわかりました。では、親と考えや意見が違ったときの子どもの対応の仕方と、子どもたちの幸福感の関係はどうかについて調べました。

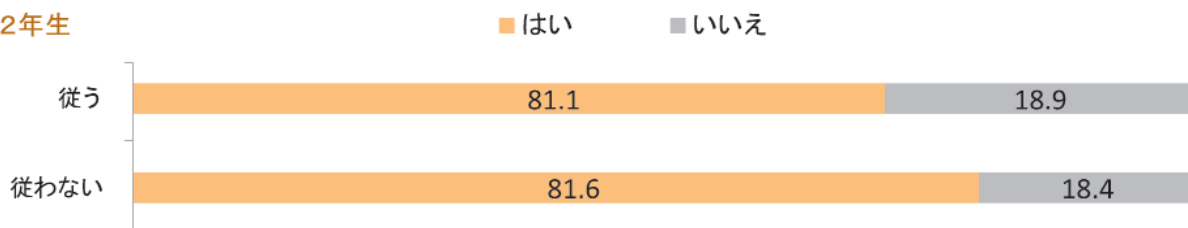
小学校では、自分の考えをはっきり言ったり、親の考えをしっかりと聞いたり、わかってくれるまで話し合ったりするなど、自分の意思や思いを明確に表す子どもたちは総じて幸福感が高い傾向にあります。一方、黙って親の考えに従う、わかったふりをして適当に返事をする、どうせ聞いてくれないので話をしない、気まずくなるので従うなど、意見の相違からくる人間関係の摩擦が深刻化することを避けようとする傾向の強い子どもたちは、下のグラフ 27、グラフ 28、グラフ 29、グラフ 30 からわかるように、幸福感は特に低くなります。

グラフ 27 Q 17(1) 毎日楽しい×Q 15(4) 親と意見が違ふときの行動／だまって親の考えに従う

小学5年生

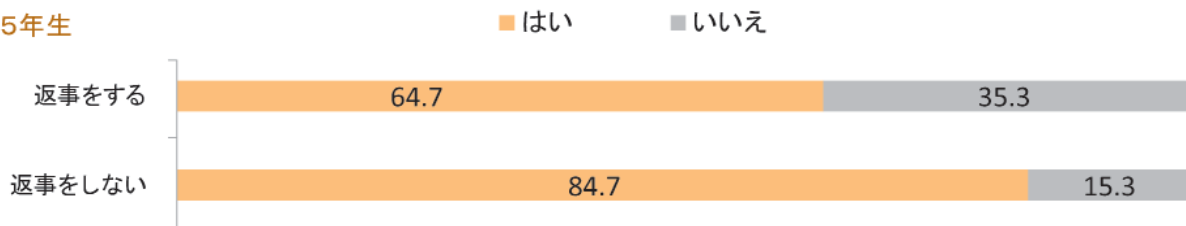


中学2年生

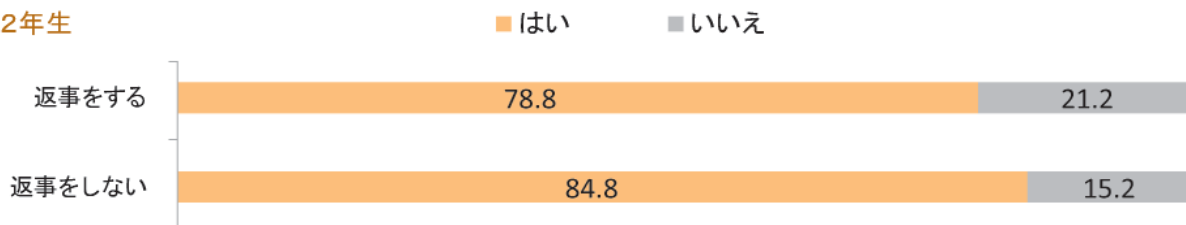


グラフ 28 Q 17(1) 毎日楽しい×Q 15(5) 親と意見が違ふときの行動／わかったふりをして、適当に返事をする

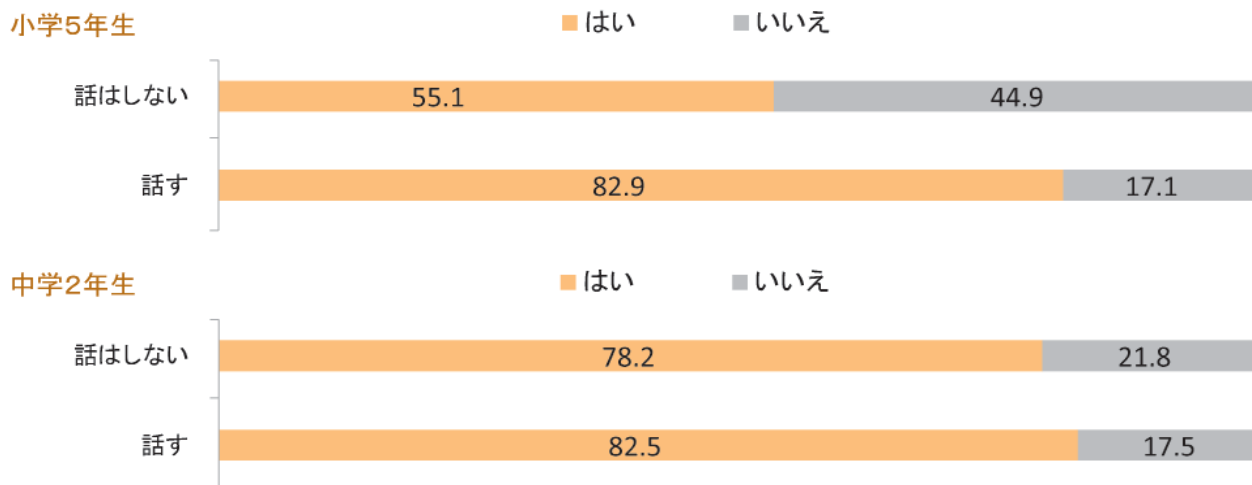
小学5年生



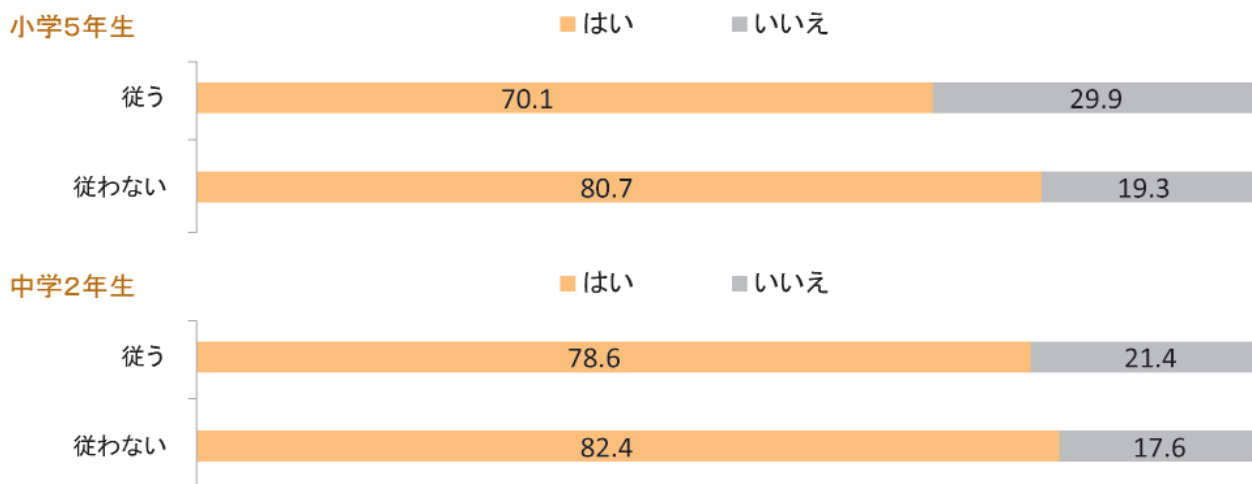
中学2年生



グラフ 29 Q 17(1) 毎日楽しい×Q 15(6) 親と意見が違うときの行動／聞いてくれないので話はしない

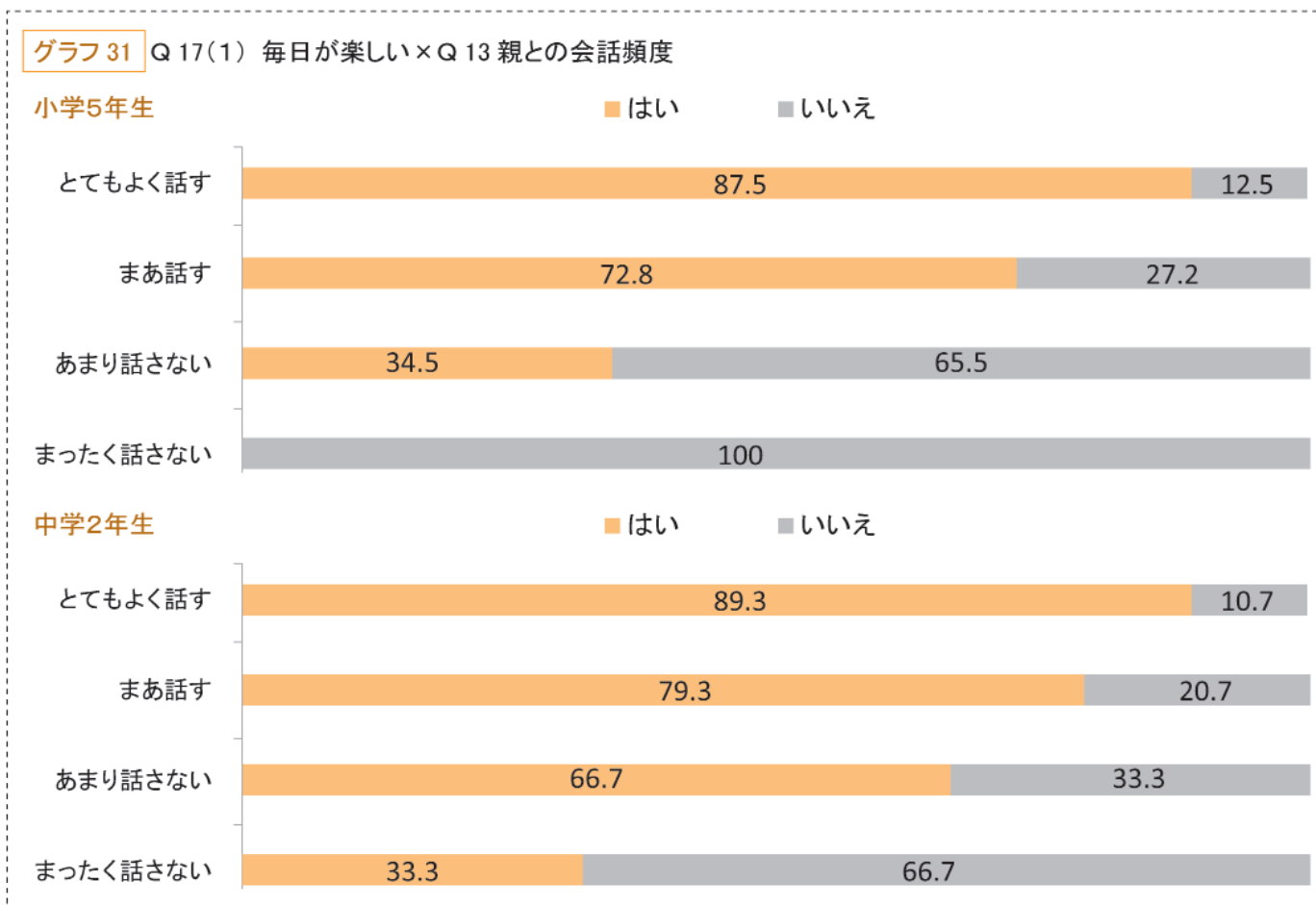


グラフ 30 Q 17(1) 毎日楽しい×Q 15(7) 親と意見が違うときの行動／気まずくなるので従う



また、グラフ 29 からは、中学生になるとそうした傾向は見られませんが、それは、困難を回避し、人間関係に深入りをしないことによって自分を守る術を身に付けてきているからかもしれません。そのことを、成長した（大人になった）と捉えるのか、人との関わりが濃くなることを避けていると否定的に捉えるのかを調べるために、親との会話頻度から検討を行いました。

(2) 親子でよく話すほど、幸福感が高い



グラフ 31 では、親との会話の頻度と子どもたちの幸福感との関係について調べました。

小学5年生は、「あなたは、ふだん親とどのくらい話をしますか」という質問に対し、「とてもよく話す」と答えた子どもたちのうち、87.5%は「毎日が楽しい」と答えているということです。中学2年生は、「とてもよく話す」と答えた子どもたちのうち、89.3%は「毎日が楽しい」と答えているということです。

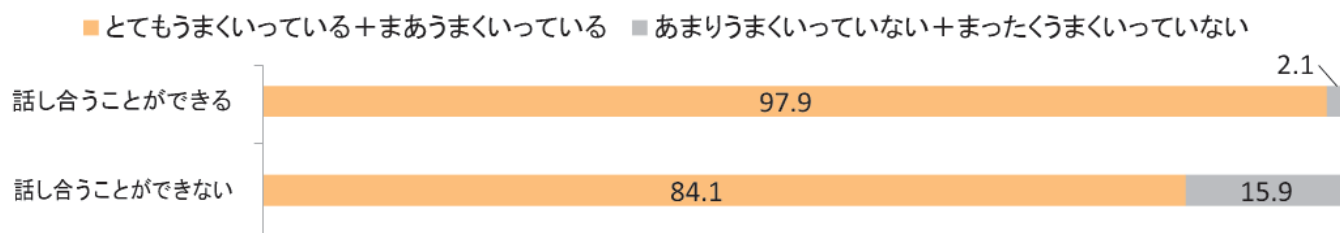
小・中学校ともに、「とてもよく話す」家庭の子どもほど、幸福感が高くなっています。この傾向は、小学生ほど顕著に見られ、中学生では、会話頻度が少なくても幸福感を感じている子どもが約33%ほどいます。

そこで、さらに「どんな親」だと幸福感が高くなるのかを分析してみました。

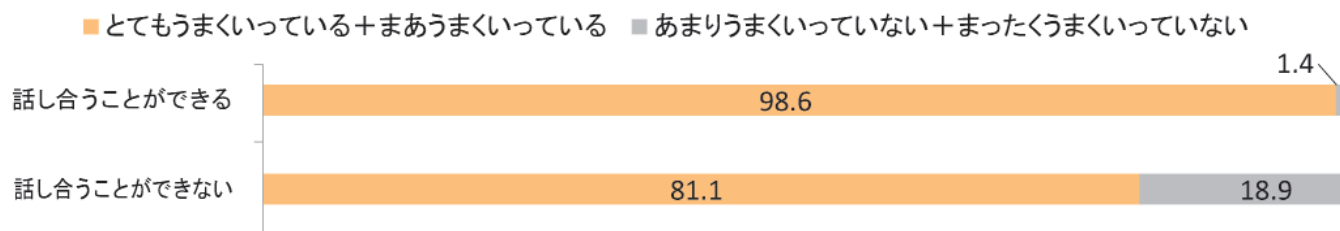
(3) 「子どもに対する理解」と「言うべきことは言う」親の姿

グラフ 32 Q 12 親との関係 × Q 14(1)どんな親か／なんでも話し合することができる

小学5年生



中学2年生



グラフ 32 では、子どもが親をどう見ているかと親子関係について調べました。全体的に、親の子どもへの接し方次第で、子どもは親との関係性を測っていることがわかります。小学5年生では、「何でも話し合える」と答えた子どもの97.9%が、親子の関係が「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と思っています。

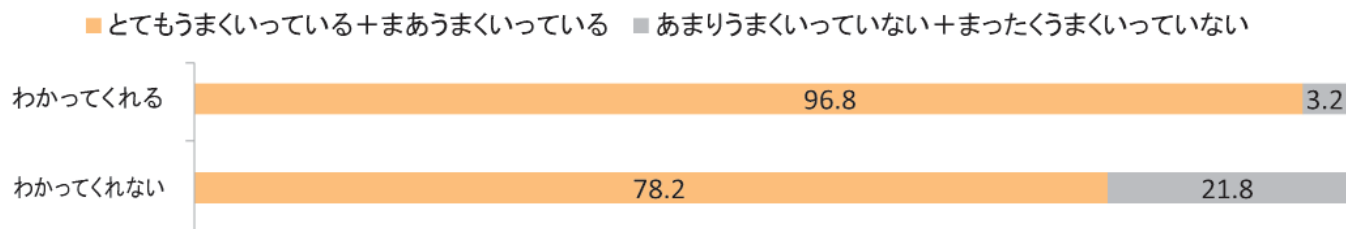
一方、「何でも話し合える」に「いいえ」と答えた子どもたちに着目してみると、小学校では84.1%、中学校では81.1%が「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と思っています。

親子の良い関係をつくる上で、何でも話し合えることは非常に大切であることは当然ですが、何でも話し合える親子の関係性がないと、良い親子関係を築くことはできないということではないと言えます。

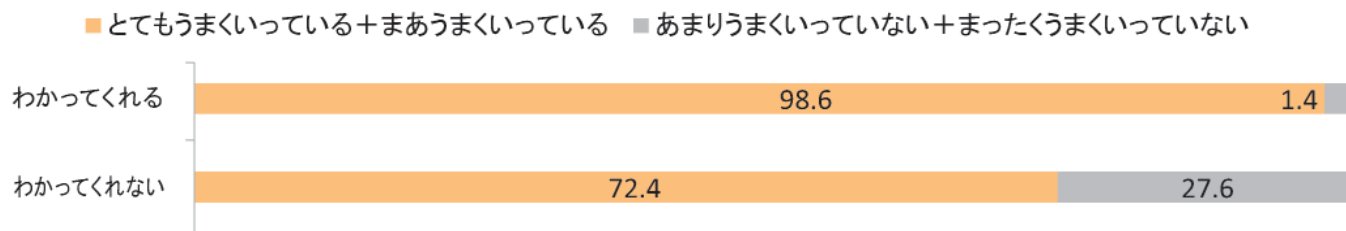
では、子どもたちは何を考え、望んでいるのでしょうか。

グラフ 33 Q 12 親との関係 × Q 14(2)どんな親か／自分のことをわかってくれる

小学5年生



中学2年生



グラフ 33 は、「自分のことをわかってくれる」かどうかという質問の結果と親子関係の相関を表したものです。

小学 5 年生、中学 2 年生ともに、「自分のことをわかってくれる」に対し、「はい」と答えた子どもの 97%前後が、親子の関係を「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と答えています。

当たり前のことではありますが、良い親子関係を築くためには、子ども自身が、親は自分のことをわかっていてくれていると感じることがとても大切なことだと思います。

(2) と (3) を概観すると、次のような見えてきます。

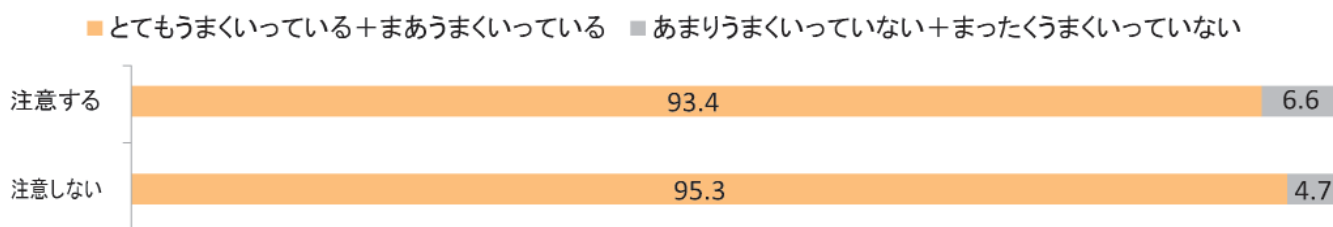
ア 自分のことをわかってくれないが、親子関係はうまくいっている…小) 78.2% 中) 72.4%

イ 親子で何でも話し合っていないが、親子関係はうまくいっている…小) 84.1% 中) 81.1%

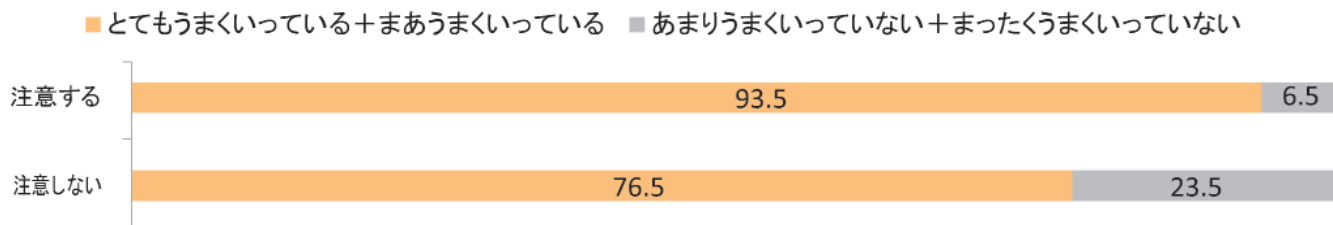
イに比べ、アは減少しています。これは、「親子で何でも話し合える」関係より、「親が自分のことをわかってくれる」というほうが、子どもたちの幸福感に及ぼす影響は大きいということではないでしょうか。

グラフ 34 Q 12 親との関係×Q 14(5)どんな親か／いけないところは注意する

小学5年生



中学2年生



グラフ 34 は、「あなたの親は、どんな親ですか。」という質問で、「いけないところは注意する」に、「はい」と「いいえ」と答えた子どもたちの、親子関係の相関を見たものです。

中学生を見ると、親が、「いけないところは注意する」という質問に「いいえ」と答えた子どものうち、親子関係が「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と答えた子どもは 76.5%と、93.5%と比べかなり低くなっています。

中学生では、親が注意してくれない子どもは、親子関係がうまくいっていると感じる割合が低くなります。したがって、特に中学生では、しっかりと注意してくれることを望んでいることがわかります。

4 まとめ

ここまで、子どもたちの高い幸福感・満足感は、どこからきているのか、どういう要因によるものかについて、成績（自己評価）や先生との関係、友だちとの関係、家庭の経済状況、親子関係という視点から探ってきました。

子どもたちの日常生活の大半を占める学校生活においては、成績（自己評価）や先生との関係よりも、友だち関係が幸福感に大きな影響を与えています。また、そのあり方も成長に応じて変化が見られます。例え

ば、小学生では、友だちと「お互いによく話し合う」ことのできる関係が満足度に大きく影響を及ぼし、中学生になると「友だちの考えや意見をしっかり聞く」という態度が満足度に影響を及ぼすようになっていきます。

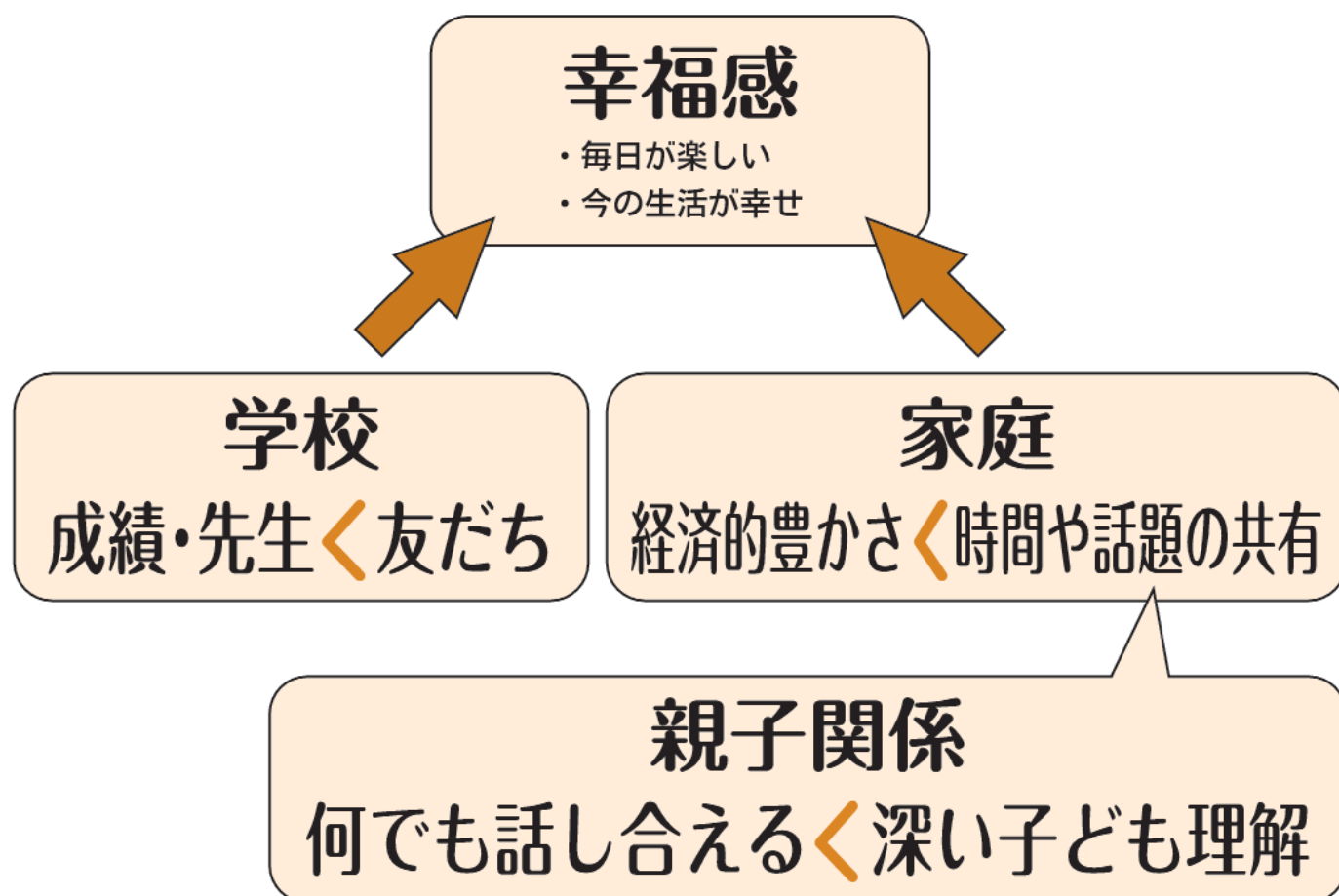
子どもたちは、人間関係づくりがあまり上手とは言えません。学校生活の中で、友だちの存在は、学校生活を豊かにする上でも、また子どもたち自身の成長にも大きく影響します。

授業や行事などで指導をする際、子どもたちが良好な友だち関係をつくり、友だち関係の満足度を高めるためには、話し合い活動を積極的に行うことや、意見を言うだけでなく、併せて、しっかり聞く態度を養っていくことが大切だと思われます。

同様のことは、親子関係でも見られました。自分だけの部屋がある、自分専用のパソコンや携帯電話があるといった経済的・物質的に恵まれていることよりも、親子でニュースを見る、家族で旅行に行くなど話題と時間を共有することのほうが、子どもたちの満足度は高い傾向が見られました。親子の会話においては、小学生では会話の頻度が満足度に影響していますが、思春期になり会話頻度が少なくなる中学生でも、親がしっかり注意してくれる、自分のことをわかってくれるといったことが満足度に大きく影響していることがわかりました。子どもたちは、親が自分のことに対して関心を持ち、理解してくれることを望んでいます。

子どもが成長するにつれて、日常的には親子関係において、素っ気なくなったり、声をかけづらくなったりするかもしれません。しかし、これらは成長の過程において自然なことであり、子どもたちは、親との日常的なかかわりを求めていることに変わりはありません。小学生では、親子でよく話をするという豊かなコミュニケーションのある親子関係が大切だということです。それが、中学生になると、自分の話をよく聞いてくれること、自分のいけないところはしっかりと注意してくれることをさらに望むようになります。

こうしたことから、子どもの成長に合わせて、小学校では、親子でよく話をするという親子関係から、中学校に入学したころからは、あなたのことをよく見ているよ、話を聞いているよというサインを出したり、ときには厳しく注意をしたりすることが必要ではないでしょうか。



IV 自己効力感とその条件

この章では、子どもたちの幸福感・満足感を支えるものとして、『自己効力感』を取り上げます。自分に自信がある、他者や集団との関係の中で自分の存在を価値あるものとして受け止める感情を『自己効力感』と捉えました。調査部では、この自己効力感は、幸福感・満足感の大事な要素ではないかと考えました。この自己効力感を高めるために、学校や家庭においてどのような支援が効果的であるのかをアンケートを基に分析をすすめました。

そこで、次の質問に着目しました。

Q17（7）「難しいことが起こっても、解決できる自信がありますか」

その理由は、困難な状況に陥ってもそれを解決する自信をもっている子どもは、自分に自信がある子ども（自己効力感が高い子ども）ではないかと考えたからです。この設問に対して、「はい」と答えた子どもは、友だちや教員、親とどのような関係をもっているか等を分析することにより、子どもたちの自己効力感を育むにはどういうことが要因としてあるのかを明らかにしたいと考えました。

1 良好な友だち関係が自信につながる

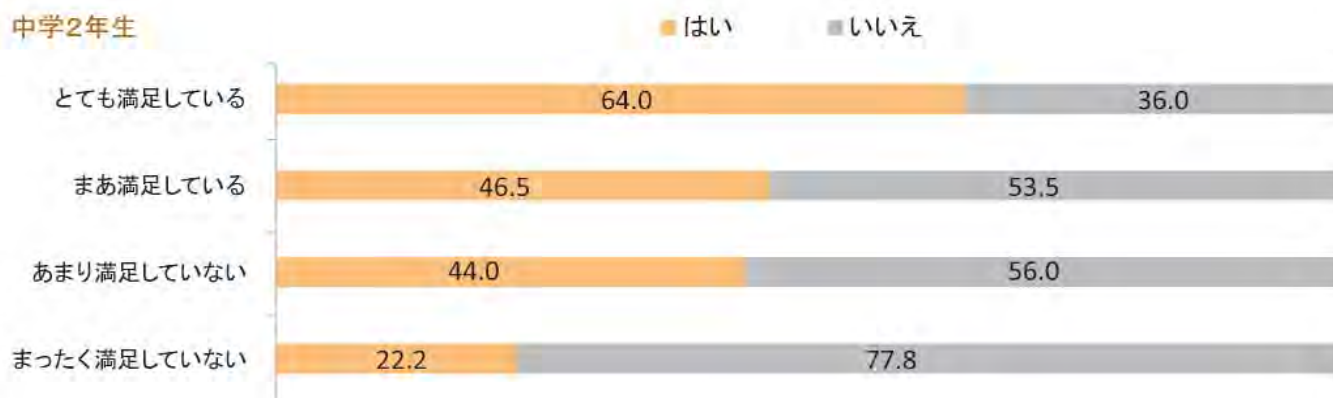
(1) 友だち関係への「満足度」から見えるもの

グラフ 35 Q 17(7) 困難を解決する自信がある× Q7 友だち関係の満足度

小学5年生



中学2年生



グラフ 35 は、友だち関係への満足度と、自己効力感との相関関係を表しています。

小学校においては、友だち関係に「とても満足している」と答えた子どもの 60.5%が困難を解決できる自信があると答えたのに対して、「全く満足していない」と答えた子どもはわずか 23.1%しか自信があると回答していません。中学生の傾向もほぼ同じです。

子どもたちの生活は学校が中心です。その学校生活の中で大きな割合を占めるのが友だち関係です。友だち関係が充実するか否かが、子どもたちの自己効力感に大きな影響を及ぼしていることが読み取れます。つまり、子どもたちの自己効力感を高めるには、良好な友だち関係をつくることが必要不可欠であると言えます。

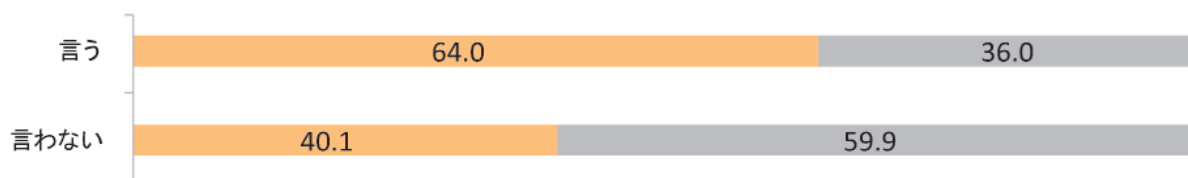
(2) 良好な友だち関係のポイントは「聞く・話す」にあり

では、子どもたちに良好な友だち関係をつくるには、何が大切なのでしょうか。

グラフ 36 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q8(1) 友だちと意見が違ふときの行動／自分の考えをはっきり言う

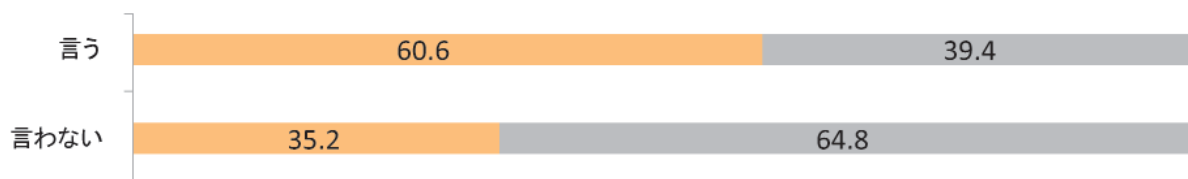
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 36 は、「友だちと意見が違ふとき、自分の考えや意見をはっきり言うか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

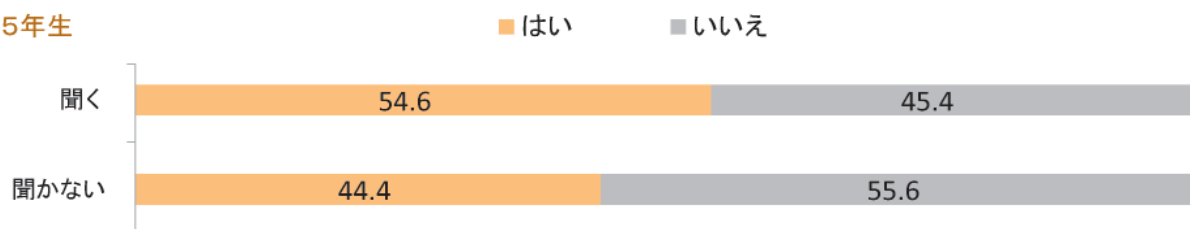
「友だちと意見が違ふとき、自分の考えや意見をはっきり言う」という質問に、「はい」と答えた子どもの約 60%が困難を解決する自信があると答えています。

たとえ友だちと意見が違っても、自分の思いや考えをためらうことなく友だちに伝えることができる子どもは、そうでない子どもに比べて自己効力感が高い傾向にあると言えます。友だちの顔色をうかがい、安易に流されるのではなく、自分が正しいと思ったことを相手にきちんと伝えられることが、良好な友だち関係をつくるポイントであると言えます。

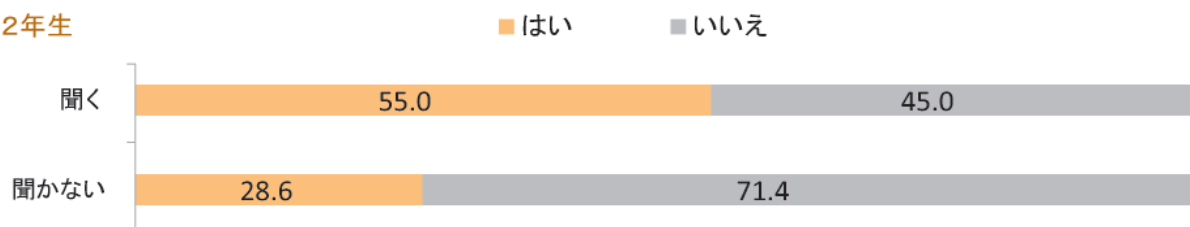
良好な友だち関係をつくる上で、友だちと意見が違っても、自分の考えや意見をはっきり言うことが大切であることはわかりましたが、聞くということについてはどうでしょうか。

グラフ 37 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q8(2) 友だちと意見が違ふときの行動／友だちの考えをしっかりと聞く

小学5年生



中学2年生



グラフ 37 は、「友だちと意見が違ふとき、友だちの考えをしっかりと聞くか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

「友だちと意見が違ふとき、友だちの考えをしっかりと聞く」という質問に「はい」と答えた子どもの約 55% が困難を解決する自信があると答えたのに対して、そうでない子どもは約 30 ～ 45% 程度しか自信があると答えていません。この傾向は、中学生の方がより顕著に表れています。

自己効力感と「自分の意見や考えをはっきり言う」が関係していることはわかる気がします。自分に自信があるからこそ、友だちと意見が違っても、「自分の意見や考えをはっきり言う」ことができると考えられます。しかし、聞くということは受動的な行動であり、一見すると自己効力感との相関性は低いように思われますが、実は大いに関係があることがわかります。自分の思いや考えばかりを相手に主張していたのでは、良好な友だち関係をつくることはできません。友だちの考えをしっかりと聞くことによって、友だちとの信頼関係が生まれます。したがって、「友だちの考えや意見をしっかりと聞く」と答えた子どもは、友だちとの良好な関係をつくることができ、それが自己効力感につながっていると考えられます。

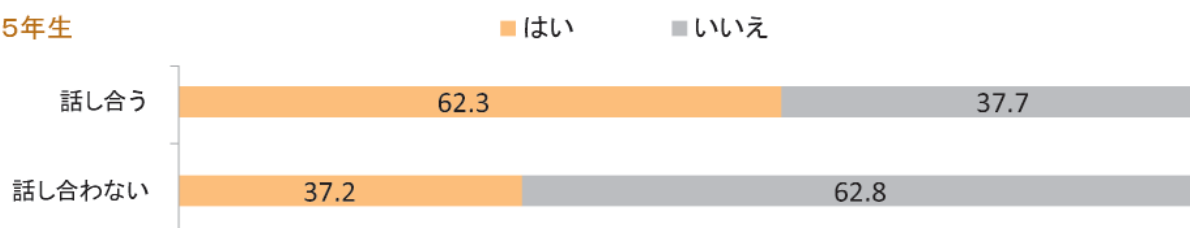
学校や家庭において、人の話にしっかりと耳を傾けて聞くという態度を育てることは、子どもたちの自己効力感を育む上で欠かすことができないことと言えます。

(3) 友だちと「よく話し合う」関係をつくろう

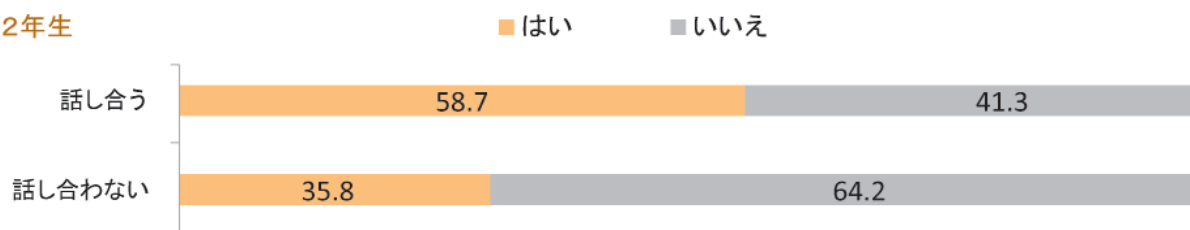
良好な友だち関係をつくるには、友だちと考えや意見が違ふ時に、「自分の考えや意見をはっきり言う」、「友だちの考えや意見をしっかりと聞く」ことが大切であることはすでに述べました。このことは、たとえ友だちと意見が食い違っても、互いに心を開いてよく話し合うことの大切さを表していると言えます。

グラフ 38 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q8(3) 友だちと意見が違ふときの行動／よく話し合う

小学5年生



中学2年生



グラフ 38 は、「友だちと意見が違うときに、お互いによく話し合うか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。小・中学生ともに、「友だちと意見が違うとき、お互いによく話し合う」という質問に「はい」と答えた子どもの約 60%が困難を解決する自信があると答えたのに対して、そうでない子どもは約 35%程度にとどまりました。

友だちと意見や考えが違うときにとってしまいがちな行動として、仲が悪くなると嫌だから言わない、友だちに合わせるようにするということが考えられます。このような行動をとってしまいがちな子どもは自己効力感が低く、反対にお互いが納得するまでよく話し合うことができる子どもの自己効力感が高いことがわかります。

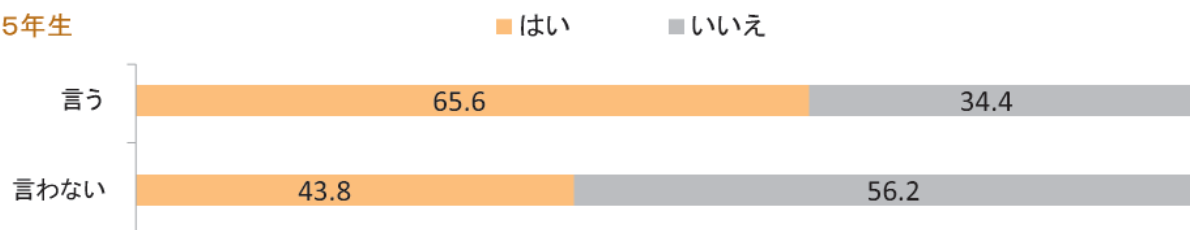
子どもたちが、お互いに友だちとよく話し合うという関係をつくるには、授業の中に友だちどうして話し合う場を積極的に取り入れることが大切だと思います。また、クラス全体だけではなく、少人数での話し合い活動も取り入れるという方法も考えられます。日ごろから、お互いに友だちと何でも話し合う関係づくりを育むことで、子どもたちの自己効力感を高めることができると考えます。

2 教員と子どもとの信頼関係も大切

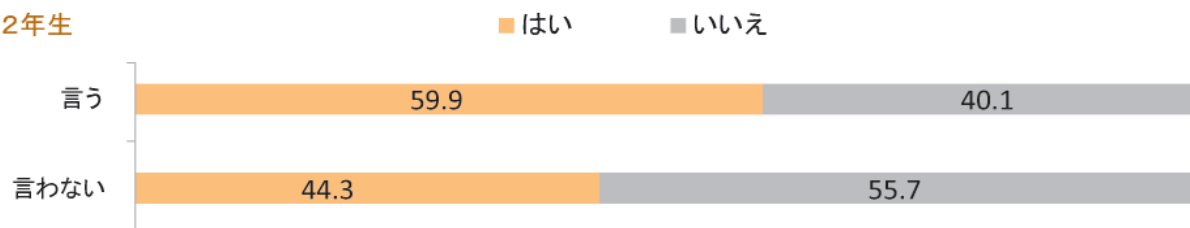
友だちとの関係と自己効力感の相関性を見てきました。ここでは、教員と子どもの関係性が自己効力感にどう影響を与えるかを検証します。

グラフ 39 Q 17(7)困難を解決する自信がある× Q10(3)先生から叱られたときの行動／自分の意見を言う

小学5年生



中学2年生



グラフ 39 は、「先生から注意されたり、叱られたりしたとき、先生に自分の考えや意見を言うか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

「先生から注意されたり、叱られたりしたとき、先生に自分の考えを言う」という質問に「はい」と答えた子どもの約 60%から 65%が困難を解決する自信があると答えたのに対して、そうでない子どもは約 40%

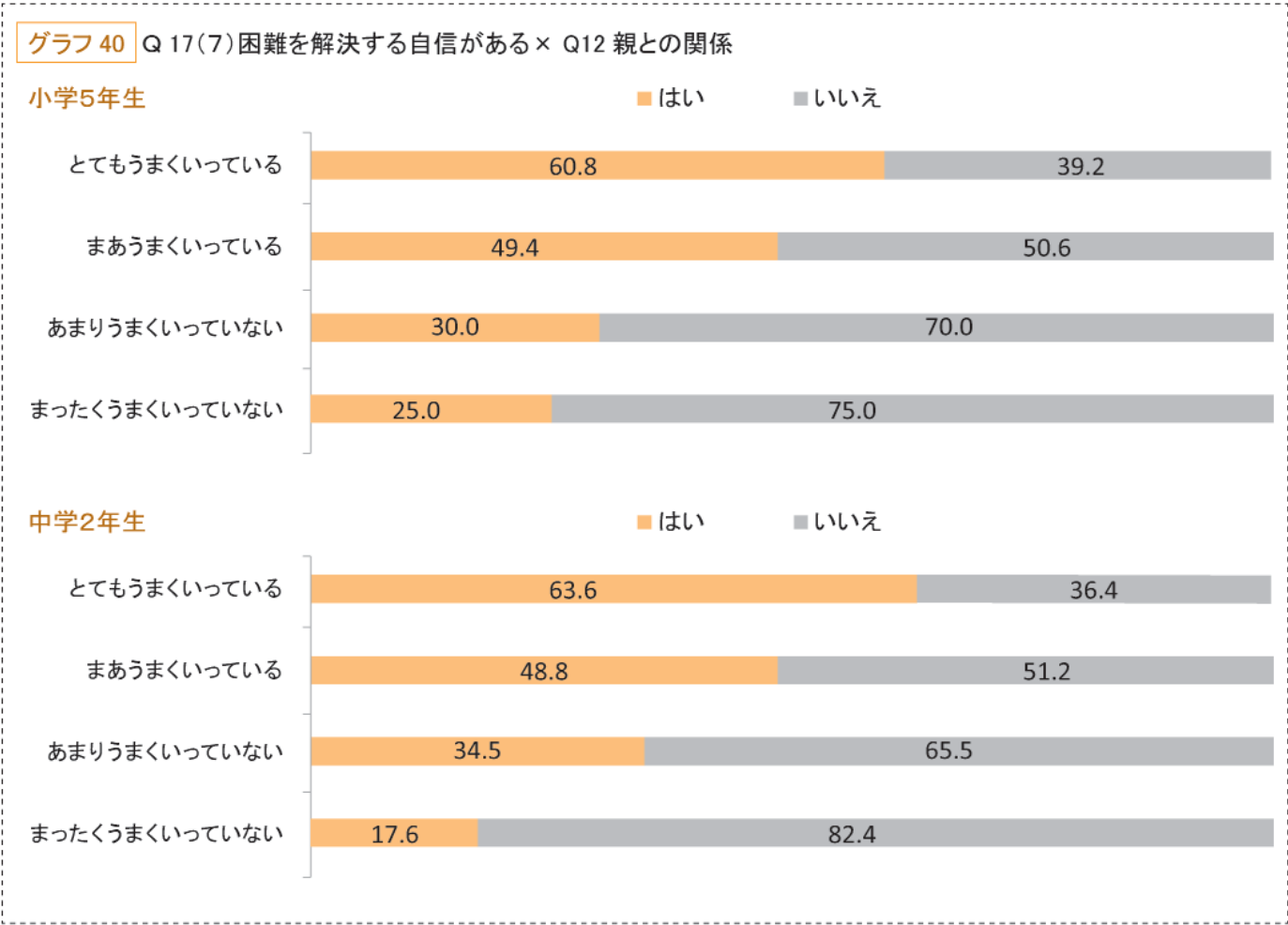
程度です。ここで着目したいことは、小・中学生ともに、「はい」と「いいえ」の差が大きいということです。小学校では、21.8 ポイント（65.6－43.8）、中学校では 15.6 ポイント（59.9－44.3）となっています。これは、先生から注意されたり、叱られたりしたとき、先生に自分の考えや意見を言うか、言わないかは、子どもたちの自己効力感との関係に優位性が見られたということです。

つまり、日ごろから教員に対して、子どもたちが自分の考えや意見をしっかり言うことができる関係をつくるのが、子どもたちの自己効力感を高める上で大切であるということです。逆に、「先生に言ってもしょうがないので従う」「真剣に考えないで、適当に従う」という質問に「はい」と答えた子どもの自己有効感の値は高くはありませんでした。子どもの声に耳を傾け、互いの信頼関係を築きあげていくことが、子どもたちの自己効力感を育てるには欠かせないものであると言えます。

3 何よりも大切なことは、良好な親子関係

(1) 親子関係への「満足度」から見えるもの

友だちや教員との関係が、子どもたちの自己効力感に与える影響について見てきましたが、ここでは、親子関係が自己効力感に与える影響を検証していくことにします。



グラフ 40 は、「親との関係はうまくいっていますか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。親との関係を「とてもうまくいっている」と答えている小学生のうち 60.8%は困難を解決する自信があると答えています。中学生においては、63.6%という数値になっています。「親との関係がまったくうまくいっていない」と答えた子どもの、小学生では 75%、中学生では 82.4%が、困難を解決する自信がないと答えています。親子関係が子どもの自己効力感に与える影響の大きさがうかがえます。

(2) 親子の会話が自信につながる

親子関係が良好かどうかの目安として、親との会話の頻度を考えてみます。

グラフ 41 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q13 親との会話頻度

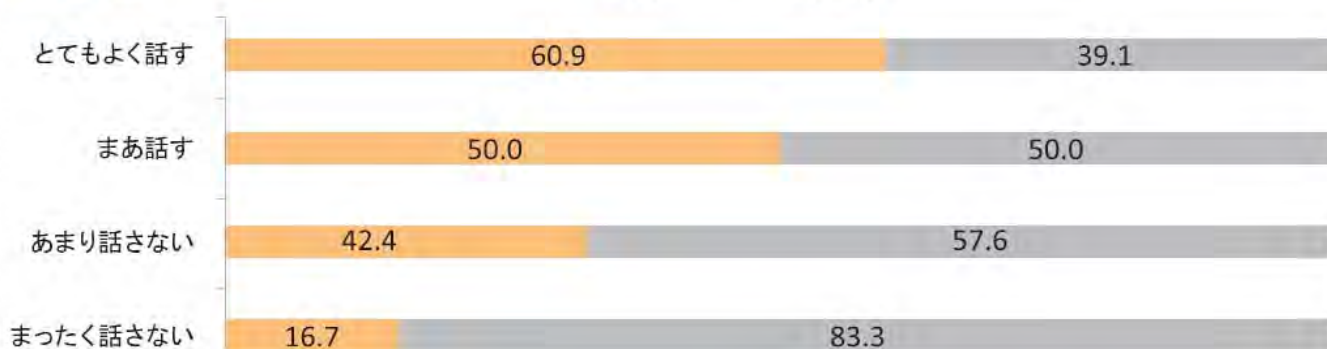
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 41 は、「ふだん、親とどのくらい話をしますか」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。「とてもよく話す」と答えた小学生の 57.6%、中学生の 60.9%は、困難を解決する自信があると答えています。一方、「まったく話さない」と答えた子どもの多くは、困難を解決する自信がないと答えています。親子関係の中でも、ふだんどのくらい話をするかがいかに重要であるかが表れています。つまり、親とよく話をする子どもほど、自己効力感が高いことがわかります。友だちや先生との関係も大切ですが、親と子どもが、よく話をすることが自己効力感を育むことにつながると言えます。

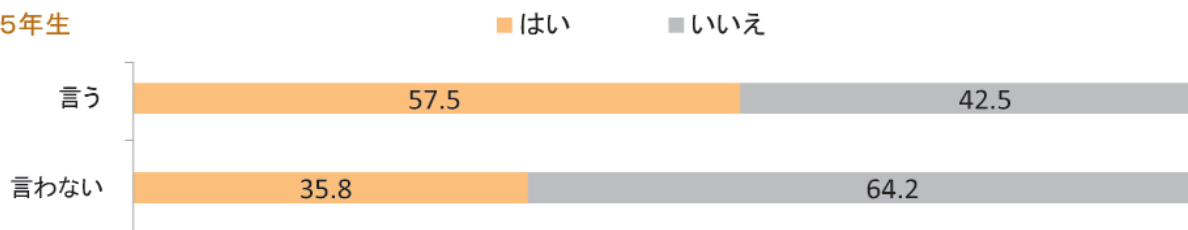


(3) 良好な親子関係のポイントも『聞く、話す、話し合う』

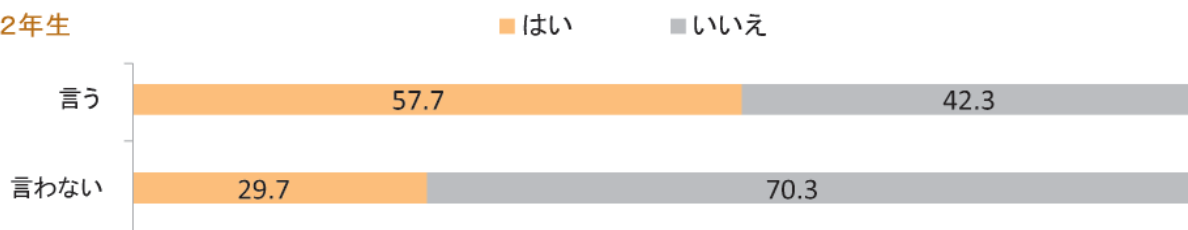
良好な親子関係を築くために何が大切なのか、子どもたちに対して「親と考えや意見が違うとき、どうしていますか」の質問から探っていきたいと思います。

グラフ 42 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q15(1) 親と意見が違うときの行動／考えをはっきり言う

小学5年生



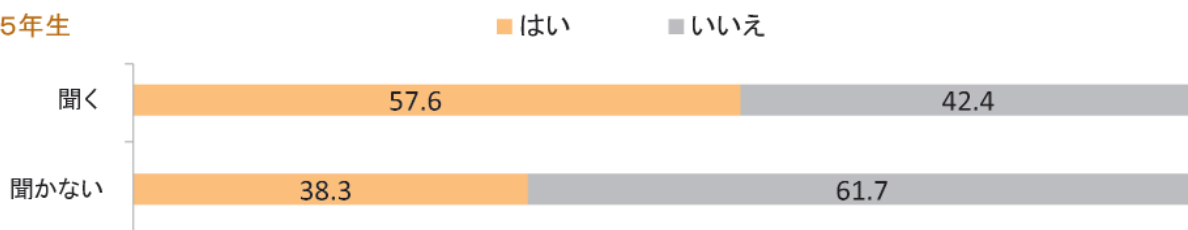
中学2年生



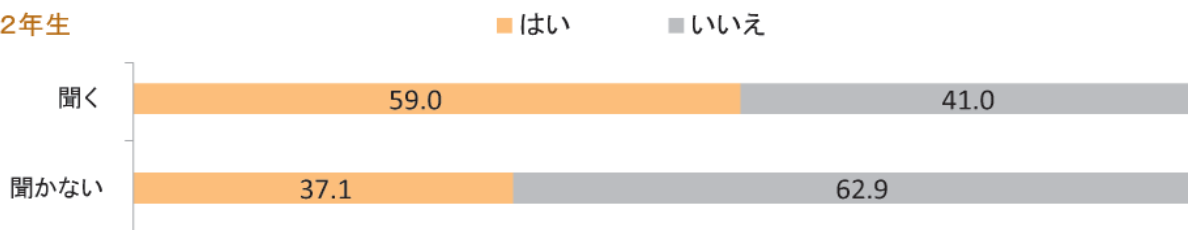
グラフ 42 は、「親と意見が違うとき、自分はこう思うとはっきり言う」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

グラフ 43 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q15(2) 親と意見が違うときの行動／親の考えをしっかりと聞く

小学5年生



中学2年生

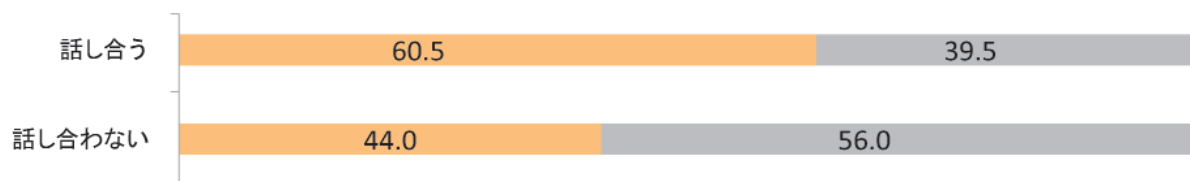


グラフ 43 は、「親と意見が違うとき、親の考えや意見をしっかりと聞く」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

グラフ 44 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q15(3) 親と意見が違ふときの行動／わかってくれるまで話し合う

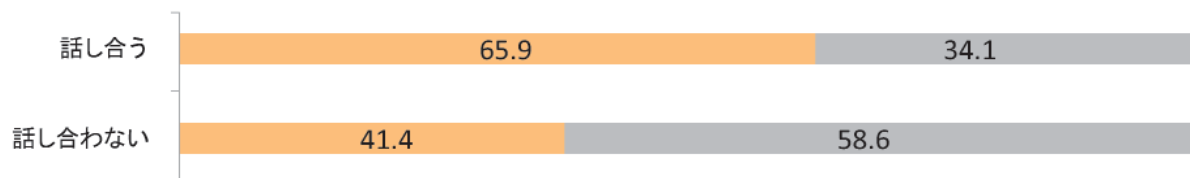
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 44 は、「親と意見が違ふとき、親がわかってくれるまで話し合う」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

グラフ 42、グラフ 43、グラフ 44 からは、親と意見が違ふとき、きちんと主張できたり、親の考えをしっかりと聞けたり、親との話し合いがしっかりできたりする子どもの方が、困難を解決する自信があるということがわかります。

これらの結果から、良好な親子関係を築くためのポイントも、『話す、聞く、話し合う』であると言えます。

4 まとめ

子どもたちの幸福感・満足感を支える自己効力感は、友だちや教員、親子の信頼関係によって育まれます。特に、『話す、聞く、話し合う』という基本的なコミュニケーションを大切にすることによって、友だちどうし、教員と子ども、親と子どもが何でも話し合える関係がつくられます。中でも、良好な親子関係は、子どもの自己効力感を育むために最も重要なものであると言えます。第Ⅲ章でも触れられていますが、日ごろから子どもの話に耳を傾け、親子の日常的なつながりを大切にしたいものです。

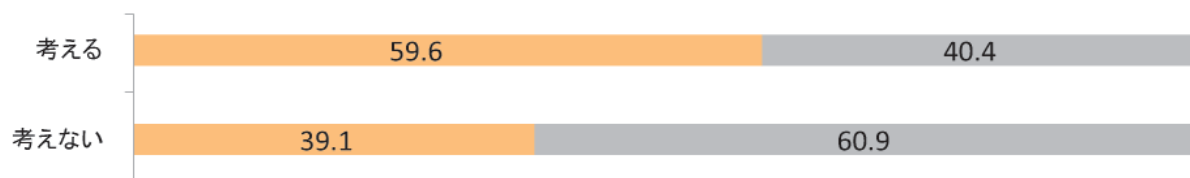
本章では、子どもたちの自己効力感を育むこととして、友だち、教員、親と『話す、聞く、話し合う』ということが大切であることを明らかにしてきました。

では、自己効力感の高い子どもは、困難が起きたときどうしているかということを補足として記します。

グラフ 45 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q20(2) 困難にぶつかったときの行動／まずは一人で原因や解決方法を考える

小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



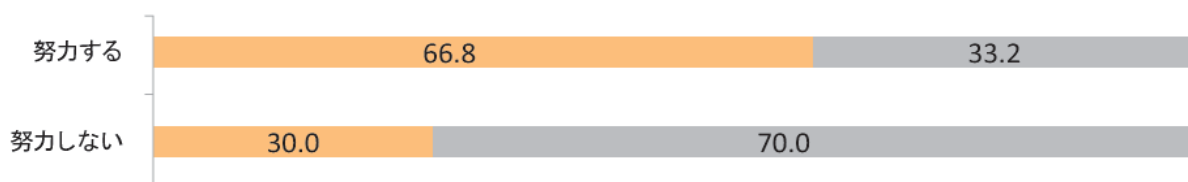
グラフ 45 は、「困ったことやいやだなと思うことがあったとき、まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」という質問と、自己効力感との相関関係を表しています。

困難を解決できる自信がある子どものうち、「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」に「はい」と回答した割合は、小・中学生ともにほぼ 60%と高くなっています。中学生に着目すると、「はい」と答えた子どものうち、61.3%は、困難を解決する自信があると答え、「いいえ」と答えた子どものうち、29.7%は困難を解決する自信がないと答えています。この 2 つの差は 31.6 ポイント ($61.3 - 29.7 = 31.6$) と大変大きいことがわかります。当然と言えば当然な結果ですが、まずは一人で考えるということが、いかに大事なことであるかがわかります。様々なことに向き合えるようになるには、困難にぶつかったとき、まずは一人で考えるという姿勢や行動が大事であり、その経験が次に生きるということではないでしょうか。

グラフ 46 Q 17(7) 困難を解決する自信がある × Q20(2) 困難にぶつかったときの行動／逃げずに努力する

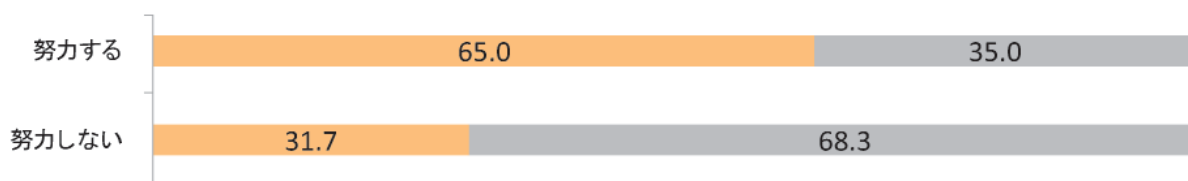
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



グラフ 46 は、「困ったことやいやだなと思うことがあったとき、逃げたりしないで解決のために努力するか」という問いと、自己効力感との相関関係を表しています。

「逃げたりしないで解決のために努力する」の質問に「はい」と答えた小・中学生ともに約 65%の子どもが、困難を解決する自信があると答えています。

グラフ 45、グラフ 46 からわかるように、自己効力感の高い子どもは、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、まずは一人で考えたり、困ったことやいやだなと思うことに対して逃げずに努力するという姿勢をもっていることがわかります。

自己効力感

「つらいことが起こっても解決できる自信がある」

良さを認められる環境
によって育まれる



何でも相談できる環境
によって育まれる



友だちや教員との良質な関わり・信頼関係



親との関わりによって育まれる

親子の良質な関わり・信頼関係



V 困難対応とその条件

1 自ら努力できる子どもに共通することは、「聞く力」

困ったことやいやなことがあったとき、自ら解決しようとするかどうかは、子どもたちの幸福感・満足感に大きく関わるものと考えました。そこで、困ったことやいやなことがあったときの対応の仕方として、次の2つの質問に着目しました。

Q20 あなたは、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、どうしていますか。次の質問に「はい」か「いいえ」で答えてください。

(2) まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える。 (はい・いいえ)

(3) 逃げたりしないで、解決のために努力する。 (はい・いいえ)

この質問の回答から、困ったことやいやなことがあったとき、自らの努力で解決しようとする態度があるかないかを読み解くことができると考えました。この二つの質問は、まずは一人で考え…、逃げたりしないで…という質問ですので、個人としてどう困難に対応するかを問うています。これは、一人で何とかしようとする『個人型の困難対応』と言えます。

これらの質問に対して「はい」と答えた子どもが他の質問に対して、どのような回答をしているのかについて調査し、その傾向を分析することにより、自ら努力できる子どもを育むために必要な事柄が浮き彫りになってくると考えました。

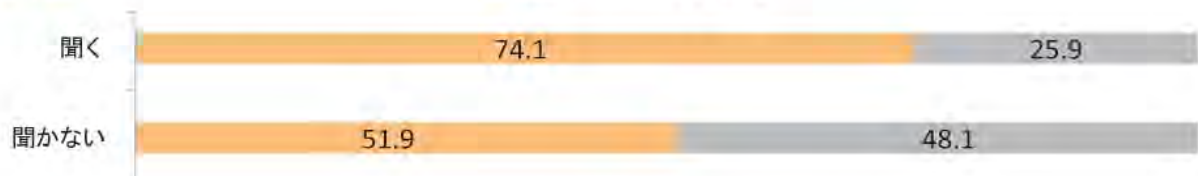
分析を通して、特に、親や友だちとのコミュニケーションのとり方について、考察すべき関係性が見られたため、関係性・優位性の高い項目を抽出しました。

(1) 困ったことやいやだなと思うことがあったとき（困難対応）、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」という質問に対して、「はい」と答えた子どもの、親や友だちとのコミュニケーションの取り方の傾向

グラフ 47 Q 20(2) 困難対応／まずは一人で原因や解決方法を考える× Q8(2) 友だちと意見が違うときの行動／友だちの考えをしっかりと聞く

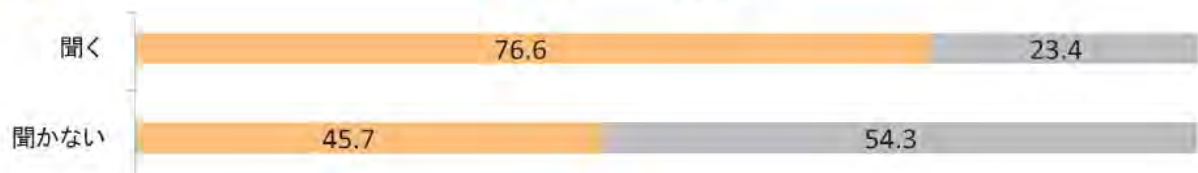
小学5年生

■ はい ■ いいえ



中学2年生

■ はい ■ いいえ



友だちの満足度や、親との会話の頻度は、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、一人で考えることができることは、強い関係性が見られませんでした。

グラフ 47 は、「あなたは、友だちと考えや意見が違うとき、どうしていますか」の質問で、「友だちの考えをしっかりと聞く」の問いに、「はい」か「いいえ」のいずれかを答えた子どもたちが、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「一人でなぜかを考え、どうしたらいいか考える」という問いに対し、どう答えているかを示したものです。

小学5年生、中学2年生ともに、「あなたは、友だちと考えや意見が違うとき、どうしていますか」の設問に対し、「友だちの考えをしっかりと聞く」に「はい」と答えた子どもの約75%は、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいか考える」と答えています。

グラフ 48 Q 20(2)困難対応／まずは一人で原因や解決方法を考える× Q14(3)どんな親か／話をよく聞いて(尊重して)くれる

小学5年生

■ はい

■ いいえ

聞いてくれる

75.7

24.3

聞いてくれない

55.5

44.5

中学2年生

■ はい

■ いいえ

聞いてくれる

78.8

21.2

聞いてくれない

62.2

37.8

グラフ 48 は、「あなたの親はどんな親ですか」の質問で、「自分の話をよく聞いてくれる」の問いに、「はい」か「いいえ」のいずれかを答えた子どもたちが、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「一人でなぜかを考え、どうしたらいいか考える」という問いに対し、どう答えているかを示したものです。

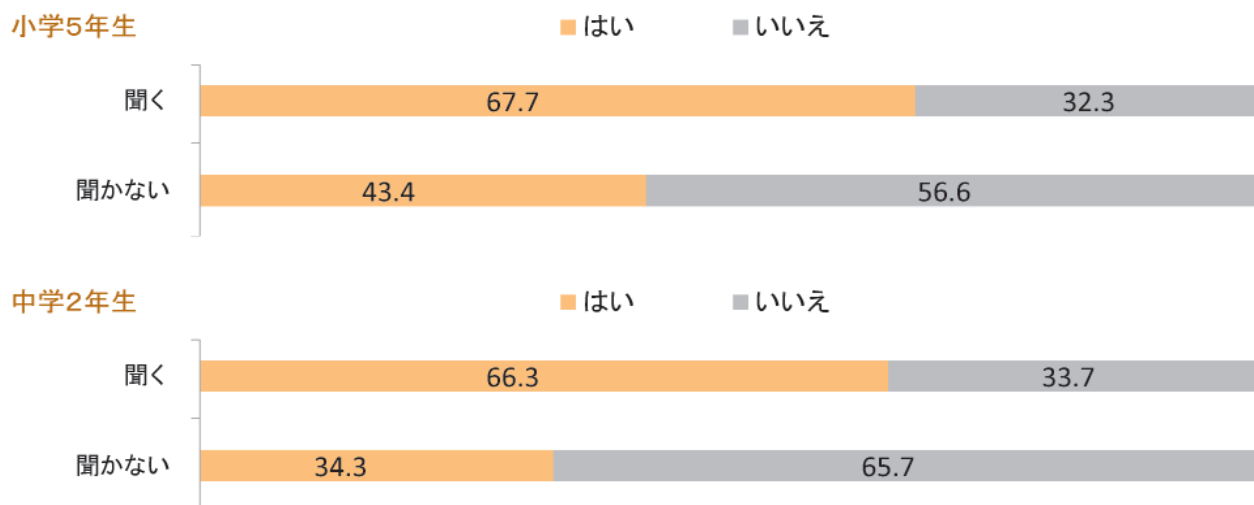
小学5年生、中学2年生ともに、「自分の話をよく聞いてくれる」に「はい」と答えた子どもの約75%は、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいか考える」と答えています。

グラフ 47、グラフ 48 からわかることは、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいか考える」という子どもたちの多くは、「友だちと考えや意見が違うとき、友だちの意見をしっかりと聞く」という姿勢をもっているということです。また、「親が、自分の話をよく聞いてくれる」と感じているということです。

「友だちの意見をしっかりと聞く」「親は自分の話をよく聞いてくれる」等、友だちや親とのコミュニケーションの「質的」部分については、大きな関係性・優位性が見られました。

(2) 困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「逃げたりしないで、解決のために努力する」という質問に対して、「はい」と答えた子どもたちの親や友だちとのコミュニケーションの取り方の傾向

グラフ 49 Q 20(3)困難対応／逃げずに努力する× Q8(2)友だちと意見が違ふときの行動／友だちの考えをしっかりと聞く



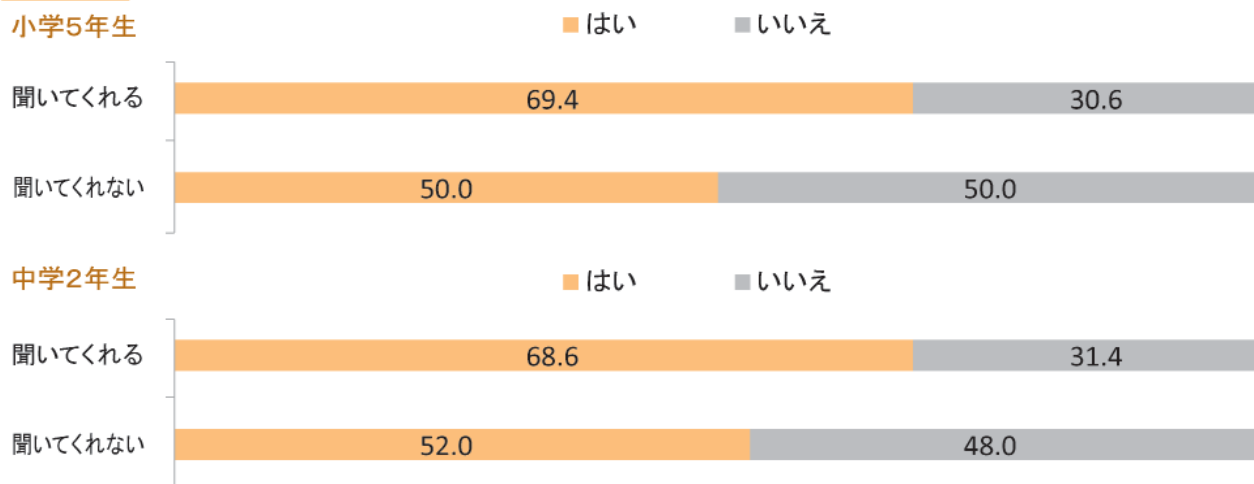
グラフ 49 は、「あなたは、友だちと考えや意見が違ふとき、どうしていますか」の質問で、「友だちの考えをしっかりと聞く」の問いに、「はい」か「いいえ」のいずれかを答えた子どもたちが、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「逃げたりしないで、解決のために努力する」という問いに対し、どう答えているかを示したものです。

小学5年生、中学2年生ともに、「友だちの考えをしっかりと聞く」に「はい」と答えた子どもの約67%は、「逃げたりしないで、解決のために努力する」と答えています。

ここで、注目したいことは、グラフからもわかるように小学5年生と中学2年生ともに、差が大きいということです。小学5年生は、24.3ポイント（67.7－43.4）、中学2年生は32.0ポイント（66.3－34.3）の差が見られます。

このことからわかることは、「友だちの考えをしっかりと聞く」ことができる子どもの多くは、「逃げたりしないで、解決のために努力する」ことができるということがわかります。

グラフ 50 Q 20(3)困難対応／逃げずに努力する× Q14(3)どんな親か／話をよく聞いて(尊重して)くれる



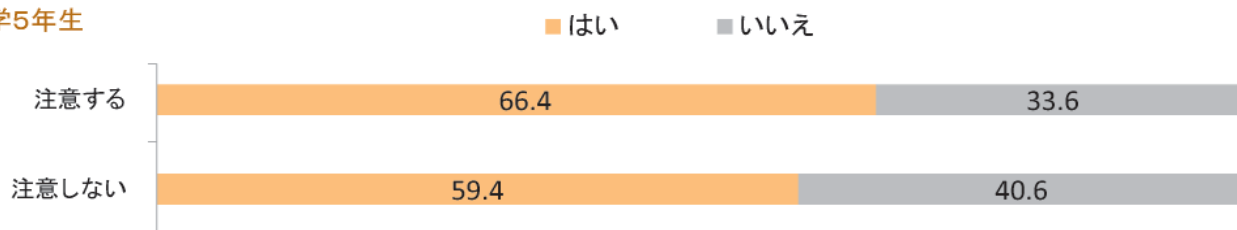
グラフ 50 は、「あなたの親は、どんな親ですか」の質問で、「自分の話をよく聞いてくれる（尊重してくれる）」の質問に、「はい」か「いいえ」のいずれかを答えた子どもたちが、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「逃げたりしないで、解決のために努力する」という質問に対し、どう答えているかを示したものです。

小学5年生、中学2年生ともに、「（親が）自分の話をよく聞いてくれる（尊重してくれる）」に「はい」と答えた子どもの約70%は、「逃げたりしないで、解決のために努力する」と答えています。

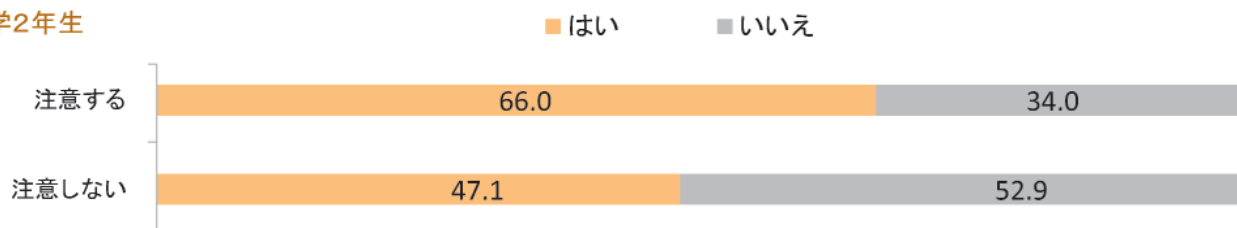
「友だちの意見をしっかりと聞く」「親は自分の話をよく聞いてくれる」等、『聞く』と、「逃げたりしないで、解決のために努力する」ということと大きな関係性・優位性が見られました。

グラフ 51 Q 20(3) 困難対応／逃げずに努力する × Q14(5) どんな親か／いけないところは注意する

小学5年生



中学2年生



グラフ 51 は、「あなたの親は、どんな親ですか」の質問で、「自分のいけないところは何でも注意する」の質問に、「はい」か「いいえ」のいずれかを答えた子どもたちが、困ったことやいやだなと思うことがあったとき、「逃げたりしないで、解決のために努力する」という質問に対し、どう答えているかを示したものです。

「自分のいけないところは何でも注意する」の質問に、「はい」と答えた中学2年生の約66%の子どもは、「逃げたりしないで、解決のために努力する」と答えています。このことから、中学生では、「逃げたりしないで、解決のために努力する」とことと、「（親が）いけないところは何でも注意する」との関係性も大きいことが分かりました。中学生にとって、しっかりと注意してくれる親の存在が重要であることがわかりました。

(3) 個人型の困難対応とコミュニケーションとの関係についての考察

困ったことやいやなことがあったときの対応とコミュニケーションの取り方の関連で、興味深いのは、友だちの満足度や会話の頻度等の『コミュニケーションの量的部分』との関係性が薄い一方で、意見を聞く、話し合う等の『コミュニケーションの質的部分』との関係性が顕著に表れるところです。

困ったことやいやなことがあったときの対応での「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで、解決のために努力する」といった個人型の困難対応は、一見すると孤立した状態を示していそうですが、友だちの意見を聞く、友だちとよく話し合うといった豊かなコミュニケーションを基盤とした良質な人間関係の中から育まれる態度であることがうかがえます。

また、子どもたちが自ら努力するためには、努力を肯定的に受け止めてくれる周囲の環境が必要なのではないでしょうか。努力やがんばりに対して、認めてくれる人や見守ってくれる人がいることこそ大切な点だと考えます。

それとは逆に、努力やがんばりを認めなかったり、冷やかしたりするような環境では、自分の力で努力するという態度は育まれないのではないのでしょうか。

「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで、解決のために努力する」といった個人型の困難対応であっても、良質な人間関係が大きく関わると言えます。

さらに、コミュニケーションの中で、特に関係性が高いのは、『聞く』ことです。「友達の意見をしっかり聞く」「親が話を聞いてくれる」といった『聞く』ことが困難対応に大きく関係します。これらのことから、自ら努力できる子どもを育成するためには、子どもも親も『聞く』ということを大事にしないといけないということがわかります。

それでは、なぜコミュニケーションの中で『聞く』が顕著に関係してくるのでしょうか。人間関係の中で『聞く』ことと、自分の意見をはっきりと言うこととは、強い関係性があるのではないかと考えます。他者の話を聞くことができるからこそ、自分の意見を言うことができます。そして、話を聞いてくれる他者がいるからこそ、自分の意見を言うことができるからではないのでしょうか。

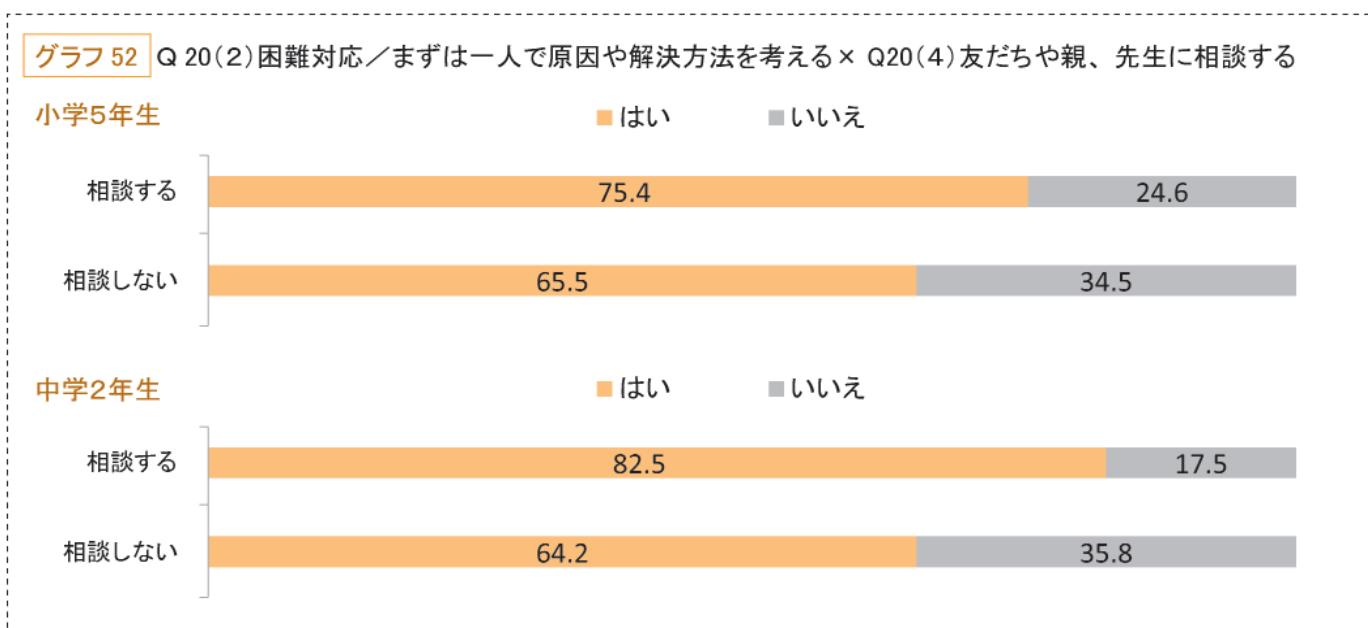
2 相談できる子どもは、自ら努力することができる

(1) 相談できる子どもは、一人でどうしたらいいか考えることができる。

次に、困ったことやいやなことがあったときの対応の仕方として、「親や友だち、先生に話し相談する」という質問に着目しました。これは、助けを求める『救援型の困難対応』と考えることができます。

「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで、解決のために努力する」といった、『個人型の困難対応』と、「親や友だち、先生に話し相談する」という『救援型の困難対応』との関係性を分析することで、困ったことやいやなことがあったときの対応の仕方についての全体像が見えてくると考えました。

そこで、「親や友だち、先生に話し相談する」という質問に対して「はい」と答えた子どもたちが、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで、解決のために努力する」といった、『個人型の困難対応』の質問に対して、どのように回答しているかを分析しました。その結果が、グラフ 52 です。

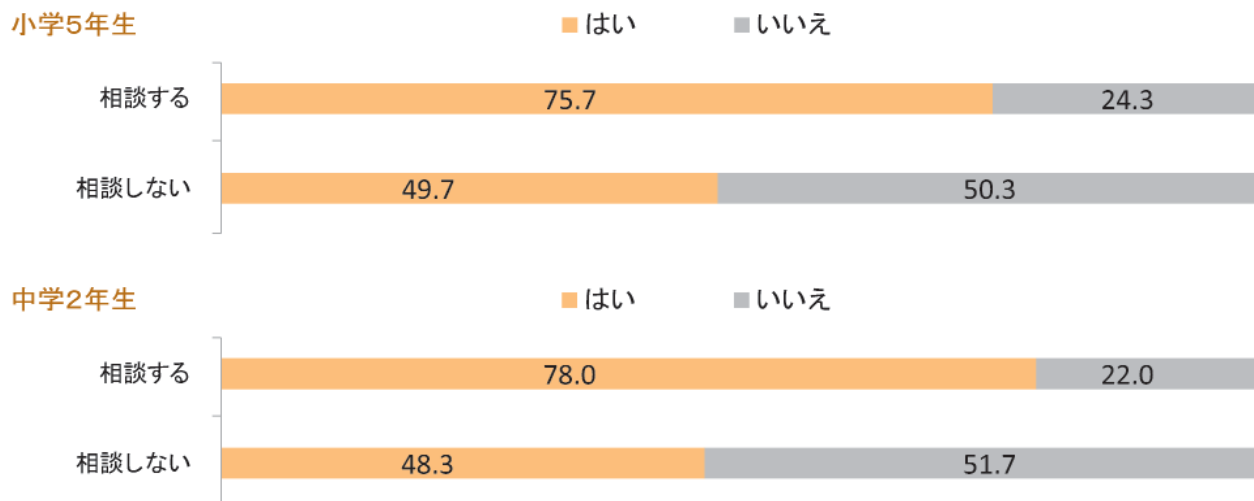


「友だちや親、先生に相談して解決できるように努力する」という質問に対して「はい」と答えた小学5年生の75.4%、中学2年生の82.5%は、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」に「はい」と答えています。

「友だちや親、先生に相談して解決できるように努力する」子どもほど、「まずは、一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」という傾向があることは明らかなです。

(2) 相談できる子どもは、逃げずに努力できる

グラフ 53 Q 20(3) 困難対応／逃げずに努力する× Q20(4) 友だちや親、先生に相談する



グラフ 53「友だちや親、先生に話し、相談する」という質問に対して「はい」と答えた小学5年生の75.7%、中学2年生の78.0%は、「逃げたりしないで、解決のために努力する」に「はい」と答えています。

ここでも、「友だちや親、先生に話し、相談する」子どもほど、困ったことやいやなことがあったときの対応の仕方として、「逃げたりしないで解決のために努力する」という傾向がうかがえます。

「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」「逃げたりしないで解決のために努力する」というような『個人型の困難対応』と、「友だちや親、先生に相談して解決できるように努力する」というような『救援型の困難対応』とは、一見すると相反するような設問だと思われます。しかし、『個人型の困難対応』と『救援型の困難対応』の間には、関係性が優位にはたらくことがわかりました。

3 まとめ

『聞く』ということがコミュニケーションの基礎であり、特に親との関わりの中で『聞く』が育まれるのではないかと考えます。成長過程の中で、親とのコミュニケーションがロールモデルとなり、友だちとの人間関係の構築につながるはずです。したがって、自ら努力できる子どもたちに共通する特徴として、『親が自分の話を聞いてくれる』という関係性があることは明らかなです。

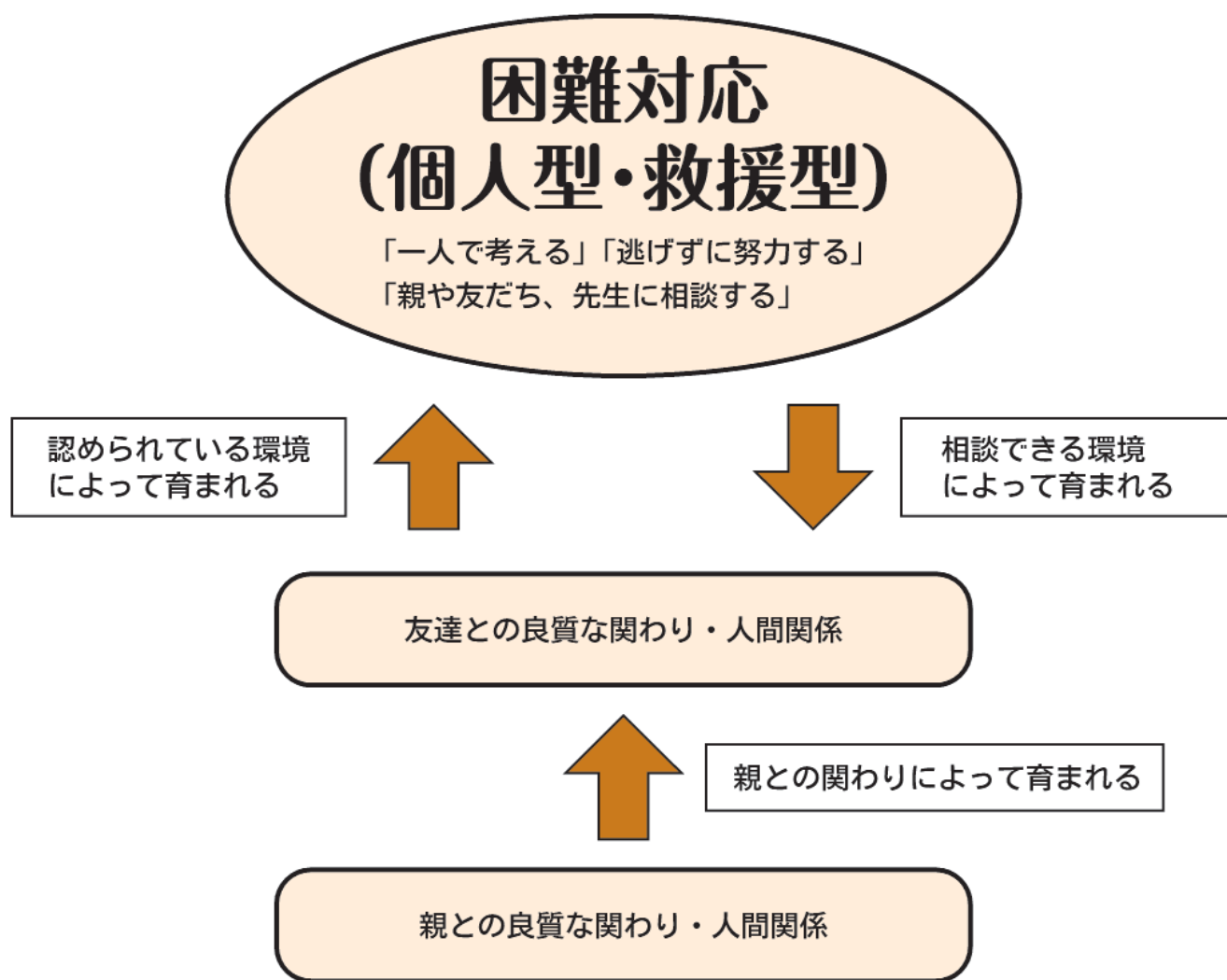
家庭でも学校でも、まずは大人がしっかりと話を聞くという態度で子どもに接することが、とても大切なことと言えます。

「まずは一人でなぜかを考え、どうしたらいいかを考える」や「逃げたりしないで解決のために努力する」といった自ら努力する態度は、相談できる体制が基盤となっているものではないかと考えられます。相談できる体制があってこそ、自ら努力する安心感が得られると思われます。

自ら努力するという態度は、一見、子どもたちの個人的な態度と思われがちではありますが、そのためには、親や友だちを含めた周囲との関わりの中で、安心感がなければ成立しない態度であると推測されます。

私たち大人が、自ら努力できる子どもを育むためにできることは、子どもが認められていると感じる環境をつくることです。具体的には、些細なことであっても子どものがんばりに気づくこと、声をかけること、

ほめること、励ますことがとても大切なことだと考えます。



VI 対人関係のなかにある相関的構造

1 多くの影響を与える対人関係のあり方

既に第V章までに多くのことが明らかにされてきましたが、とりわけ顕著なこととして、子どもの幸福感や自己効力感などに対する、対人関係の持ち方の影響がきわめて大きいことが挙げられます。とくに友人関係と親子関係に関わる部分は、他の多くの項目についてかなりの影響を及ぼしていることがうかがえました。そうならば当然、それぞれの関係における満足度や意見が異なったときの対応などが、さらに何によって規定されているのかは大変興味深いところがあります。

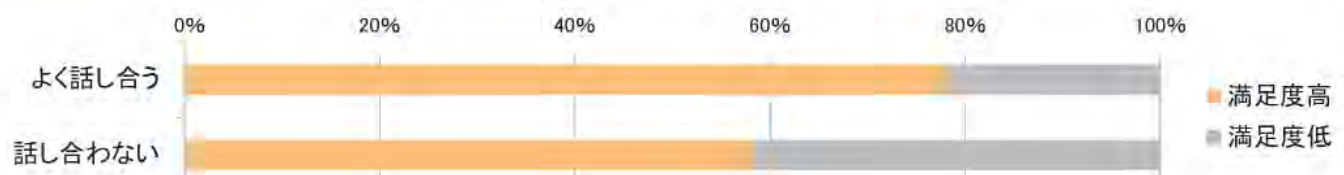
しかし、本調査では、こうした部分を十全に明らかにできるだけの質問項目が用意されてはいません。それにはおそらく、家族における生育歴、家族関係の歴史や親子間コミュニケーションの特性、そして学校・学級での対人関係に関する諸経験などが深く関わってくるはずです。そのため以下では、ごく限られた考察となりますが、まず友人関係に関わる質問項目のなかで、次に親子関係に関わる質問項目のなかで、それぞれどのような傾向が認められるのかを確認しておきたいと思います。その上で、親子関係に関わる項目と友人関係に関わる項目との間に認められる関係について議論をすすめてみましょう。本章では主に相関係数に基づき議論をすすめますが、とくに重要と思われる部分については対応するグラフも提示しておきました。

2 友だち関係は向き合える子どもほど満足

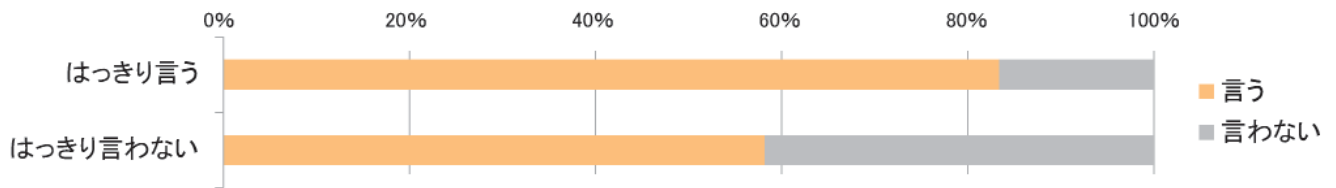
まず、友人関係について総体的な満足感とコミュニケーションのとり方（考えや意見が違ふときの対応）との関係について見てみましょう（グラフ54・小中学生区別なし）。この章では、友人関係の総体的満足度を以下のように操作的に高群／低群と二分しました。始めに、Q6の「友達と一緒にいると楽しいですか」とQ7「友達関係に満足していますか」の各設問への回答が、とても満足している＝3点、まあ満足している＝2点、あまり満足していない＝1点、まったく満足していない＝0点とし、両者を合計します。次に、

そして、この総体的満足度と、考えや意見が異なるときの対応についての6つの設問に対する回答（はい／いいえ）の相関係数を算出しました。一定の基準で関係が認められた項目は、「お互いによく話し合う」(0.22)、「友達の意見や考えをしっかりと聞く」(0.15)、「自分は、こう思うとはっきり言う」(0.13)、「仲が悪くなるといやなので言わない」(-0.12)となります（すべて統計的検定により0.1%水準で有意となったもの。「仲が悪くなる」と…」は、それに「はい」と答えるほどに満足度が低くなる傾向が強いということ）。順当な結果ですが、意見が異なるときにきちんと向き合える関係が、総体的な満足感を高い水準にしているといえます。あえていえば、子どもたちが「空気を読んで何も言わない」ような関係でも一様に満足しているわけでは決していないことがうかがえます。

グラフ 54 友だちとよく話し合う×友人関係の満足度



グラフ 55 こう思うとはっきり言う×仲が悪くなるので言わない



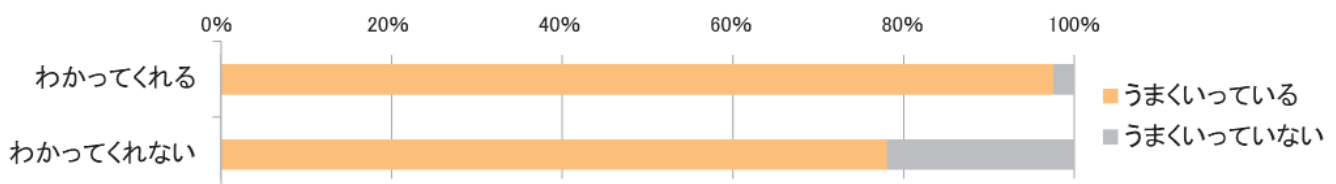
次に、考えや意見が違ふときの対応 6 項目の間の関係についても確認しておきましょう。当然、回答には一貫した傾向が認められますので、たとえば「自分はこう思うとはっきり言う」と「よく話し合う」の間には比較的強い相関 (0.35) が認められますし、「仲が悪くなるので言わない」と「めんどろな話はしたくないので言わない」の間にも同様の相関 (0.41) が認められます。しかし、グラフ 55 のとおり、「はっきり言う」には〈はい〉と答えながら、「仲が悪くなるといやなので言わない」にも〈はい〉と答える小中学生が一定数 (15% 弱) いるように、回答には揺れもあり、友人関係における複雑さや微妙さも垣間見えるように思います。

3 話を聞いてくれる親の子どもは、親の話をしっかり聞く

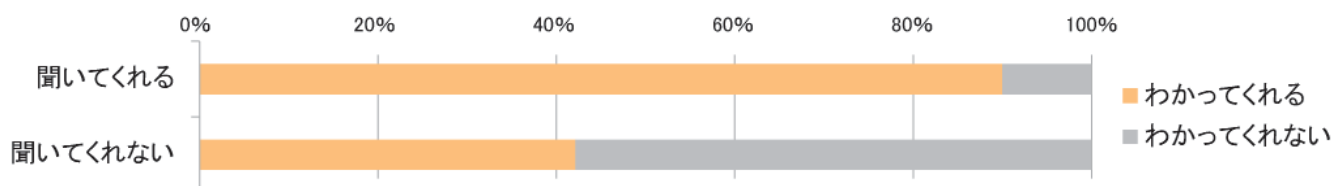
ここでは Q12「親とうまくいっていますか」、Q14「どんな親ですか」、Q15「考えや意見が違ふとき、どうしていますか」の 3 設問を取り上げ、まず Q12 と Q14 との関係、次に Q14 と Q15 との関係について把握していきます。

Q12 については、〈とてもうまく…〉から〈まったくうまくいっていない〉の 4 段階で回答を求めています。〈とても…〉と〈まあうまく…〉とを「うまくいっている」群に、〈あまり…〉と〈まったくうまくいっていない〉を「うまくいっていない」群に 2 分しました。その上で、「どんな親ですか」の各質問と相関係数を計算した結果、統計的検定では 0.1% 水準で有意で、相関係数も 0.3 以上と比較的強い関係が認められたものを取り上げますと、やはり「自分のことをわかってくれる」(0.36)、「自分の話をよく聞いてくれる (尊重してくれる)」(0.32)、「自分のことをほめてくれる」(0.30) となります。補足すれば、Q14 内部で「自分のことをわかってくれる」と強い相関を示したのは、「話をよく聞いてくれる」(0.47)、「ほめてくれる」(0.42) でした。子どもの話をよく聞き、ときにほめることが、親に理解されているという思いを形成し、その思いが総体としての「親とうまくいっている」という感覚と結びついていると言えるでしょう。(グラフ 56・グラフ 57)

グラフ 56 親は自分のことをわかってくれる×親との関係



グラフ 57 親は自分の話をよく聞いてくれる×自分のことをわかってくれる

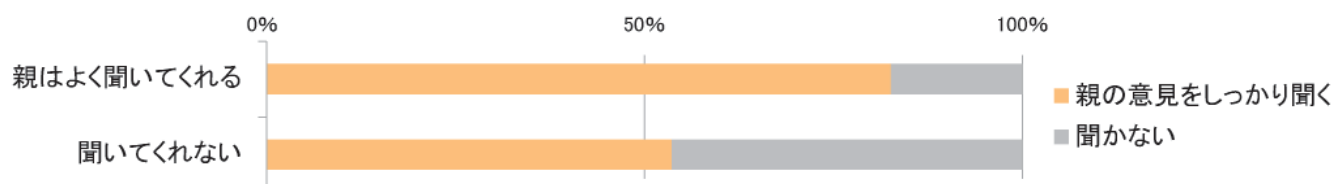


それでは、Q14の親についての子の認識（どんな親？）とコミュニケーションのとり方（とくに考えや意見が違ったときの）とはどのように関係しているのでしょうか（グラフ 58・グラフ 59）。特に強い関係や注目できる部分を選択的に紹介してみましょう。

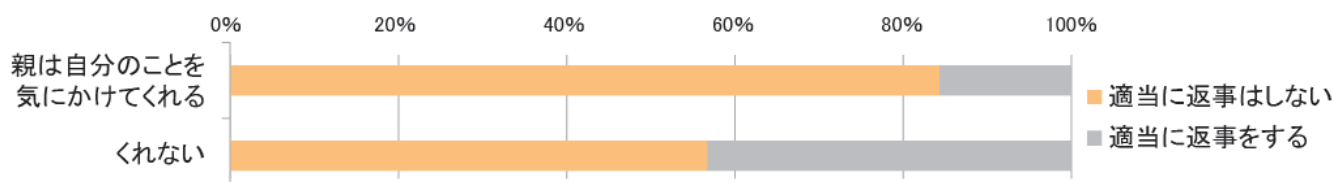
Q14の多くの項目と強い相関を示したのは、Q15の「親の考えや意見をしっかり聞く」でした。Q14の「自分の話をよく聞いてくれる」(0.32)、「自分のことをわかってくれる」(0.29)、「何でも話し合えることができる」(0.28)、「ほめてくれる」(0.27)となります。因果関係の向きは簡単に決められませんが、この場合は、親が話を聞いてくれる、理解してくれるという信頼感が「しっかり聞く」という行動を促しているように思われます。それはちょうど、「言っても聞いてくれないので話しはしない」が、Q14の「わかってくれる」(-0.27)と負の相関を示し、「自分のことを気にかけてくれない」(0.24)と比較的強い相関——他のQ15の質問、たとえば「言っても仕方がないのでだまって従う」などよりも強い相関——を示すことによっても補強される解釈と言えます。

これは親子関係に限ることではないと思われますが、「子どもが言うことを聞かない」と感じたときには、実は大人の側である自分が子どもの話を聞いてこなかったのではと省みる必要性はもちろん、相手（子ども）に「自分は理解されている」、あるいは「自分のことをちゃんと気にかけていてくれる」という思いを与えられてこなかったのではないかと省みる必要性も示唆しているのではないのでしょうか。

グラフ 58 親は自分の話をよく聞いてくれる×親の意見をしっかり聞く



グラフ 59 親は自分のことを気にかけてくれる×適当に返事をする



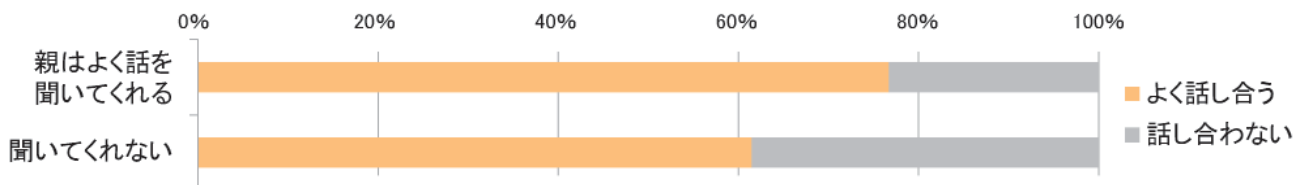
4 親に尊重されていると思えば、友だちも尊重する傾向

最後に、親子関係と友人関係との間に見られる相関関係を調べてみました（グラフ 60・グラフ 61）。具体的には、友人との対話指向（「考えや意見が違うとき…」）を尋ねたQ8の各質問と、親子関係に関わる

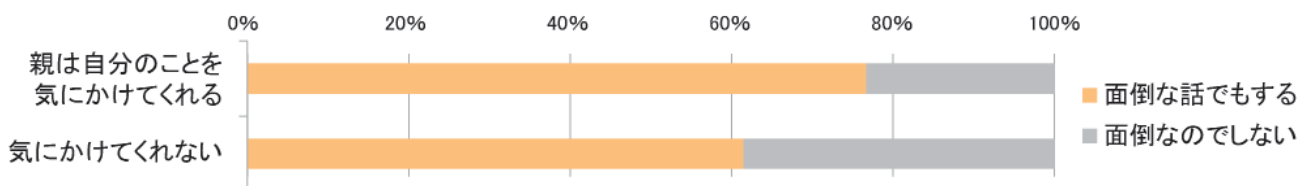
Q14の親についての認識（「どんな親か」）、そしてQ15の親との対話指向に関する各種質問との論理的にあり得る関係すべてについて相関係数を算出し、そのなかで統計的に有意（0.1%水準）と認められた関係に限り取り上げていきます（ただし、そのすべてに言及できないことはお断りしておきます）。

まず、Q14の親についての認識と友人との対話指向との間で有意な関係が認められた部分は主に以下のようになります。Q14の親は「自分のことをほめてくれる」が、Q8の「友達の考えや意見をしっかり聞く」（0.13）、「お互いによく話し合う」（0.13）、「こう思うとはっきり言う」（0.10）と。そして、Q14の親は「自分の話をよく聞いてくれる」が、Q8の「よく話し合う」（0.13）、「（友達の…）しっかり聞く」（0.12）と。さらに、Q14の「自分のことを気にかけてくれない」が、Q8の「友だちとめんどろな話しはしたくないので言わない」（0.12）と、それぞれ有意な関係にあります。総じて、親から尊重されていると思っている小中学生は、友だちとの対話（よく聞き、話し合う）を大切にする傾向があると言えます。自らが承認されていると思えることが、他者を承認することにつながるとは様々な議論のなかで言われてきたことであると思いますが、本調査でもこの点が確認されました。

グラフ 60 親は自分の話をよく聞いてくれる×友だちとよく話し合う



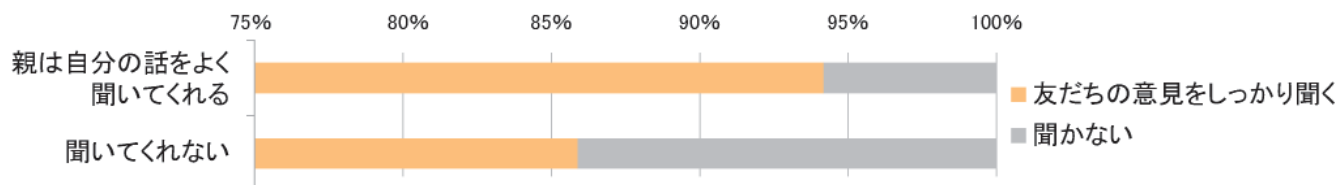
グラフ 61 親は自分のことを気にかけてくれる×友だちとめんどろな話しはしたくないので言わない（逆転）



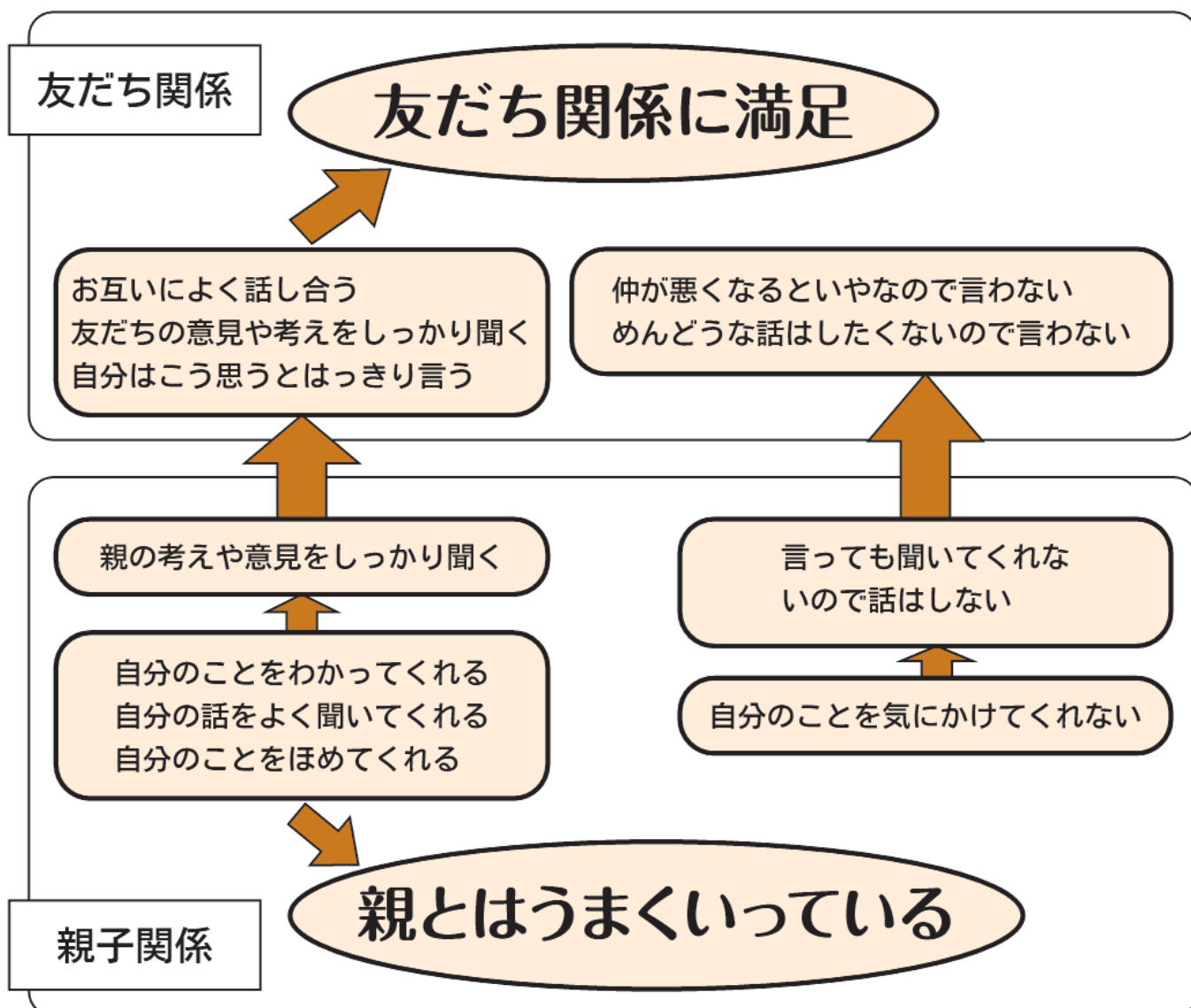
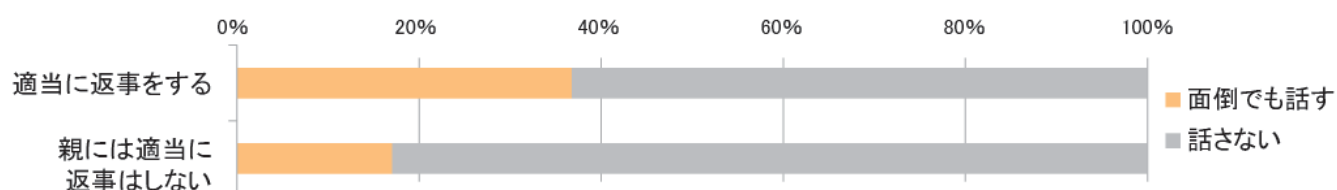
次に、親との対話指向と友だちとの対話指向との関係を見てみます（グラフ 62・グラフ 63）。こちらでも取り上げる基準は上記の議論と同様ですが、同じ場面でのコミュニケーションのとり方を尋ねているだけに、相関係数の値は少し高めに出ていますし、統計的に有意となった組み合わせの数も多くなりました。親に「こう思うとはっきり言う」子どもは、友だちにも「はっきり言う」（0.17）。「親の考えや意見をしっかり聞く」子どもは、友だちの意見もしっかり聞くし（0.19）、よく話し合う（0.18）傾向があるとなります。そしてその反対のパターンとして、親の言うことを「わかったふりをして、適当に返事をする」子どもは、友だちとも「めんどろな話しはしたくないので言わない」となります（0.22）。あるいは、「言っても仕方がないのでだまって従う」という子は、やはり友だちと面倒な話しはしたがらず（0.18）、親と「気まずくなるので従う」という子は、「友だちと合わせるようにする」傾向があります（0.19）。

全部は取り上げませんでしたが、対親／対友だちの非対話指向的な回答の間の相関関係に、対話指向的な回答の間よりも多くの有意な関係が認められました。ある年齢までに家庭で身に付けられたコミュニケーションのとり方は、他の関係にも反映されると考えざるをえません。ただし、あくまでも一定の傾向ですので、親子関係のあり方が完全に友人関係と重なるわけではありませんし、グラフにも見るように異なる対話指向を示す子どもも多くいることは確認しておくべきことでしょう。対教員、対友人との関係で、自らが尊重される、大切に扱われるという良好な関係を多く経験していくこともまた重要であり、その点では学校教育の果たす役割が大きく重要であることを最後に確認して終わりたいと思います。

グラフ 62 親は自分の話をよく聞いてくれる×友だちの意見をしっかり聞く



グラフ 63 親には適当に返事をする×友だちとめんどろな話はしたくないので言わない（逆転）



VII 全体の構成と未検討部分についての補論

1 調査票の構成から

本調査は、冒頭の概要で述べられているとおり、近年の他の調査で示される子どもたちの高い幸福感について、より詳細に検討してみようという意図のもとに企画されました。そのため、一つの着眼点は、困難との向き合い方と合わせて検討してみることでした。つまり、難しいことをただ避けることで幸福感を得ているようなことはないのかという疑問があったわけです。そのため、対人面での困難な局面での対応の仕方を聞いたり、より一般的に困ったときにどうしているのかを尋ねたりしました。幸い、こうした疑念はよい意味で外れてくれましたが、興味深い問題でもあり、第V章や第VI章で個々に取り出して検討してあります。

2 本調査における「幸福感」

もう一つ、子どもたちの「幸福感」について再検討する上で注意した点があります。「幸福感」自体の捉え方や聞き方です。幸福感というものを、ただ「今、幸福ですか？」と聞いて把握できるものなのかという疑問がありました。実際、「主観的幸福感」をいかに測定するかは様々な研究領域で大問題となっており、少しでもこうした議論を取り入れた調査にしたいと思いました。そこで、心理学においてなされている議論になりますが、伊藤裕子ら（2013）の「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」（『心理学研究』74(3)所収）を主に参照しました。

伊藤たちも WHO などで行われてきた主観的幸福感の測り方を土台にして、幸福感というものがより多面的・複合的に構成されていることを意味する尺度を提案し、その適切性を検討しています。具体的には、「幸福感」を5つの要素（領域）に分解し、それぞれについて3つの質問項目を用意することで、より妥当性の高い幸福感を測定するというものです。5つの要素とは、「人生に対する前向きな気持ち」「達成感」「自信」「至福感」「人生に対する失望感」です。実際の質問項目に即して、もう少し分かりやすく言いますと、現在の生活・人生についての端的な幸せ感覚や有意味感に関わる項目の他に、諸々の困難にも対応していけるといった自己効力感や不安に関わる項目が複数含まれ、さらに社会的地位などについて抱いていた期待に比しての獲得感や達成感、身近な環境や人類への所属感や一体感といった質問もなされていました。

しかし、小中学生に地位達成感や人類との一体感などをそのまま聞くわけにもいきませんので、伊藤らの5要素15質問を参考にしつつ、我々なりに言葉を選び、Q17の8つの質問を考案しました。そのため、本来的には、この8質問への回答を（なんらかの統計的処理を通して）統合した値が、その子どもの「幸福感」レベルを示すものになります。しかし、小中学生が対象で、かつごく限られた時間内に回答してもらう調査票ということで、その要素や質問数において、上記の心理学研究とはかなり異なるところも生じてしまい、その尺度としての妥当性は学術的には保障できないものとなりました。また、簡便さ・わかりやすさの観点からも、この所報では、幸福感のレベルを統合的に測ることはせず、Q17(1)「毎日を楽しんでいますか」への回答を幸福感（高／低）として第Ⅲ章で検討し、Q17(7)「難しいことが起こっても、解決できる自信がありますか」への回答を自己効力感（高／低）として第Ⅳ章で検討しました。そのため、一見して、別のことをそれぞれ扱っているような形にはなりましたが、「主観的幸福感」に関する研究蓄積に鑑みれば、この2章は幸福感を2つの要素（領域）において検討したものとと言えます。

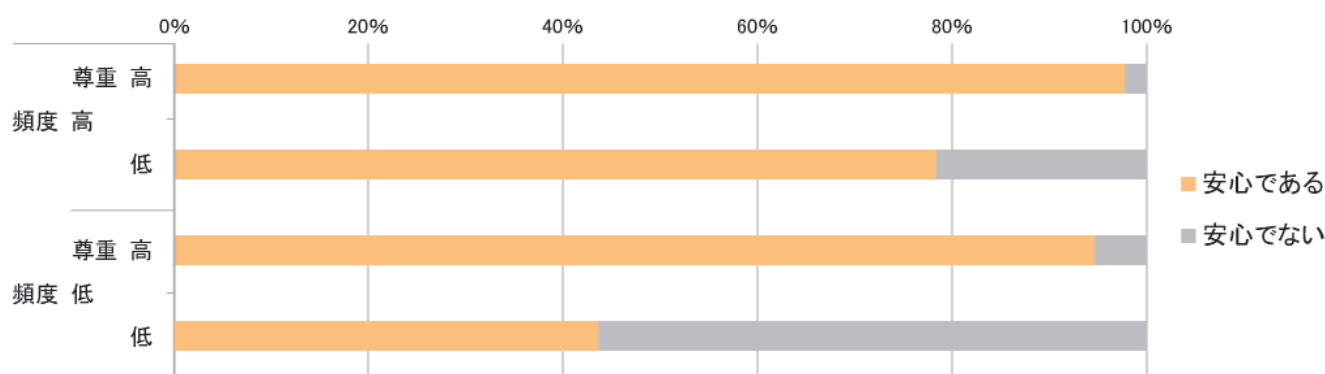
3 未検討の部分について①家族における安心感

しかし、Q17 のなかで要素（領域）としても、所報のここまでで言及できていない部分があります。以下では、(3)「学級の中で、安心して生活していますか」と(4)「家族の中で、安心して生活していますか」について、多少とも検討を加えておきたいと思います。Q17 の 8 質問のなかでの相関係数を算出しますと、「毎日楽しい」「今の生活幸せ」と、「学級で安心」とはそれぞれ 0.48、0.41 であり、「家庭で安心」とはそれぞれ 0.37、0.38 でした。これらの値は、他の自己効力感に関わる質問や「楽しみ」の有無、将来への心配についての質問よりも強い相関を示しており、小中学生の幸福感覚にとって、とりわけ重要な要素であると思われます。

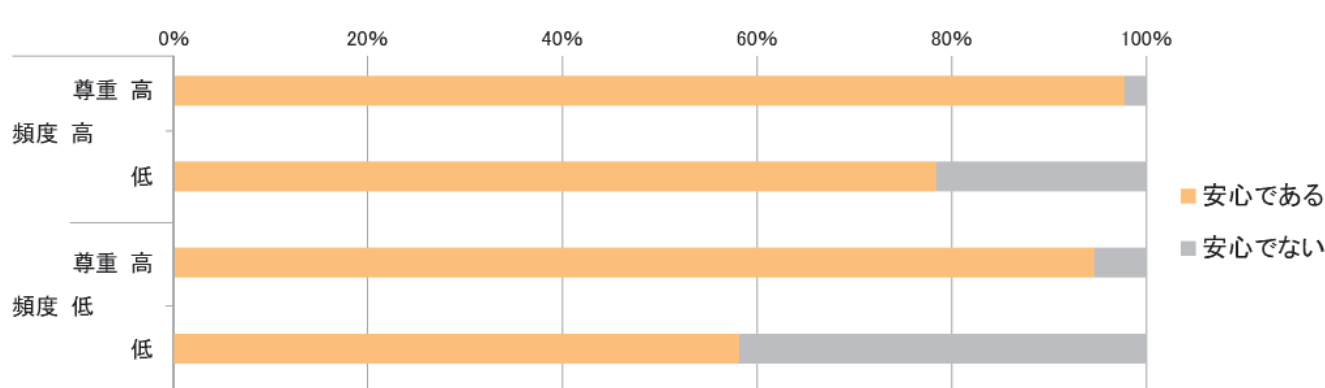
まず、家庭での安心感について触れておきましょう。親子関係について質問した項目がどのように安心感に関係しているのかを調べました。クロス表を示すため、変数について説明を加えておきます。Q13 の会話頻度は 4 段階で聞いていますが、高／低の 2 段階にまとめました。Q14 の「どんな親か」という質問は 7 つありましたが、親子関係としてポジティブな回答を 1 点、ネガティブな回答を 0 点として合計し、「親の子ども尊重指向」(厳密には、親に尊重されていると子どもが思っていること)の尺度としました。平均値が 4.83 でしたので、5 点以上を高群、4 点以下を低群と 2 分しています。グラフ 65 は、会話頻度の高低を揃えた上で、「親の子ども尊重指向」の高低が安心感に対してもつ影響を検討したものです。

グラフ 64 会話頻度 × 親の子尊重指向 × 家庭安心

小学5年生



中学2年生



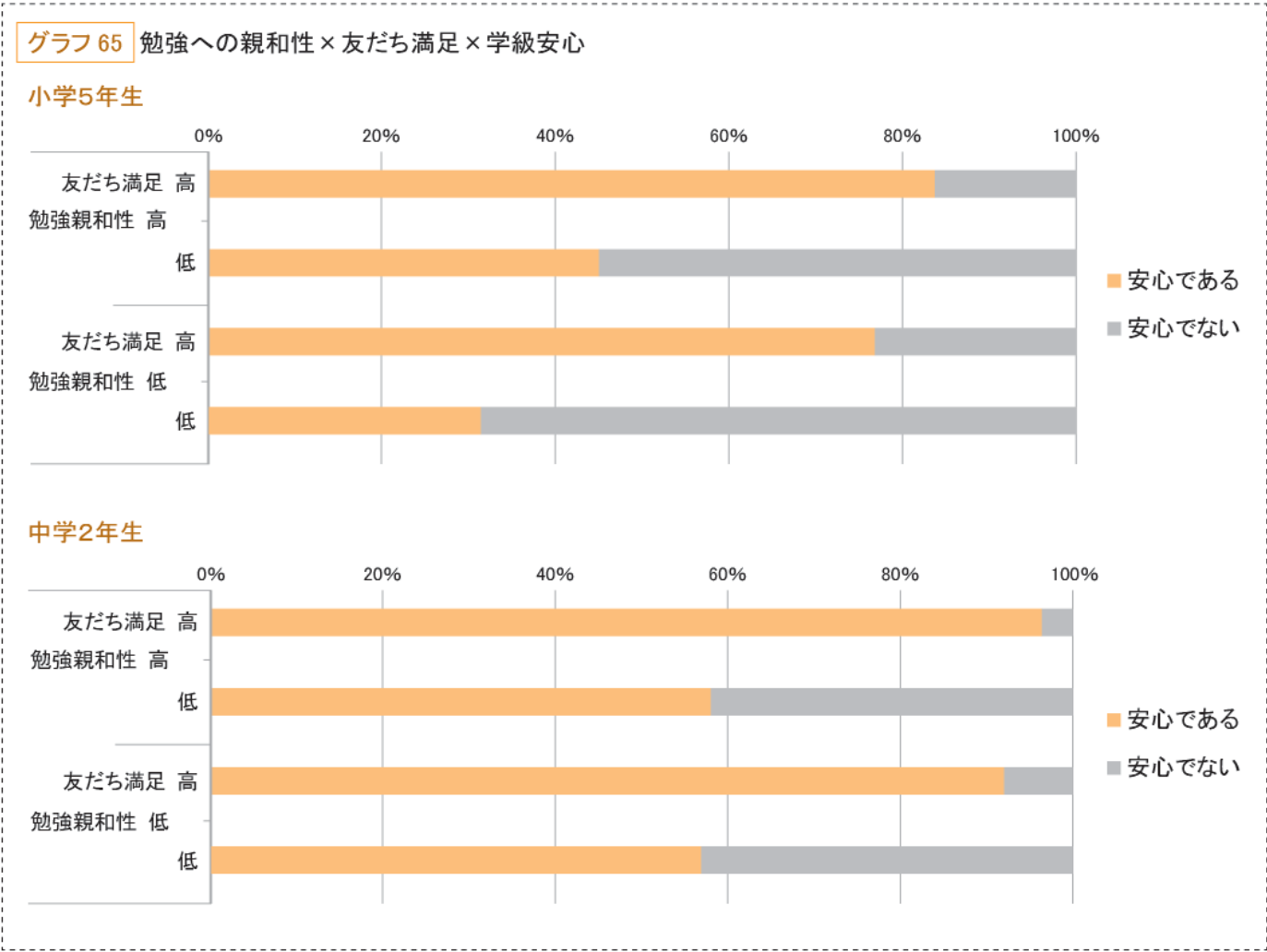
親子間の会話頻度は、家庭での居やすさの指標のようにも思われますが、グラフを見てわかりますように、まず会話頻度が同じでも「親の子ども尊重指向」が高い群において、安心感は小中学生ともに 20% 近く上がります。また、会話頻度が低群であっても、「尊重指向」が高い群については、会話頻度高群でかつ尊重指向高群の子どもとさほど差のない安心感のレベルを示しています。第Ⅵ章での検討も踏まえたと、特に

「自分の話をよく聞いてくれる」といったことを中心に、理解されているという思いも醸成され、家庭での安心感につながっているものと思われます。

4 未検討の部分について②学級における安心感

次に学級における安心感について検討します。この安心感に作用する要因として、調査票に基づいて考えますと、勉強（成績の自己評価、今後のとりくみなど）、友人との関係（満足度、意見が異なるときの対応法）、先生との関係（意見が異なるときの対応法）が考えられます。家庭での安心感について検討したときと同様、クロス表作成のために合成変数を作成しました。詳細は省略しますが、勉強については、Q 1「授業は楽しい」、Q 2「自分の成績」、Q 4「勉強へのとりくみ」（今後がんばりたいか？）を合わせ、「勉強への親和性」尺度とし、平均値を求め高／低の2群に分けました。友人関係についてはQ 6「いっしょにいて楽しい」とQ 7「友だち関係に満足」の2問の回答を合計し、やはり平均値により「総合的な満足感」として高／低群に分けました。先生については、Q 9「先生から注意されたとき…」の対応についての6質問への回答を「先生との対話指向」という観点からポジティブな場合を1、ネガティブな場合を0とし合計、平均値によって高／低群と分けました。

結論としては、学級での安心感に与える影響としては、友人についての総合的満足感に圧倒的に影響力があり、次いで勉強への親和性、最後にいささか弱い傾向がありますが先生との対話指向となります。ここでは、勉強と友人関係が安心感に与える影響を合わせて見るためにグラフ 65 を作成しました。



勉強への親和性では同じ群に属していても、友だちについての総合的満足感の高低で学級安心感が著しく異なることが見て取れます。そして、同時に気がつかれるとおり、勉強への親和性の高群と低群を見比べると、若干高群に安心感が高い傾向はあるものの、その差はいたって小さなことです。小学生に比べ、中学生ではさらにその傾向が強まります。友人との関係がもつ影響力の強さを再確認すると同時に、学級での安心があまりにも人間関係に大きく左右されることについては注意も必要そうです。



VIII まとめ

14ページのグラフをご覧ください。「授業は楽しいと思いますか」の質問に、「とても楽しい」と「まあ楽しい」と答えた子どもたちは、小学5年生84.9%、中学2年生77.3%という数値になっています。また、「学級の中で安心して生活していますか」の質問に、小学5年生73.7%、中学2年生79.9%は、「はい」と答えています。

子どもたちの多くは、授業を楽しく感じ、学級の中で安心して学校生活をおくっていることがわかります。静岡県の先生方の、日々の熱意と工夫や配慮のある教育活動が、一定の成果をもたらしていることと受け止めてよいのではないのでしょうか。他の友だちとの関係、親との関係、家族の中での安心感も良好な結果でした。

このような子どもたちの「幸福感・満足感」や、他の質問によって明らかになった「自己効力感の高さ」「困難に向かう力」は、何によって育まれるのか、子どもたちの環境（友だち、先生、親）とどのような関わりがあるのか、友だち関係や親子関係はどうか等について、第Ⅲ章から第Ⅵ章までにまとめました。

○ 子どもたちの「幸福感・満足感」に影響を与えているのは？

まず、やはり友だち関係が「幸福感・満足感」に大きく影響を与えていました。また、親子関係も大きな要因でした。親子関係が「幸福感・満足感」をもたらす要因として、経済的、物質的に恵まれているということより、親子の日常的な会話があるかどうか、中学生に至っては会話の頻度も大事ですが、それ以上に親がしっかり注意してくれる、親が自分のことをわかってくれるかどうか大きいという結果でした。

○ 「自己効力感」をもつ子どもたちの「幸福感・満足感」はどうか？

自己効力感の高い子どもは、友だち関係、親子関係の満足度が高いという結果でした。満足度を高める要因は、友だちや教員、親との信頼関係が大きいこともわかりました。その信頼関係は、『話す、聞く、話し合う』という基本的なコミュニケーションにより醸成されるということもわかりました。

○ 困難にぶつかったとき自ら考え逃げずに努力する子どもは、どんな子どもか？

困難にぶつかったとき自ら考え逃げずに努力する子どもは、友だちと意見や考え方が違ったとき友だちの意見や考えを聞くことができる子どもです。また、親が話をよく聞いて（尊重して）くれたり、いけないところは注意してくれたらするという親との関係をもっている子どもです。困難にぶつかったとき、一人で考え努力するという個人型、友だちや親、先生に相談するという救援型、どちらも他者から認められているということや相談できる環境があることが非常に大切であると言えるようです。

○ 友だち関係や親子関係が子どもたちの「幸福感・満足感」にどのような影響を与えているのか？

友だちと意見や考えが違ったとき、「お互いによく話し合う」、「友だちの意見や考えをしっかりと聞く」、「自分はどう思うとはっきり言う」というような友だちと正面から向き合う子どもほど、友だち関係に満足しています。また、自分の親は「自分の話を聞いてくれる」と感じている子どもは親の話をしっかりと聞くということや、自分の親は「自分のことを尊重してくれる」と感じる子どもは友だちを尊重するという傾向にあることがわかりました。さらに、親と考えや意見が違うとき、親に「自分はどう思うとはっきり言う」子どもは、友だちと考えや意見が違うとき、友だちにも「自分の考えや意見をはっきり言う」ということがわかりました。同様に、「親の考えや意見をしっかりと聞く」子どもは、「友だちの考えや意見をしっかりと聞く」ということもわかりました。

私たち調査部の研究目的は、調査を通して子どもたちの幸福感・満足感を明らかにするだけでなく、本調査の結果や分析・考察を学校現場の教育実践に活かしていただくことです。

繰り返しになりますが、自己効力感が高い子どもは、友だち関係、親子関係の満足度が高いということがわかりました。この満足度は、友だちどうし、親子の信頼関係が大きく関わり、その信頼関係は『話す、聞く、話し合う』という基本的なコミュニケーションにより醸成されるということです。

これらのことは、先生方にとっておそらく経験値としてわかっていることだとは思いますが、私たち調査部の研究によって、改めて明らかになりました。言うなれば、先生方がもっている子ども観、指導観等を改めて検証したということです。学級づくり、生徒指導、人間関係づくり等の教育実践に活かせるものはあると思います。学級懇談会の資料等としてぜひ活用してみてください。また、各支部で行われる子どもの未来を語る会、地域教育懇談会、分会での学習会等にも活用を場を拡げてみてください。

調査部では、本所報の使い方やマニュアルの作成についても議論をしました。

しかし、重要なことは、本所報をどこで、どのように活用するかなど、先生方や各支部での主体的で自由な発想のもと、本調査の結果と分析を教育実践や教研活動に活かすことだと考えました。

この所報を積極的に活用し、教育実践につなげていただけたら幸いです。

【調査部メンバー】

共同研究者 荻野 達史（静岡大学人文社会科学部教授）

所 員	鈴木 利宏（田方支部長）	2015 ～ 2016
”	井上 幹夫（駿東支部長）	2015 ～ 2016
”	深山 勝弘（静岡支部長）	2015 ～ 2016
”	福田 義久（志太支部長）	2015
”	浅岡 敏希（榛原支部長）	2016
”	相曾 智司（磐周支部長）	2015 ～ 2016
”	小山 貴広（浜松支部長）	2015
”	内山 靖行（浜松支部副支部長）	2016
研 究 所	所長 大石 茂生	2015 ～ 2016
”	事務局長 平柳有紀子	2015
”	事務局長 山本 裕香	2016
”	事務局次長 野中 律宏	2015
”	事務局次長 小濱 伸哉	2016





静岡県教育事業団体全体でのサポート

～県内の児童・生徒、教職員の皆様に向けて～

小中学生国際交流体験団

協力：国際観光株式会社

- 20年にわたり、延べ3,000人以上の小中学生をカナダ・オーストラリアへ
- ホームステイ・地元学校への授業参加でグローバル教育の充実へ



小中学生国際交流体験団

教育講演会

- 24会場 10,781人の出席（平成27年）
- 小・中・高校の先生がた、教育関係者の知識と教養の向上をサポート



教育講演会

静岡県教職員芸術祭

事務局：静岡県教職員組合内

- 教職員・退職教職員の文化活動の振興をめざして

一般財団法人 静岡県教職員互助組合

生活に安心・元気・うるおいを！

経済支援 給付・貸付事業 健康支援 健康診断



夏休みの生活 生きがい支援 福祉・文化 公益・相談事業 ライフプランの応援団
静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 2F TEL:054-254-3626
互助組合ホームページへは、[ここ](#)で検索

静岡県教職員生活協同組合

STC 「教育研究助成」「自作教材・教具創作助成」を通して教職員生活協は教育活動を支えます。

チラシ・カタログによる自主供給と組織供給を主体とし、巡回供給、ガソリン供給、マンション、指定店など教職員のみなさまの生活をサポートしています。



静岡市駿河区登呂 6-14-27 TEL 054-282-2140
HP <http://www.kyousyokuin-seikyo.com/>

静岡県学校生活協同組合連合会

STC 安心・安全な教材教具を通して 学生協は子どもの未来を支えます。

静岡県内の各地区学生協と連携して学用品を企画開発し、供給しています。



静岡市駿河区登呂 6-14-27 TEL 054-282-2166
HP <http://www.kyousyokuin-seikyo.com/>

一般社団法人 静岡県出版文化会

教育活動を支援する教育文化事業や子どもたちの学習活動を支える図書教材研究事業を行っています。県内各地から、毎年多くの先生がたが両事業に参加しています。

夏休み子ども学習電話相談室



静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 3F TEL 054-255-4451
HP <http://www.syutubun.com/>

静岡県教育事業団体連絡会

教育と生活をサポート

私たち
教育事業団体は
みなさまの
サポーターです

公益財団法人 日本教育公務員弘済会静岡支部

教育振興（奨学・教育研究助成・教育文化）、福祉、共済（提携保険）の各事業で子どもたち、先生がた、保護者のみなさまの教育・研究活動を支援するとともに先生がたの生涯の安心をお届けしています。



静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 4F TEL 054-205-5130



株式会社 静岡教育出版社

環境・体にやさしい教材づくり

「静岡県産」の図書教材をお届けします!!

静岡県の先生方が、静岡県の児童生徒のために作成した図書教材



「カシリス」



「学習診断シリーズ」

静岡市駿河区曲金 5-5-38 TEL 054-281-8870
HP <http://www.shizedpu.co.jp/>



国際観光株式会社

学ぶ心を広げる価値ある修学旅行の推進

弊社では修学旅行の安全対策と共に学校教育目標・重点目標を大切にしたい社員教育を行い、魅力ある教育旅行を提供しています。



本社：静岡市葵区伝馬町 6-18 109ビル 5F TEL 054-251-7220
HP <http://www.kokusai-kanko.co.jp/>

<http://www.stu.jp/>

最後までお読みいただきありがとうございました。この所報をお読みになったご意見・ご感想をお聞かせください。皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かします。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所

FAX: 054-255-5110

Mail: sler@stu.or.jp (ご意見専用研究所メールアドレス)

